

国道 11 号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 6 冊

## 三 殿 北 遺 跡

2020. 3

香 川 県 教 育 委 員 会  
国 土 交 通 省 四 国 地 方 整 備 局



# 序 文

本書には、国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市三殿に所在する三殿北遺跡（みどのきたいせき）の報告を収録しています。

三殿北遺跡では、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が出土しております。とくに、古代から中世初頭にかけての出土遺物には、緑釉陶器や越州窯青磁、土馬や斎串などのほかに、朱墨硯や猿面硯といった陶硯類、銅碗（二元系高錫青銅容器）、精錬滓など、県下では出土例の少ない遺物が含まれ、鉄や銅の生産に関わる官衙関連遺跡の可能性が指摘されるなど、貴重な資料を得ることができました。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理、報告書の刊行に至るまでの間、国土交通省四国地方整備局ならびに関係諸機関、地元関係者各位には、多大なご協力とご指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和2年3月

香川県埋蔵文化財センター  
所長 西岡 達哉



# 例 言

1 本報告書は、国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴い発掘調査を実施した、香川県東かがわ市三殿に所在する三殿北遺跡（みどのきたいせき）の報告を収録している。

2 発掘調査は、香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが調査担当者として実施した。

3 発掘調査時及び整理作業時の調査担当機関における組織構成は、次のとおりである。

（第1次調査）

期間 平成28年10月1日～平成29年1月31日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 山下平重・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 増田宏 次長 森格也

調査課 課長 森格也（兼務）（調査担当）文化財専門員 小野秀幸

（第2次調査）

期間 平成29年6月1日～平成29年8月31日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 信里芳紀・乗松真也

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 増田宏 次長 森格也

調査課 課長 森格也（兼務）（調査担当）文化財専門員 宮崎哲治 技師 大山裕矢

（整理作業）

期間 平成30年7月1日～平成31年1月31日

香川県教育委員会事務局生涯学習・文化財課

総括 課長 小柳和代 副課長 片桐孝浩

文化財グループ 主任文化財専門員 信里芳紀 文化財専門員 真鍋貴匡

香川県埋蔵文化財センター

総括 所長 西岡達哉 次長 時松弘志

資料普及課 課長 古野徳久（兼務）（整理担当）主任文化財専門員 蔵本晋司

4 調査及び整理作業において次の方々、関係機関の協力を得た。

香川将慶、松本和彦、森下英治、高松市埋蔵文化財センター、東かがわ市教育委員会、地元自治会、地元水利組合（順不同、敬称略）

- 5 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆・編集は蔵本晋司が担当した。
- 6 本報告書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第Ⅳ系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は次の略号により表示した。  
SB 掘立柱建物 SP 柱穴・小穴 SK 土坑 SE 井戸 SD 溝  
SR 自然河川 SX 性格不明遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は水平線の標高線(単位m)である。
- 9 遺構断面図中の注記の色調は、一部を除いて小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖 32 版』及び長崎盛輝『新版 日本の伝統色 その色名と色調』, 青幻舎を参照した。また、残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 石器実測図中の外郭線周囲の線は潰れの範囲を示している。図の左側に展開した面を A 面、右側の面を B 面として記述する。剥片石器の場合は A 面が背面、B 面が腹面となる。石材は表記がない限りサヌカイトである。
- 12 遺物の時期や分類は次の文献を参照した。  
弥生土器：信里芳紀 2002 「讃岐地域における弥生時代前期から中期前半の様相－集落の検討を中心にして－」  
『第 16 回古代学協会四国支部研究大会発表要旨集 弥生時代前期末～中期初頭の動態』, 古代学協会四国支部  
信里芳紀 2005 「讃岐地方における弥生中期から後期初頭の土器編年－凹線文期を中心にして－」  
『香川県埋蔵文化財センター研究紀要Ⅰ』, 香川県埋蔵文化財センター  
信里芳紀 2011 「弥生中期後半から古墳初頭の土器編年」『独立行政法人国立病院機構善通寺病院統合事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 2 冊 旧練兵場遺跡Ⅱ』, 香川県教育委員会・独立行政法人国立病院機構善通寺病院  
蔵本晋司 2019 「香東川下流域産土器群の基礎的研究」『県道中徳三谷高松線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 1 冊 上林遺跡』  
須恵器： 田辺昭三 1981 『須恵器大成』, 角川書店  
大阪府立近つ飛鳥博物館編 2006 『年代のものさし -大阪府立近つ飛鳥博物館図録 40 -』  
佐藤竜馬 1993 「香川県十瓶山窯跡群における須恵器編年」『関西大学考古学研究室開設 40 周年記念 考古学論叢』, 関西大学文学部考古学研究室(本文中では、十瓶山編年と称する。)  
高橋照彦 2003 「平安京近郊の緑釉陶器生産」『古代の土器研究 -平安時代の緑釉陶器 生産地の様相を中心に-』, 古代の土器研究会

- 中・近世：大橋康二 2000 「九州陶磁概論」『九州陶磁の編年』、九州陶磁学会  
佐賀県立九州陶磁文化館 1984 『国内出土の肥前陶磁』
- 佐藤竜馬 1995 「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 18 冊 国分寺楠井遺跡』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団（本文中では、楠井編年と称する。）
- 佐藤竜馬 2000 「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 空港跡地遺跡Ⅳ』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター（本文中では、空港跡地編年と称する。）
- 佐藤竜馬 2003 「近世在地土器の検討」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 4 冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅱ』、香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 佐藤竜馬 2016 「讃岐における古代～中世土器編年をめぐる基礎作業（1） 9世紀後葉～11世紀前葉の供膳器種」『香川県埋蔵文化財センター年報 平成 26 年度』、香川県埋蔵文化財センター（本文中では、佐藤編年と称する。）
- 太宰府市教育委員会編 2000 『大宰府条坊跡XV - 陶磁器分類編 -』
- 白神典之 1992 「堺摺鉢考」『東洋陶磁』第 19 号、東洋陶磁学会
- 乗岡実 2000 「中世の備前焼甕（壺）の編年案・紀年銘資料にみる大甕（壺）の変遷」『第 2 回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乗岡実 2000 「備前焼播鉢の編年について」『第 3 回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会
- 乗岡実 2002 「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』、岡山市教育委員会
- 藤澤良祐 1987 「本業焼の変遷（1）」『研究紀要Ⅵ』、瀬戸市歴史民俗資料館
- 藤澤良祐 1993 『瀬戸市史 陶磁史篇』、瀬戸市
- 松本和彦 2003 「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第 5 冊 高松城跡（西の丸町地区）Ⅲ』、香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

# 本文目次

第1章	調査にいたる経緯と経過	
第1節	調査の経緯	1
第2節	発掘調査と整理作業の経過	1
第2章	立地と環境	
第1節	地理的環境	4
第2節	歴史的環境	8
第3章	発掘調査の成果	
第1節	調査の方法と報告書の作成	13
第2節	基本層序	13
第3節	遺構・遺物	32
第4章	自然科学的分析の成果	
第1節	金属資料の鉛同位体比	135
第2節	三谷北遺跡出土鉄滓の分析調査	135
第3節	出土試料の放射性炭素年代測定	135
第4節	須恵器付着の赤色顔料の蛍光X線分析	135
第5節	木製品・加工木の樹種同定	135
第6節	三殿北遺跡出土大型植物遺体の同定	135
第5章	まとめ	
第1節	遺構の変遷	152
第2節	三殿北遺跡出土の銅碗について	140
第3節	香川県下の井戸についての基礎的検討	146
第4節	三殿北遺跡出土の陶硯について	166



# 挿図目次

第1図	遺跡位置図	1	第56図	SD115・SD118平・断面・出土遺物実測図	73
第2図	大内白鳥バイパス関連調査遺跡位置図	2	第57図	SD128平・断面・出土遺物実測図	75
第3図	遺跡周辺地形分類と遺跡分布	5	第58図	SD129・SD139・SD144 平・断面・出土遺物実測図	77
第4図	調査区割図	9	第59図	SD145平・断面・出土遺物実測図	78
第5図	1区南壁・2区東壁土層断面図	11	第60図	SD157～SD159平・断面・出土遺物実測図	79
第6図	2区北壁土層断面図	12	第61図	SD161平・断面図	81
第7図	2区南壁土層断面図	13	第62図	SD161出土遺物実測図1	83
第8図	2区西壁土層断面図	14	第63図	SD161出土遺物実測図2	84
第9図	2区トレンチ1・トレンチ2土層断面図	15	第64図	SD161出土遺物実測図3	85
第10図	3区西壁土層断面図	16	第65図	大型灌漑水路(SD161)推定位置図	87
第11図	3区南壁・4区試掘トレンチ土層断面図	17	第66図	SX05平・断面図	89
第12図	5区東壁・南壁土層断面図	18	第67図	SX05出土遺物実測図	90
第13図	5区西壁土層断面図	19	第68図	第2次調査区第2面鋤溝群平・断面図	91
第14図	6区西壁・南壁土層断面図	20	第69図	第2次調査区第2面鋤溝群出土遺物実測図	92
第15図	7区北壁・南壁・東壁土層断面図	21	第70図	包含層2出土遺物実測図	93
第16図	SR02・SR03・SX05・SD161重複関係	22	第71図	近世遺構配置図	95
第17図	弥生時代遺構配置図	23	第72図	SK18平・断面・出土遺物実測図	96
第18図	SR01平・断面・出土遺物実測図	25	第73図	SK19～SK21平・断面・出土遺物実測図	97
第19図	SR02・SR03平・断面図	26	第74図	SE01平・断面・出土遺物実測図	99
第20図	SR02・SR03出土遺物実測図1	27	第75図	SD142・SD143・SD146 平・断面・出土遺物実測図	101
第21図	SR03出土遺物実測図2	29	第76図	SD148平・断面・出土遺物実測図	102
第22図	古代遺構配置図	31	第77図	第2次調査区第1面鋤溝群平・断面図	103
第23図	SE02平・断面・出土遺物実測図	33	第78図	第2次調査区第1面鋤溝群出土遺物実測図	105
第24図	SX01平・断面図	34	第79図	第1次調査区第1面鋤溝群 平・断面・出土遺物実測図	106
第25図	SX01出土遺物実測図1	35	第80図	遺構外出土遺物実測図1	107
第26図	SX01出土遺物実測図2	36	第81図	遺構外出土遺物実測図2	108
第27図	SX02平・断面・出土遺物実測図	37	第82図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図 (A式図)	110
第28図	SX03平・断面・出土遺物実測図	38	第83図	鉛同位体比を用いた産地推定の概念図 (B式図)	110
第29図	SX04平・断面図	39	第84図	銅碗の鉛同位体比(A式図)	111
第30図	中世遺構配置図	41	第85図	銅碗の鉛同位体比(B式図)	111
第31図	SB01平・断面図	42	第86図	古墳時代銅碗が示す鉛同位体比分布 (A式図)	112
第32図	SB02平・断面図	43	第87図	古墳時代銅碗が示す鉛同位体比分布 (B式図)	112
第33図	SB03平・断面図	44	第88図	暦年校正結果	123
第34図	SB04平・断面図	45	第89図	赤色顔料の蛍光X線分析結果	125
第35図	SB05平・断面・出土遺物実測図	46	第90図	遺構変遷図1	137
第36図	SB06平・断面・出土遺物実測図	47	第91図	遺構変遷図2	138
第37図	SB07平・断面・出土遺物実測図	48	第92図	遺構変遷図3	139
第38図	柱穴出土遺物実測図	49	第93図	遺構変遷図4	141
第39図	SK01～SK03平・断面図	50	第94図	金属製容器編年図	143
第40図	SK04平・断面図	51	第95図	井戸の分類案	147
第41図	SK04出土遺物実測図	53	第96図	香川県における井戸の変遷	161
第42図	SK05～SK07平・断面図	55	第97図	武家屋敷井戸分布図	162
第43図	SK08平・断面・出土遺物実測図1	56			
第44図	SK08出土遺物実測図2	57			
第45図	SK08出土遺物実測図3	59			
第46図	SK08出土遺物実測図4	60			
第47図	SK09～SK12平・断面・出土遺物実測図	61			
第48図	SK13～SK17平・断面・出土遺物実測図	63			
第49図	SD012・SD019・SD140 平・断面・出土遺物実測図	65			
第50図	SD021・SD023・SD026 平・断面・出土遺物実測図	66			
第51図	SD029・SD038平・断面・出土遺物実測図	67			
第52図	SD102平・断面・出土遺物実測図1	69			
第53図	SD102出土遺物実測図2	70			
第54図	SD103・SD104平・断面・出土遺物実測図	71			
第55図	SD105・SD138平・断面・出土遺物実測図	72			

# 表目次

表1	試料(銅碗)の蛍光X線分析結果(mass%)	109	表21	武家屋敷井戸分布図記載の居住者(1)	163
表2	試料(銅碗)の鉛同位体比	111	表22	武家屋敷井戸分布図記載の居住者(2)	164
表3	供試材の履歴と調査項目	118	表23	県内出土杯蓋硯(1)	167
表4	供試材の化学組成	118	表24	県内出土杯蓋硯(2)	168
表5	出土遺物の調査結果のまとめ	118	表25	県内出土杯蓋硯(3)	169
表6	測定試料および処理	122	表26	県内出土朱墨硯	170
表7	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果	123	表27	土器観察表(1)	175
表8	分析結果	125	表28	土器観察表(2)	176
表9	器種別の樹種同定結果	126	表29	土器観察表(3)	177
表10	木製品の樹種同定結果	129	表30	土器観察表(4)	178
表11	種実同定結果	134	表31	土器観察表(5)	179
表12	古代以降の香川県内出土試料の 鉛同位体比分析結果	142	表32	土器観察表(6)	180
表13	香川県内検出の井戸(1)	149	表33	土器観察表(7)	181
表14	香川県内検出の井戸(2)	150	表34	土器観察表(8)	182
表15	香川県内検出の井戸(3)	151	表35	土製品観察表	182
表16	香川県内検出の井戸(4)	152	表36	土錘観察表	183
表17	香川県内検出の井戸(5)	153	表37	瓦類観察表	183
表18	香川県内検出の井戸(6)	154	表38	石器・石製品・骨角器観察表	184
表19	香川県内検出の井戸(7)	155	表39	木器・木製品観察表	184
表20	香川県内検出の井戸(8)	156	表40	金属器観察表	185

# 写真目次

写真1	才野池用水番屋川取水口近景	88	図版12	遺構写真4(第1次調査区)	191
図版1	銅碗の蛍光X線分析結果	113		2区SK19土層(西より)	
図版2	椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA調査結果	119		2区SK20土層(北より)	
図版3	椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA調査結果	120		2区SD143土層(北より)	
図版4	椀形鍛冶滓の顕微鏡写真・EPMA調査結果	121		2区SD144・SD145全景(西より)	
図版5	試料採取位置および赤色顔料の生物顕微鏡写真	125		2区SD144・SD145全景(東より)	
図版6	木製品の光学顕微鏡写真(1)	130		2区SD144土層(東より)	
図版7	木製品の光学顕微鏡写真(2)	131		2区SD145土層(東より)	
図版8	大型植物遺体	135		2区SX02全景(北より)	
図版9	遺構写真1(第1次調査区)	188		2区SX02土層(西より)	
	1・2区南半部全景(西より)		図版13	遺構写真5(第1次調査区)	192
	1区遺構検出状況(西より)			2区SX03・SX04全景(北より)	
	1区全景(西より)			2区SX03土層(北より)	
	1区南壁基本層序(北より)			2区SX03土層(東より)	
	1・2区遠景(西より)			2区SX03西半土層(北より)	
図版10	遺構写真2(第1次調査区)	189		2区SX04土層(北より)	
	2区SD148検出状況(西より)		図版14	遺構写真6(第1次調査区)	193
	2区SD148土層断面(南西より)			2区SD161全景(西より)	
	2区SD148全景(北より)			2区SD161検出状況(西より)	
	2区SD157～SD158全景(西より)			2区SD161底面有機物層検出状況(東より)	
	2区SD158土層断面(西より)			2区SD161土層(東より)	
	2区SD157土層断面(西より)			2区SD161土層(西より)	
	2区南壁基本層序(北より)		図版15	遺構写真7(第1次調査区)	194
	2区東壁基本層序(西より)			3区北半全景(東より)	
図版11	遺構写真3(第1次調査区)	190		3区北半遺構検出状況(南西より)	
	2区北半全景(西より)			3区北半遺構検出状況(西より)	
	2区北半遺構検出状況(西より)			3区西壁基本層序(東より)	
	2区北壁土層(南西より)			3区南壁基本層序(北より)	
	2区SK19全景(西より)		図版16	遺構写真8(第1次調査区)	195

	3区全景(西より)		5区SD046遺物出土状況(東より)
	3区西半・4区全景(西より)		5区SD019遺物(193)出土状況(南より)
図版17	遺構写真9(第1次調査区)……………196	図版26	遺構写真18(第2次調査区)……………205
	3区SK18板材出土状況(南より)		5区2面全景(南より)
	3区SK18土層(南より)		5区2面東半遺構検出状況(北より)
	3区SK18全景(南より)		5区2面西半遺構検出状況(北より)
	3区SE02検出状況(南より)		5区2面全景(南より)
	3区SE02土層(東より)	図版27	遺構写真19(第2次調査区)……………206
図版18	遺構写真10(第1次調査区)……………197		6区全景(南より)
	3区SE02曲物出土状況(東より)		6区北半遺構検出状況(南より)
	3区SE02曲物内遺物出土状況(西より)		6区北半全景(南より)
	3区SE02最下段曲物出土状況(東より)		6区南半遺構検出状況(東より)
	3区SE02最下段曲物出土状況(南東より)		6区南半全景(東より)
	3区SE02全景(東より)	図版28	遺構写真20(第2次調査区)……………207
図版19	遺構写真11(第1次調査区)……………198		7区全景(南西より)
	3区SD145土層(西より)		7区遺構検出状況(南より)
	3区SD145検出状況(東より)		7区上層遺構全景(南より)
	3区SD142土層(西より)		第1次調査区遠景(第2次調査区より)
	3区SD142検出状況(東より)	図版29	遺構写真21(第2次調査区)……………208
	3区SD142全景(東より)		5区SB01全景(南より)
	3区SD146土層(西より)		5区SB03全景(南より)
	3区SD145・SD146全景(西より)		5区SB04全景(南より)
	3区SD145・SD146全景(東より)	図版30	遺構写真22(第2次調査区)……………209
図版20	遺構写真12(第1次調査区)……………199		6区SP099柱材出土状況(北より)
	3区SX01遺物出土状況(西より)		6区SP182遺物(85)出土状況(南より)
	3区SX01検出状況(西より)		6区SP161遺物出土状況(北より)
	3区SX01検出状況(東より)		6区SP201遺物(103・106)出土状況(南より)
	3区SX01遺物出土状況(東より)		6区SP173根石出土状況(南より)
	3区SX01遺物出土状況(南西より)		6区SP205遺物(97)出土状況(南より)
図版21	遺構写真13(第1次調査区)……………200		6区SP178石出土状況(南より)
	3区SX01南半部遺物出土状況(西より)		6区SP206遺物(114)出土状況(南より)
	3区SX01下半部土層(北より)	図版31	遺構写真23(第2次調査区)……………210
	3区SX01全景(西より)		5区SK04全景(東より)
	3区SX01全景(南東より)		5区SK04遺物(120)出土状況(南より)
	3区SX01下層遺物出土状況(東より)		5区SK04土層上半(東より)
	3区SX01南端部全景(南東より)		5区SK04遺物(131)出土状況(南より)
	3区SR02土層(西より)		5区SK04土層下半(東より)
	3区SR02・SR03土層(北より)		5区SK04遺物(126)出土状況(南より)
図版22	遺構写真14(第1次調査区)……………201		5区SK04遺物出土状況(南より)
	3・4区SR02・SR03全景(南東より)	図版32	遺構写真24(第2次調査区)……………211
	3区SR02下層遺物(9)出土状況(南より)		5区SK01土層(北より)
	3区SR02下層遺物(12)出土状況(西より)		5区SK05土層(南より)
	3区SR03木杭(29・31)出土状況(北より)		5区SK02土層(南より)
	4区SR02・SR03土層(北より)		5区SK06土層(北東より)
図版23	遺構写真15(第1次調査区)……………202		5区SK03土層(南より)
	3区SD161全景(東より)		6区SK07土層(南より)
	3区SD161全景(東より)		5区SK05全景(東より)
	3区SD161・SE01遠景(南より)		6区SK09土層(南より)
	3区SD161遺物(363)出土状況(南より)	図版33	遺構写真25(第2次調査区)……………212
	3区SD161遺物(331)出土状況(北より)		6区SK10土層(南より)
図版24	遺構写真16(第1次調査区)……………203		6区SK13土層(北より)
	4区SE01石組全景(西より)		6区SK11土層(南より)
	4区SE01上面検出状況(西より)		6区SK14土層(南より)
	4区SE01石組内土層(東より)		6区SK12全景(南より)
	4区SE01石組断面(東より)		6区SK15全景(南より)
	4区SE01石組基底石(東より)		6区SK13遺物(180)出土状況(北より)
図版25	遺構写真17(第2次調査区)……………204		6区SK15土層(南より)
	5区1面全景(北より)	図版34	遺構写真26(第2次調査区)……………213
	5区1面西半遺構検出状況(北より)		6区SK16土層(東より)
	5区1面東半遺構検出状況(北より)		

7区SK08遺物(153)出土状況(南東より)	
6区SK17土層(南より)	
7区SK08遺物(154)出土状況(西より)	
7区SK08全景(南より)	
7区SK08遺物(171)出土状況(南より)	
7区SK08土層(西より)	
7区SK08遺物(159・161)出土状況(西より)	
図版35 遺構写真27(第2次調査区)……………	214
5区SD019全景(南より)	
5区SD012遺物(184)出土状況(南より)	
5区SD019土層(北より)	
5区SD023全景(南より)	
5区SD019遺物出土状況(南より)	
5区SD023土層(南より)	
図版36 遺構写真28(第2次調査区)……………	215
5区SD021遺物(196)出土状況(西より)	
5区SD105遺物出土状況(南より)	
5区SD026土層(東より)	
5区SD105土層(南より)	
5区SD030土層(南より)	
5区SD103・SD105全景(東より)	
5区SD038土層(西より)	
図版37 遺構写真29(第2次調査区)……………	216
6区SD128土層(南より)	
7区SD102遺物(225)出土状況(西より)	
6区SD128遺物出土状況(北より)	
7区SD102遺物(237・250)出土状況(西より)	
6区SD138・SD139土層(南より)	
7区SD102土層(南より)	
6区SD139遺物(283)出土状況(北より)	
7区SK08とSD102重複(東より)	
図版38 遺構写真30(第2次調査区)……………	217
5区東端南壁土層(北より)	
5区北端東壁土層(西より)	
5区南端西壁土層(東より)	
5区SR01トレンチ西壁土層(東より)	
6区北端西壁土層(東より)	
6区東端南壁土層(北より)	
7区東端南壁土層(北より)	
6区SR01トレンチ土層(南より)	
図版39 遺物写真1(土器)……………	218
41・46・55・57・80・81・126・182・218・	
236・237・249・250・304・385・397	
図版40 遺物写真2(土器)……………	219
3・8・12・67・181・274・341・347・412・	
413・440	
図版41 遺物写真3(土器・土製品)……………	220
14・43・68・69・70・71・82・113・262・	
331・332・333・360・361・362・366・	
367・382・414・426・438・471・472・	
473・474・475・476	
図版42 遺物写真4(土器・土製品)……………	221
5・109・110・196・252・253・271・300・	
355・357・363・364・365・409・446・470	
図版43 遺物写真5(瓦類)……………	222
114・115・116・193・257・275・282・284・	
383・384・415・416・477	
図版44 遺物写真6(石器・石製品)……………	223
4・136・176・276・385・478・479・480・	
485	
図版45 遺物写真7(木製品)……………	224
26・27・28・29・30・31・32	
図版46 遺物写真8(木製品)……………	225
34・35・36・72・73・375	
図版47 遺物写真9(木製品)……………	226
119・137・138・139・140・141・142・143・	
150・151・152・153・154	
図版48 遺物写真10(木製品)……………	227
155・156・157・158	
図版49 遺物写真11(木製品)……………	228
159・160・161・165	
図版50 遺物写真12(木製品)……………	229
162・163・164・166・167・168・169・170・	
171・172・173・434	
図版51 遺物写真13(金属器・X線写真)……………	230
74・87・88・117・118・180・185・194・277・	
286・299・368・369・370・372・386・401・	
402・417・439・452・453・482	

## 付図目次

付図 上林遺跡平面図

## 第1章 調査にいたる経緯と経過

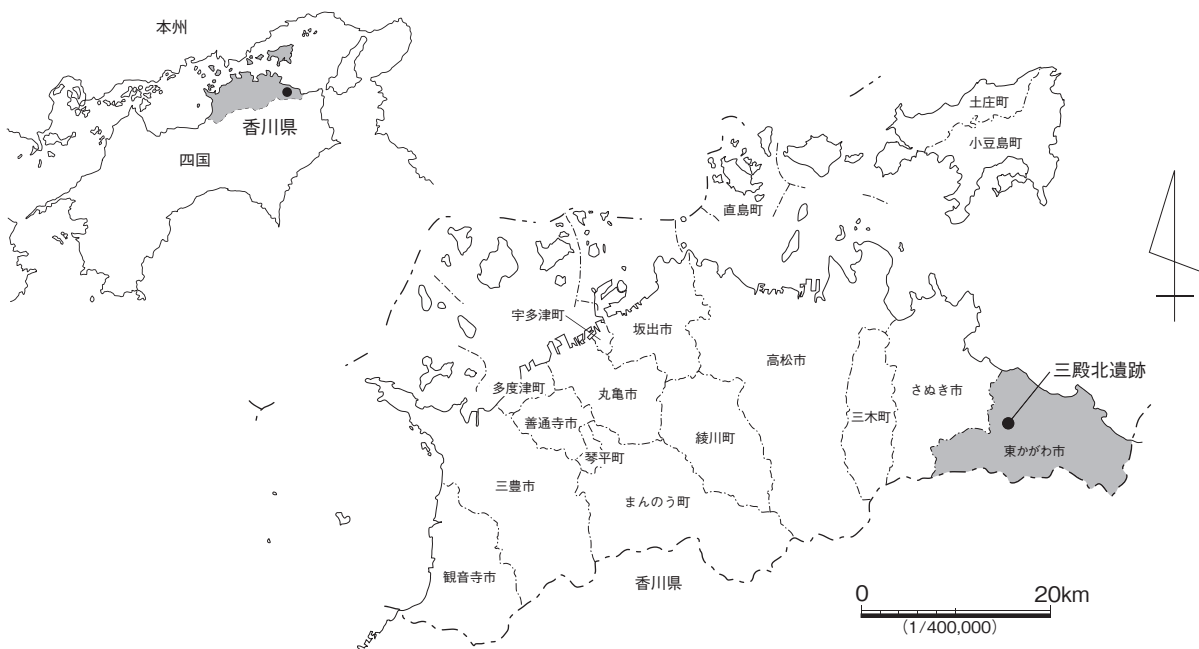
### 第1節 調査の経緯

一般国道11号大内白鳥バイパス改築工事に伴う埋蔵文化財の保護については、国土交通省四国地方整備局（以下、「国交省」という）から香川県教育委員会（以下、「県教委」という）が照会を受け、平成19年度より条件の整った2・3工区から順次県教委が試掘調査などを実施し、対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認した上で、文化財保護法に基づく保護措置を実施してきた。

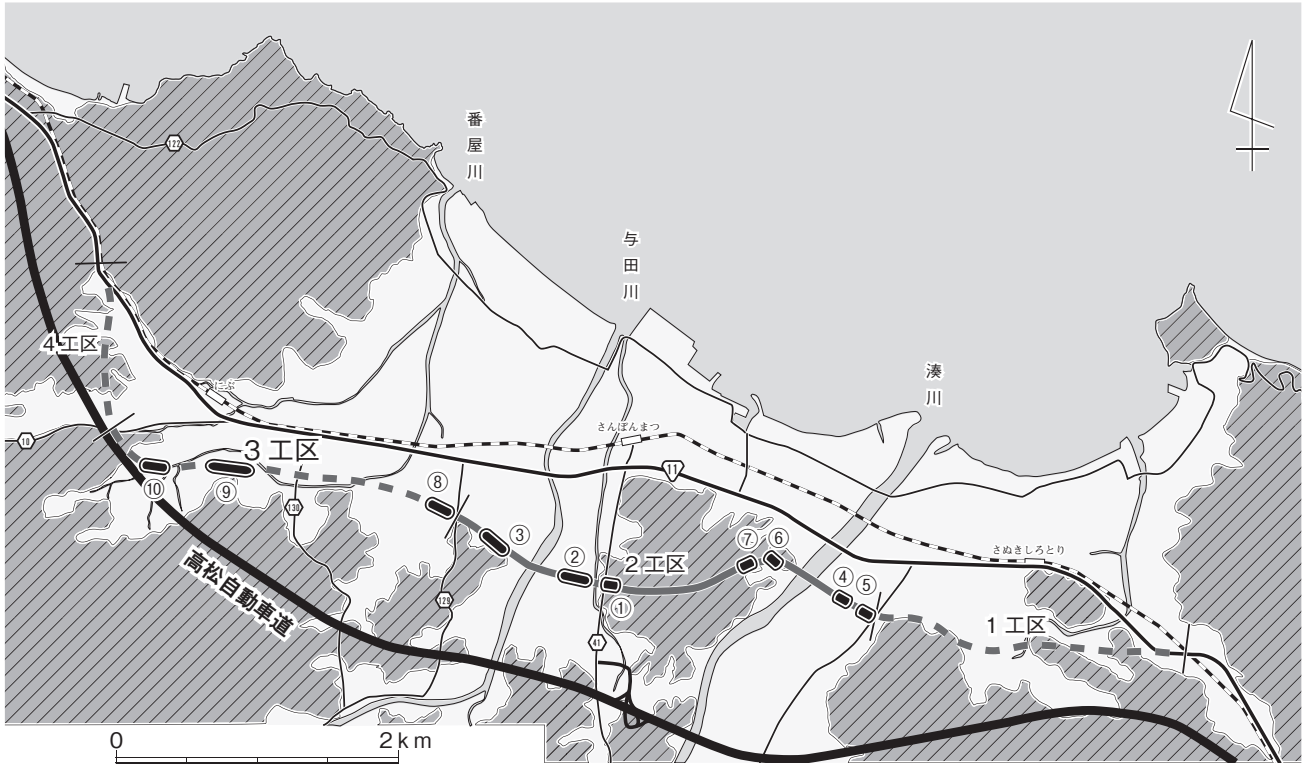
三殿地区では、平成11年度に四国横断自動車道建設時に三殿出口遺跡の調査を実施しており、番屋川流域に弥生時代から中世の集落遺跡が展開する可能性が知られていた。そこで県教委は、平成25年度に町田・三殿地区（3工区）において試掘調査を実施し、実際に対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況について確認を行った。その結果、調査対象地のうち一部のトレンチで、古代～中世を中心とした土坑や溝などが検出され、土器などの遺物が出土したことから、調査対象地のうち一部を新たに「三殿北遺跡」として、文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した（香川県教育委員会2015）。翌平成26年度、隣接する地点の試掘調査を実施し、三殿北遺跡の本発掘調査面積が3,645㎡（実掘3,470㎡）に確定した（香川県教育委員会2016）。

### 第2節 発掘調査と整理作業の経過

三殿北遺跡の発掘調査は、国交省と県教委との間で、市道の東側の調査区1,919㎡について平成28年度（第1次調査）に、同西側の調査区1,726㎡について翌29年度（第2次調査）に、それぞれ香川県埋蔵文化財センターを調査担当として本発掘調査を実施することで合意した。第1次調査は平成28年10月1日～翌29年1月31日に、第2次調査は平成29年6月1日～8月31日に、それぞれ発掘調査を



第1図 遺跡位置図



1. 仲戸東遺跡 2. 仲戸遺跡 3. 誉水中筋遺跡 4. 田中遺跡 5. 城泉遺跡 6. 山下岡前遺跡 7. 湊山下古墳 8. 西村遺跡 9. 内間遺跡 10. 三殿北遺跡

番号	遺跡名	所在地	調査面積 (㎡)	発掘調査	整理作業	報告書	内容
1	仲戸東遺跡	東かがわ市川東	1,251	H20.7 ~ H20.10, H25.3	H26.6 ~ 11	H28.3	古墳時代後期の埴輪生産関連遺構
2	仲戸遺跡	東かがわ市川東	3,695	H20.7 ~ H21.1	H26.6 ~ 11	H28.3	縄文時代後期自然河川跡・弥生時代河川跡・大溝跡
3	誉水中筋遺跡	東かがわ市中筋	4,459	H20.9 ~ H21.3	H27.7 ~ 10	H29.3	中世集落・墳墓
4	田中遺跡	東かがわ市白鳥	2,655	H22.6 ~ 10	H27.11 ~ H28.1	H29.3	縄文時代晩期自然河川跡・弥生時代後期と古墳時代後期、古代集落
5	城泉遺跡	東かがわ市白鳥	4,486	H23.6 ~ H24.3	H28.7 ~ H29.1, H29.4	H30.3	古墳時代河川跡・古代～中世集落跡
			1,768	H30.6 ~ 10	—	—	古墳時代集落と自然河川
6	山下岡前遺跡	東かがわ市湊	2,757	H24.11 ~ H25.3	—	—	弥生時代後期集落跡・古代寺院関連遺構
7	湊山下古墳	東かがわ市湊	1,600	H24.11 ~ H25.2	—	—	前期古墳(円墳)
8	西村遺跡	東かがわ市西村	3,660	H25.6 ~ 9, H26.6 ~ 11	—	H31.3	弥生時代～古墳時代の集落跡と水路跡・古墳集落跡
9	内間遺跡	東かがわ市町田	9,698	H26.6 ~ 9, H27.7 ~ H28.1, H29.9 ~ H30.1	—	—	弥生時代集落跡・古代集落跡と大型灌漑水路・中世集落跡
10	三殿北遺跡	東かがわ市三殿	3,645	H28.10.1 ~ H29.1, H29.6 ~ 8	H30.7 ~ H31.1	本書	弥生時代自然河川、古代～中世集落・大型灌漑水路

第2図 大内白鳥バイパス関連調査遺跡位置図

施した。調査は、重機の調達・指示や作業員の雇用・監督を業者に委託した支援方式で行った。

整理作業は、平成30年7月1日から翌31年1月31日に香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理などを行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28ℓ入りコンテナ72箱である。本報告を作成するにあたり、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構・遺物について報告することを原則とした。また、調査時に作成した図面については、ほぼ全てを本書に掲載し、撮影した写真は、類似したカットを選択するなどして、必要最低限のものを収録した。

### 引用・参考文献

香川県教育委員会 2015『埋蔵文化財試掘調査報告 X X VII 平成25年度香川県内遺跡発掘調査』

香川県教育委員会 2016『埋蔵文化財試掘調査報告 X X VIII 平成26年度香川県内遺跡発掘調査』

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

#### 遺跡周辺の地形と地質

三殿北遺跡は、東かがわ市三殿 63-1 番地ほかに所在する。

遺跡が所在する東かがわ市大内・白鳥地域は、北は瀬戸内海に面し、東～南～西は与治山や虎丸山、北山等の標高約 200～400 m の山塊に囲繞された、面積約 9.7 km<sup>2</sup> の閉鎖的な臨海性の小平野を中心とする。平野部東半は中川と湊川が、西半は与田川と番屋川がそれぞれ北流し、流域に扇状地性の谷底平野や氾濫平野を形成する。河口域には、現海岸線に平行して数列の砂州・砂堆が形成され、その背後には海岸平野・三角州が広がる。現在三角州は、その多くが盛土され、大内・白鳥の市街地へと変貌している。

平野部に接する山塊は、後期白亜紀の珪長質深成岩類（領家帯）によって形成され、その奥部の讃岐山脈には、後期白亜紀の海成礫岩や泥岩、砂岩などが分布する和泉層群が東西走する。与田・番屋川は領家帯に水源があり、流域は花崗岩質の堆積層を形成し、湊川の水源地は和泉層群に達し、河床には砂岩などの堆積岩が花崗岩類に混じって多く認められる。弥生時代以降、和泉層群の砂岩の河床の転石は、砥石などとして利用され、遺跡から普遍的に出土する。

本地域は、上述したように自然地形により画された閉鎖的な空間を形成するが、東は中川上流の帰来山と翼山の間の小峠を介して引田地域と、南は湊川上流の鶴の田尾峠（標高約 370 m）を介して徳島県吉野川下流域と、西は番屋川上流の北山南麓の小峠を介して津田湾沿岸地域や、田面峠（標高約 50 m）を介して長尾盆地と、陸路によりそれぞれ連絡することが可能で、さらに各河川を利用した内陸部との舟運や、湊川あるいは与田川河口部に想定される『兵庫北関入船納帳』（林屋編 1981）に記された「三本松」など臨海部の港津を介して、海上交通により遠隔地ともアクセス可能な、交通の結節点としての恵まれた条件が付与された地域と評価できる。

さて、遺跡は番屋川により形成された扇状地性の小規模な谷底平野上に立地する。遺跡の北と南は標高 271 m の那智山より派生した低丘陵に囲まれ、東に開けた番屋川北岸の狭隘な平地上に立地する。調査前の地表面の標高は、東の第 1 次調査区が 18.2～18.5 m、西の第 2 次調査区が 20.3～20.6 m であった。現在では、河川改修や開発などにより大きく地割が改変されたため確認することが困難となったが、1980 年代頃までには第 4 図に示されるように、番屋川の両岸には完新世段丘に伴う段丘崖と氾濫原面が、断続的に認められた。遺跡は、その完新世段丘面上に展開する。

後述するように発掘調査は、東西 2 地区に区分して実施した。両調査区では番屋川の旧流路と考えられる弥生時代の自然河川が検出され、当該期には氾濫原面であったことが明らかとなった。河川からは多量の土器などの遺物が出土しており、遺跡北～西部の丘陵裾の微高地部に当該期の集落の存在が予想される。1 次調査区では、9 世紀後葉以降の井戸や土坑状の落ち込みなどが検出され、多くの遺物が出土し、遅くともその頃までには完新世段丘の形成により、現番屋川縁辺部を除いて調査区周辺は離水していた可能性が高く、一部は居住域として利用されていたと考えられる。

## 第2節 歴史的環境

### 縄文から古墳時代の動向

上述した陸路や海路を利用した遠隔地との交流は、原間遺跡の自然河川より、結晶片岩粒の混入した縄文時代中期と晩期前半の土器が出土(香川県教育委員会 2005c)し、田中遺跡からは結晶片岩製の石棒が出土(香川県教育委員会ほか 2017b)しており、遅くとも縄文時代に遡る可能性があることが考古資料から実証される。

さて、本地域の遺跡は、第3図に示したように、現状では谷底平野や氾濫平野、扇状地上に集落関係の遺跡が、丘陵上に古墳や墳墓などの遺跡がそれぞれ分布する。推定南海道も、海岸平野や三角州が内陸部にまで入り込む番屋川流域の松崎地区周辺を除けば、概ね氾濫平野上を中心に、本地域を横断すると考えられている(金田 1988)。今後の詳細な分布調査や試掘調査を待つ必要があろうが、海岸平野や三角州地域の本格的な開発は、近世以降に遅れる可能性が高いと考えられる。

一方で谷底平野や氾濫平野での開発は、弥生時代に本格化する。本地域での遺跡分布は、弥生時代中期中葉を除けば、後期中葉までは散漫であることが指摘されている。後期後半から古墳時代前期初頭にかけて、例えば原間遺跡では、70棟の竪穴建物が検出され、なかには鍛冶関連遺物を伴うものも含まれるなど、地域内で遺構や遺物が出土した遺跡数は、中期後葉と比較して倍増する(信里 2004)。飛躍的に地域内の開発が進展したことは間違いない。

そうした動向と併行して、大型建物への金属器や玉類などの非自給物資の集中や、水銀朱を使用した葬送儀礼が行われた槌端墳丘墓など、地域内での階層差が明確化する。中期中葉の池の奥遺跡における磨製石斧類の集中保有は、集落間での分業体制の成立とともに、上記した階層化社会を準備したとも考えられる。

仲戸遺跡、仲戸東遺跡で実施した花粉分析の成果(香川県教育委員会ほか 2016a)からは、縄文時代晩期から弥生時代終末期の間においてアカマツ林の相対的拡大が示され、その傾向は古代へと継続することが示された。これは遺跡周辺の丘陵部に自生していた照葉樹林などが林産資源の利用拡大により伐採され、二次林であるアカマツ林へと転換したこと、つまりは周辺の植生に大きなダメージを与えるような大規模かつ恒常的な開発行為がなされたことが想定され、上記した考古学的な状況を補完する。

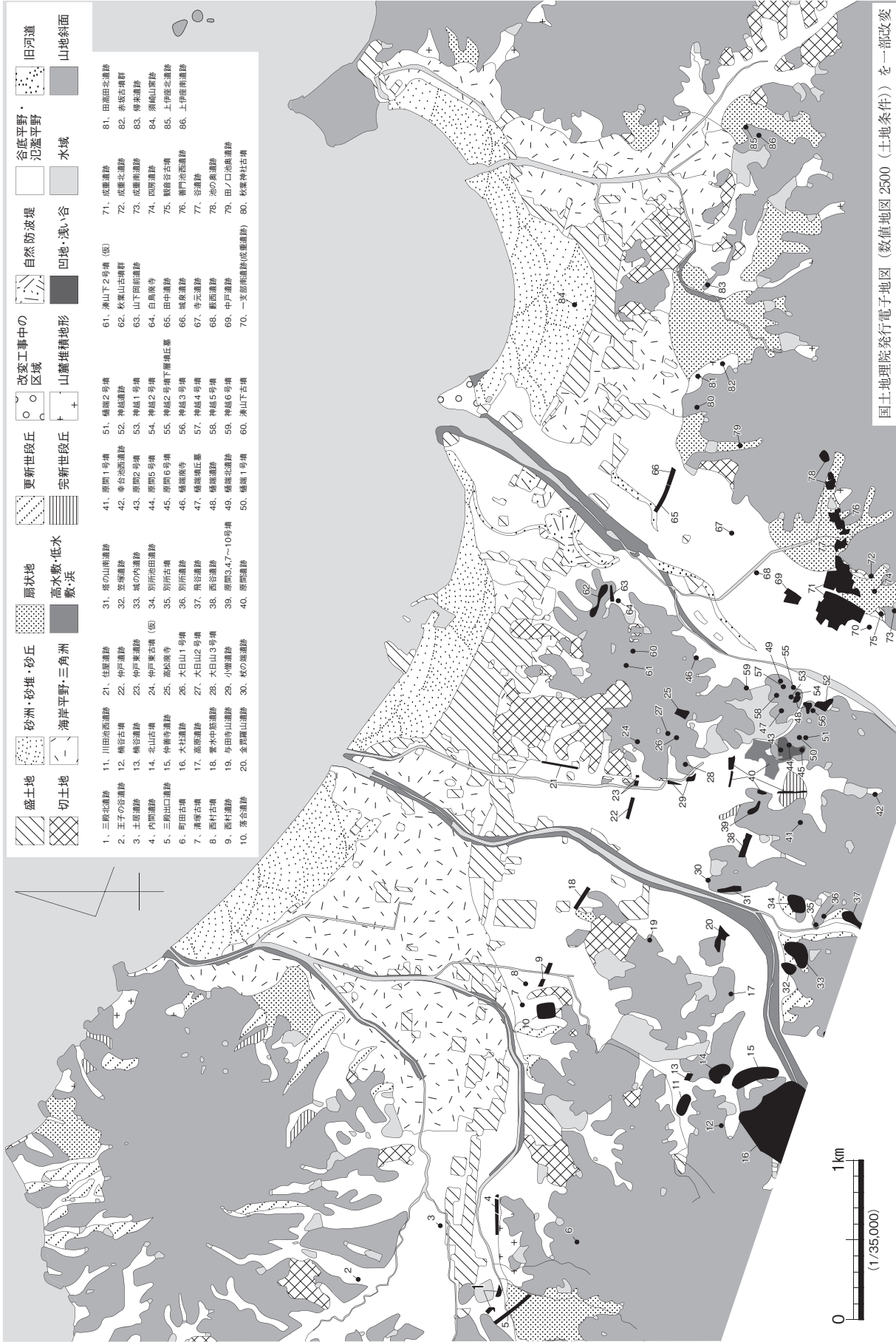
こうした諸開発行為の延長上に、全長約 38 m の前方後円墳である大日山古墳を位置付けることができよう。中期には韓半島との関係が想定される原間6号墳、後期には多彩な形象埴輪が出土した仲戸東遺跡等、時期により多様な様相を示しながら古墳が築造され、そこには吉備や畿内といった他地域との関係も垣間見ることができる。

### 古代の大内郡

古代の遺跡には、坪井、住屋、原間遺跡などが確認されている。古川下流域に位置する住屋遺跡では、多量の瓦類とともに、金銅装帯金具が出土し、推定南海道にも近接することから、官衙的な性格を有する遺跡の可能性はある。

律令期には、大内郡が置かれ、管内には引田・白鳥・入野の三郷があった。遺跡周辺は入野郷に含まれる。平安時代初頭に入野郷より、現在の誉水、与田山地区が1郷として与泰郷が分割設置されたとき、*「和名抄」*にその名がみえる。平城宮東張り出し部西辺の SK3137 より、*「・大内郡入野郷日下部□*





国土地理院発行電子地図（数値地図 2500（土地条件）を一部改変

第3図 遺跡周辺地形分類と遺跡分布

嶋白米・〇「五□〔年カ〕□□□□□〔日カ〕」と記された木簡が出土している(奈良国立文化財研究所1975)。白米は、田令田租条に規定する年料春米とされ、讃岐国はその貢進国であった。大内郡はもと小郡であったが、『続日本後紀』承和10(843)年5月8日条に「又讃岐国大内郡小郡。只有<sub>二</sub>領帳<sub>一</sub>。領則<sub>レ</sub>領調入<sub>レ</sub>京。帳猶留<sub>レ</sub>国釐<sub>レ</sub>務。非常移<sub>レ</sub>病。无<sub>二</sub>人從<sub>レ</sub>公。加郷戸田数。既堪<sub>二</sub>下郡<sub>一</sub>。改爲<sub>レ</sub>下。加<sub>二</sub>領一員<sub>一</sub>焉。」(黒板1971)とあり、郷戸田数の増加などを理由に下郡に改め、領一員を加えている。文政11年(1828)に中山城山が編纂した「全讃史」では、入野山・馬篠・小砂・土居・中山・三殿・町田・松崎・落合・大谷・小磯の11ヶ村を入野郷の郷域としている(竹内編1985)

本遺跡が所在する大内郡東半部地域では、東へ6度前後東偏した約109m方格の地割が、第3図に示した谷底平野や氾濫平野、完新世段丘面上といった、内陸部を中心に分布し、各河川下流域の海岸平野や三角州、砂州などの分布域には、地割分布が希薄となることが指摘できる。砂州などを除く、各河川下流域の開発が、古代以降にまで遅れた可能性を示唆している。実際の遺跡分布も、海岸平野や三角州上には遺跡は現在までに確認されていない。こうした地域の開発は、おそらくは近世以降にまで下る可能性が高い。この谷底平野や氾濫平野上を、方角地割に沿って古代南海道が東西走していたことが想定されている(金田1988)。入野郷の西端、寒川郡との境となる田面峠の麓に坪井遺跡(香川県教育委員会ほか2002b)が所在する。坪井遺跡では、複数条の並走する直線溝が検出され、一部は南海道の側溝の可能性が指摘されている。また、床面積が50㎡を超える大形建物なども検出され、遺物には水瓶や鉄鉢形須恵器、陶硯などがあり、周辺に駅家に関する記録はみられないが、郡界に位置する官衙関連遺跡の可能性が考えられる。

天平19年(747)2月11日の法隆寺伽藍縁起并流記資財帳(正倉院文書)の寺領荘園について記した部分に、「大内郡一処」とあり、郡内に法隆寺領の荘園があったとされるが、具体的な場所やその後の変遷については明らかではない。また、国宝「九条家本延喜式 卷第十一」の紙背文書として残る、「讃岐国大内郡入野郷寛弘元年(1004)戸籍」は、現存する平安時代の戸籍としては、最も新しい時期のものであり、これまで男女比の不均等や年齢区分の不統一などから、当時の実際の戸籍を記録したのではなく、戸籍制度の形骸化を示す史料として評価されてきた。近年、渋谷啓一氏は同史料を詳細に検討し、「各戸における女性や高齢者の数が不自然に多いにもかかわらず、各戸とも課口がほぼ四人存在している」ことから、「封戸に関連するものとして作成」され、「国司から封主である摂関家へもたらされ、その後、反故にな」ったことを明らかにし、つまり、11世紀初頭に入野郷内に摂関家の封戸が設定されていた可能性を指摘する(渋谷2018)。

当該期の宗教施設として、白鳳期創建の可能性が指摘される白鳥廃寺がある。過去の調査により塔や金堂とみられる基壇や心礎石が、近年の調査では僧坊とみられる掘立柱建物がそれぞれ検出され、一町四方の寺域に南滋賀廃寺式の伽藍配置が想定されている。湊川を挟んで対岸に位置する田中遺跡では緑釉陶器が出土し、隣接する城泉遺跡(香川県教育委員会ほか2017c)からは、墨書は認めないが荷札木簡とみられる木製品が出土している。古代においては湊川下流の南海道との接点に、郡衙等の政治・経済的な中心施設が設置されていた可能性が高い。

一方式内社は、水主の水主神社があり、承和三年(836)に従五位下に除された(続日本後紀)のを史料上の初見として、天慶三年(940)には藤原純友の乱平定祈願の功により正五位下を授けられている(長寛勘文)。また、平安末期に書写されたとされる大般若経を収める経函が至徳三年(1385)に作られ、その裏書に天承元年(1131)や長承二年(1133)等の国司や目代の神拝とともに、社領の寄進がなされ

たことが記される。郡内唯一の式内社であり、国司の庇護により成長した、讃岐国内でも有力社として評価されている（野中 1982）。

これら宗教施設は、自然地形により集落が展開する平野部とはやや隔絶された場所に造営され、例えば白鳥廃寺が古代南海道の湊川渡河点至近地に位置しているように、水陸交通路の結節点に位置し、人・モノ・情報のネットワークにアクセス可能な場所が巧みに選地されているように思われる。当時の宗教施設が有する機能の一端を示すものであろう。

## 中世の大内郡

鎌倉・室町時代の遺跡には、王子の谷、三殿出口、内間、西村、誉水中筋、仲戸、原間、成重、田中、城泉の各遺跡で遺構・遺物が確認されており、12世紀以降徐々に遺跡数は増加するようだ。与田寺に近接する誉水中筋遺跡（香川県教育委員会ほか 2017a）では、和鏡や輸入磁器を副葬した屋敷墓が検出され、荘官クラスの有力層の屋敷地と考えられる。また、西村遺跡（香川県教育委員会ほか 2019a）では、銅鑄造施設1基と鍛冶炉4基が検出され、高錫青銅器、いわゆる佐波理を素材とした鑄銅作業と鉄鍛冶作業が、未分化の状態にある古代的な金属加工生産の様相が伺える。

鎌倉時代には大内郡は一円所領化され、皇室の御願寺領として京都浄金剛院領大内荘が成立し、天皇家に伝領された。与田郷の地頭に小早川氏がみえ、小早川本仏讓状案（小早川家文書）によれば、小早川氏が有した所職は地頭職以外に、公文・案主・田所などの諸職に及ぶ。嘉応二年（1170）に讃岐国は建春門院の院分国となり、国司としてその弟平親宗が任じられると、讃岐国は平家とのつながりを深める。その際国衙領であった大内郡は、平家の所領に編入され、鎌倉時代に平家没官領として、皇室所領となったことが考えられる。

宗教面では、遅くとも平安時代末期に神仏習合による熊野信仰が伝わり（武田 2005）、同時期に水主神社の神宮寺として建立された薬師院は、14世紀後葉に増峠により与田寺として再興され、彼は熊野信仰を深く崇拝したと伝えられる。

誉水中筋遺跡からは、火葬塚と考えられる円形周溝遺構より、2点の石幢笠部が出土している。その笠部は円形を呈し、高松市国分寺石製石幢に近似し、火山石製石幢としては定型化前の13世紀前半の製作時期が想定されている（松田 2017）。そのように考えるなら、火山石製石幢は国分寺石製石幢の影響下に成立し、後に自律的な展開をした可能性も考えられる。

## 引用・参考文献

- 香川県教育委員会 2010『埋蔵文化財試掘調査報告XXIII 平成21年度 香川県内遺跡発掘調査』、香川県教育委員会  
 金田章裕 1988『讃岐の条里遺跡』『香川県史』第一巻通史編、香川県  
 黒板勝美編著 1971『新訂増補国史大系〔普及版〕 続日本後紀』、吉川弘文館  
 渋谷啓一 2018『讃岐国大内郡入野郷寛弘元年戸籍について』『ミュージアム調査研究報告』第9号、香川県立ミュージアム  
 高松市歴史資料館 1996『讃岐の古瓦展』  
 竹内理三編『角川日本地名大辞典』37 香川県、角川書店  
 奈良国立文化財研究所 1975『平城宮木簡二 解説』  
 野中寛文 1982『大水主社領の範囲と構造』『香川の歴史』2号、香川県史編さん室  
 信里芳紀 2004『東讃地域の弥生集落の動態』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第47冊 成重遺跡I』、香川県教育委員会・財団法人香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団  
 萩野憲司 2004『讃岐国水主神社所蔵『外陣大般若経』と『北野社一切経』について』『佛教学総合研究所紀要』別冊2、佛教学総合研究所  
 林屋辰三郎編 1981『兵庫北関入船納帳』、中央公論美術出版  
 松田朝由 2017『増峠誕生値周辺の中世石造物』『東かがわ市歴史民俗資料館 年報・紀要』第14号、東かがわ市歴史民俗資料館

発掘調査報告書は、巻末に一括して掲載する。

## 第3章 発掘調査の成果

### 第1節 調査の方法と報告書の作成

調査対象地は、緩やかに北西に湾曲する幅員約31mの道路建設予定地である。調査対象地の中央には、市道土居種畜場線と市道三殿中央線が交差し、大きく市道の南東側の調査区(第1次調査区)と、北西側の調査区(第2次調査区)に2分される。各調査区は、掘削土の仮置き場や残地への進入路確保などのため、第4図に示されるように1～7区の7調査区に区分し、調査を実施した。調査前の地目は、水田や畑などの耕作地であった。

調査にあたっては、発掘作業員や重機を発掘調査支援業者に業務委託して実施した。基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力により掘り下げを行ったが、第1調査区では自然河川や後述する包含層1・2の掘り下げに重機を利用した。測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。各調査区は、概ね600㎡以下であり、とくにグリッドは設置せず、包含層などの遺物は各調査区単位で取り上げ、特に必要とするものについてはトータルステーションや写真などにより、位置や出土状況をそれぞれ記録した。

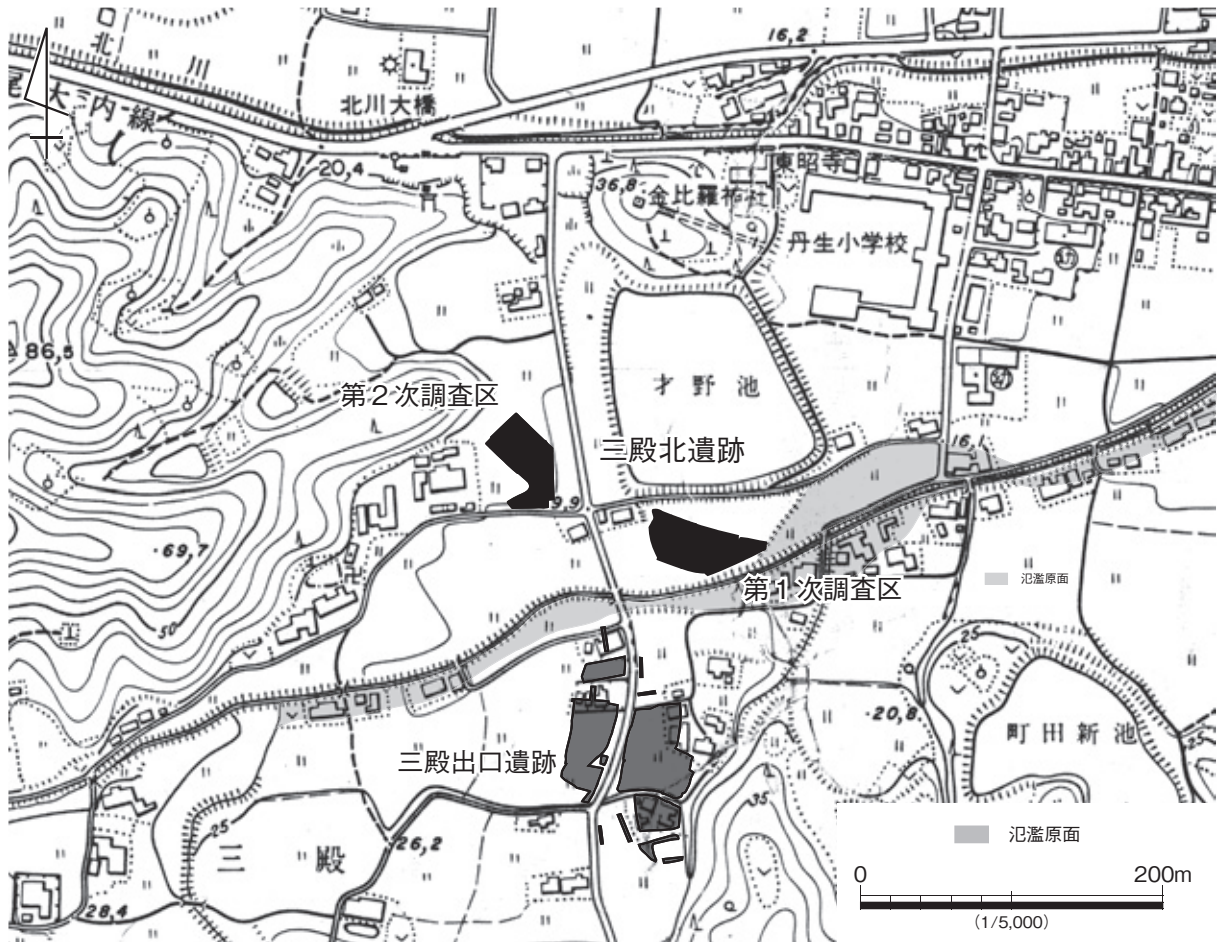
遺構名は、調査時には各調査区単位に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。遺構の性格については、調査担当者の見解を尊重して基本的に調査時のものを継承したが、当初土坑としたものが調査の結果井戸と判明するなど、明らかにその性格に変更を要するものについてのみ変更した。また、調査時に作成した図面類については、ほぼ全て本書に掲載し、写真類についても必要と認めたものについては掲載した。その他、調査記録の不明な点については、各調査担当者と協議し、見解を統一して本書にまとめた。

### 第2節 基本層序

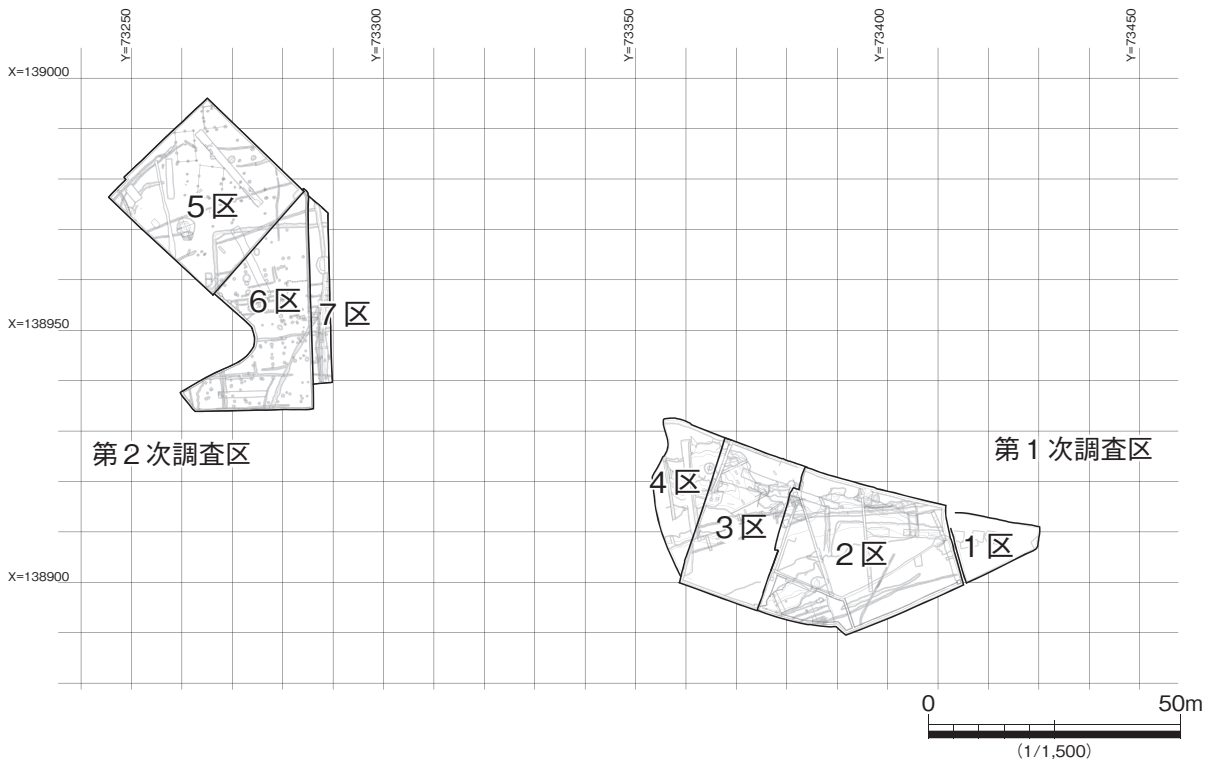
基本層序の記録は、主に各調査区の壁面において行った。各区の記録には、層名の記載漏れや層序関係の矛盾、標高値の誤記録等がみられた。写真記録などを参考に可能な限り訂正等を行い記述するが、層序関係の矛盾や標高値の誤記録については、訂正することができず、調査記録をそのまま提示する。また、第2次調査区の遺構については、一部の遺構で帰属する遺構面に矛盾(例えばSD038は、5区東壁の調査記録では第2遺構面の遺構であるが、5区西壁の記録では第1遺構面の遺構となるなど)が認められるが、出土遺物や調査時に作成された平面記録を参考に、また調査担当者との協議の上、時期や遺構面を判断した。

#### 第1次調査区

調査前は、東西に3筆の畑等の耕作地として利用されていた。調査前の現地表面の標高は、西側の耕作地(4区)が18.5m前後、中央の耕作地(2・3区)が18.4～18.5m前後、東側の耕作地(1区)が18.2m前後をそれぞれ測り、東へ緩やかに傾斜する緩斜面地である。本調査区では、1区南壁、2区東・南・北・西壁、3区南・西壁及び2区でトレンチ2箇所、4区でトレンチ1箇所の層序を記録した。各調査区において、細部を除けば基本的な層序に大きな差は認められなかった。



国土地理院発行国土基本図IV-FF38を一部改変



第4図 調査区割図

現地地表下には、1～3層に細分される旧耕作土や床土、造成土の水平堆積が認められた。近代以降の耕作土層と考えられ、これら耕作土層下で、弥生時代～近世の遺構を検出した。遺構面の標高は、各調査区で17.8～18.0m前後を測り、緩やかに南東方向へ傾斜して検出された。

調査区南半部は、旧番屋川の自然河川とされるSD161(調査時の遺構名SR2001)やSX05(同SR1002旧)が東西走して検出されている。次節で詳述するが、両遺構とも自然河川ではない可能性が高い。また調査時には、その上面に2層に大別される自然河川堆積物(調査時の遺構名SR1001、SR1002新)が報告されている(香川県埋蔵文化財センター2018)。

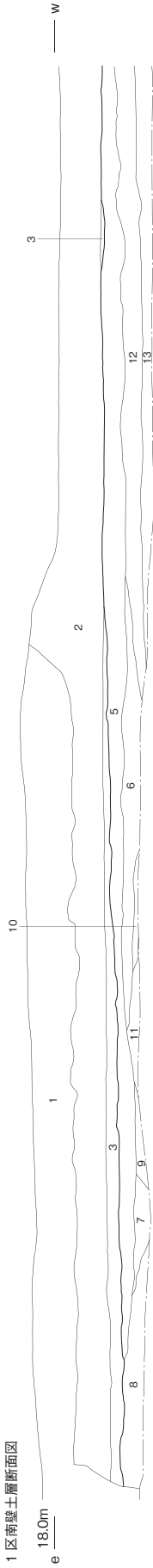
上位層(SR1001)は「近世以降」とされる堆積層であるが、明確な近世以降に位置付けられる遺物は出土していない。SR1001は、近世溝SD147(調査時遺構名SD1009)の上面に堆積することが上掲書に模式図として示されている。調査記録には、2区南壁(第7図)や3区南壁(第11図)等において、SR1001がSD147の上面に堆積していることが記録されているが、一方で3区西壁(第10図)ではSR1001の堆積層(6層)の上面からSD147が開削されており、記録位置により両遺構の重複関係には矛盾がみられた。SR1001の堆積範囲についての記録はなく、概要報告には記載されながら、「近世以降」の「水田層」とされる遺構との関係も調査記録から明らかにはできない。また、3区南壁の土層図では、遺構埋土の可能性が考えられる堆積層(第11図6・7層)も、記録上はSR1001の堆積層とされる。こうした点より、SR1001は近世以降の旧耕作土層を中心に中世の包含層、及び遺構埋土を含む堆積層の可能性を想定し、本書では包含層1として報告する。

一方、下位層(SR1002新)は「13～14世紀以降」の堆積物と報告され、SD161とほぼ重複する堆積範囲が上掲書で報告されている。堆積層としてシルトや細砂が記録され、洪水堆積層の可能性が想定されている。しかし、土層図でのその堆積範囲は、上掲書で示された範囲と大きく異なる。ここでも調査段階で、堆積層の何らかの誤認が生じていた可能性が高い。また、掲載した土層図では、SD161やSX05上面に広く包含層状に堆積することが記録されているが、3区南壁土層図(第11図)では、SX05を削り込む遺構埋土状の堆積を示す堆積層(15～18層)も本層として記録されている。平面記録が残されていないため詳細は不明ながら、何らかの遺構が所在し、その遺物もSR1002新あるいは調査時にはSX05として調査され、遺物を取り上げられている可能性も考えられる。こうした点を除けば、SR1002新はSX05埋没後の包含層堆積と理解され、本書では包含層2として報告する。

本調査区南半部では、上述したように2層に大別される包含層堆積が認められ、包含層1下面と包含層2下面の計2面の遺構面が確認された。

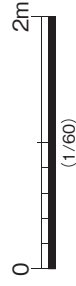
さて、2区北壁の土層図(第6図)では、黒色土器が出土した堆積層(28層)が記録されている。何らかの遺構埋土の可能性が考えられるが、平面的な調査記録は残されておらず、また同図の記録に28層以外について遺構埋土なのか無遺物層なのかは記載されていなかった。本書作成時に調査担当者と協議し、28層より上位に堆積する19～24層については、確実に何らかの遺構埋土と考えられるが、それ以外の層序については、土質が後述する無遺物層に多い砂ではなく粘土や粘質シルトであること、38層が45層を削り込むように堆積していること、35層を中心に東西に斜面堆積をしていることなどを根拠として、遺構埋土と判断し記載した。1は、28層より出土した黒色土器碗である。口縁部は小片化して接合できなかったため、底部を中心に図示した。内外面マメツが顕著であり、詳細な時期を特定することは困難だが、佐藤編年V期古相を上限とする時期に位置付けられよう。28層を含む不明遺構の埋土については、上面よりSX03が掘り込まれており、SX03に先行する遺構であることが確認できる。

1 区南壁土層断面図

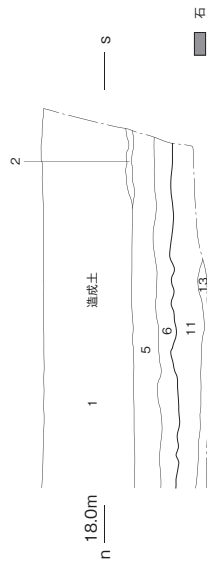


- 11 10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 12 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り細砂 (SX05)

- 1 盛土 (花崗土)
- 2 耕作土
- 3 造成土
- 4 10YR4/6 褐色中砂混り粘質シルト (やや砂質、包含層1)
- 5 10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混り細砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色細砂ブロックを多量に含む、包含層2)
- 6 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 7 10YR5/3 にぶい黄褐色の中層中砂混り細砂 (10YR5/2 灰黄褐色粘土を扶む、包含層2)
- 8 10YR4/3 にぶい黄褐色と 10YR4/4 褐の中層中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 9 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 10 10YR4/4 褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)



2 区東壁土層断面図



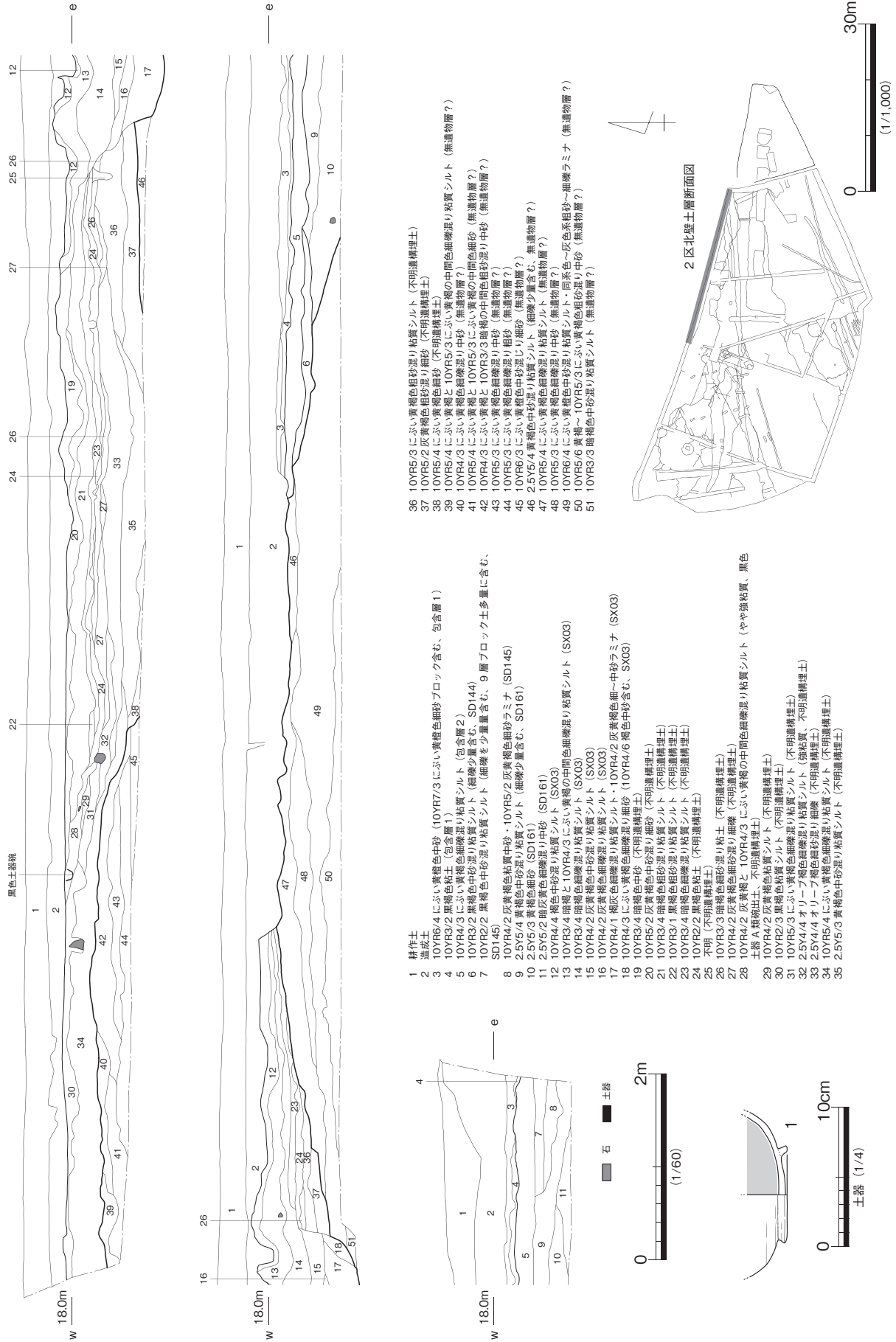
- 1 造成土
- 2 旧床土
- 3 10YR6/4 にぶい黄褐色中砂 (10YR7/3 にぶい黄褐色細砂ブロック含む、包含層1)
- 4 10YR3/2 黄褐色粘土 (包含層1)
- 5 10YR4/6 褐色中砂混り粘質シルト (やや砂質、包含層1)
- 6 10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混り細砂 (10YR5/3 にぶい黄褐色細砂ブロック多量に含む、包含層1)
- 7 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂混り粘質シルト (包含層2)
- 8 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (包含層2)
- 9 10YR2/2 黄褐色中砂混り粘質シルト (細砂少量含む、2.5Y5/4 黄褐色中砂混り粘質シルト (無中砂層?) ブロック多量に含む、SD145)
- 10 10YR4/4 褐色中砂混り粘質シルト (SD161 厚土層)
- 11 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (SD161)
- 12 7.5YR2/3 黄褐色細砂混り粘質シルト (細一中砂少量含む、SD161)
- 13 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り細砂 (SD161)
- 14 10YR4/2 灰黄褐色中砂混り粘質シルト (SD161)
- 15 10YR4/2 灰黄褐色中砂混り粘質シルト (SD161)
- 16 2.5Y3/1 黄褐色中砂混り粘質シルト (SD161)
- 17 2.5Y3/2 黄褐色中砂混り粘質シルト (SD161)
- 18 不明 (SD161?)



2 区東壁土層断面図

1 区南壁土層断面図

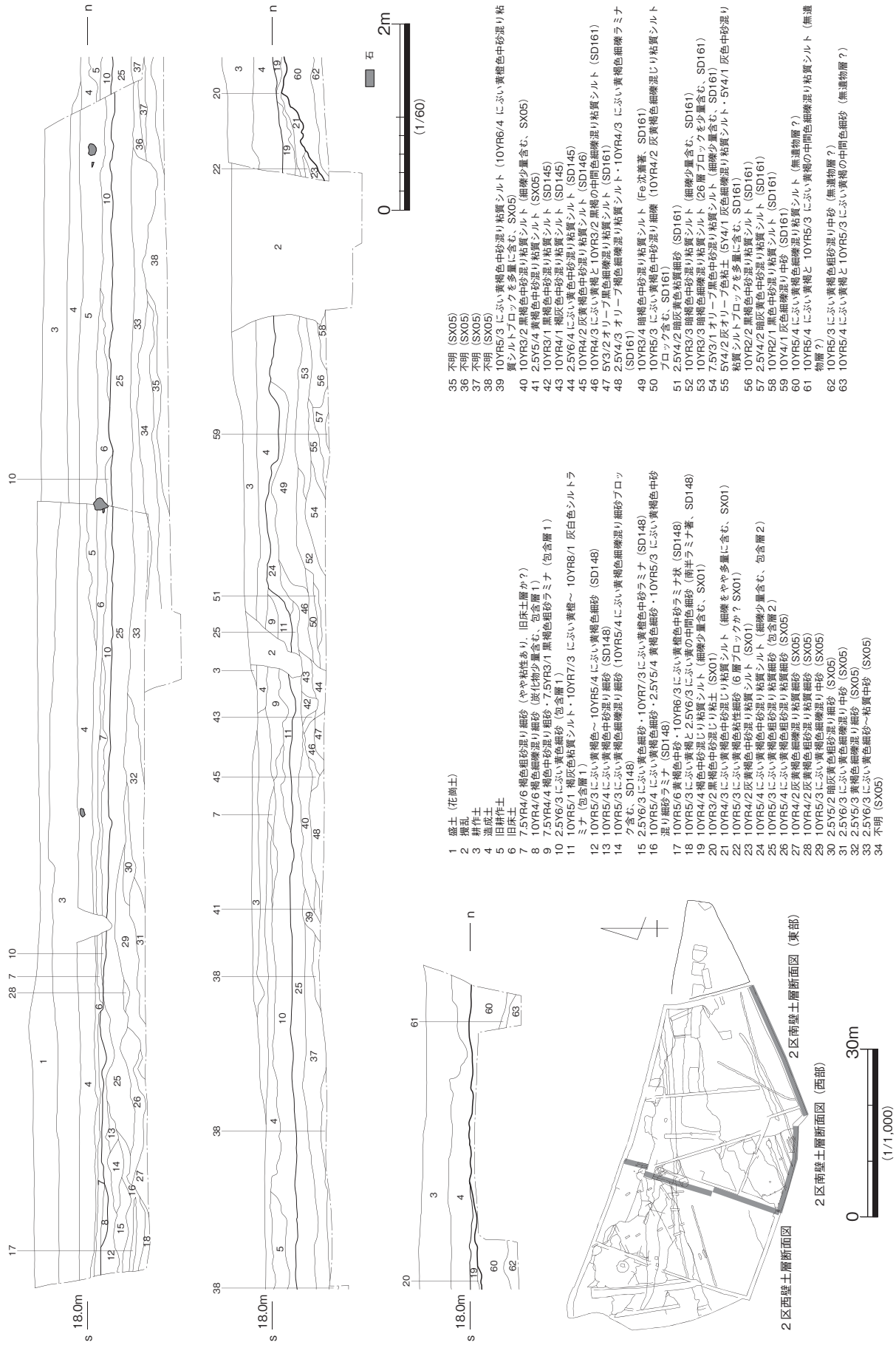
第5図 1 区南壁・2 区東壁土層断面図



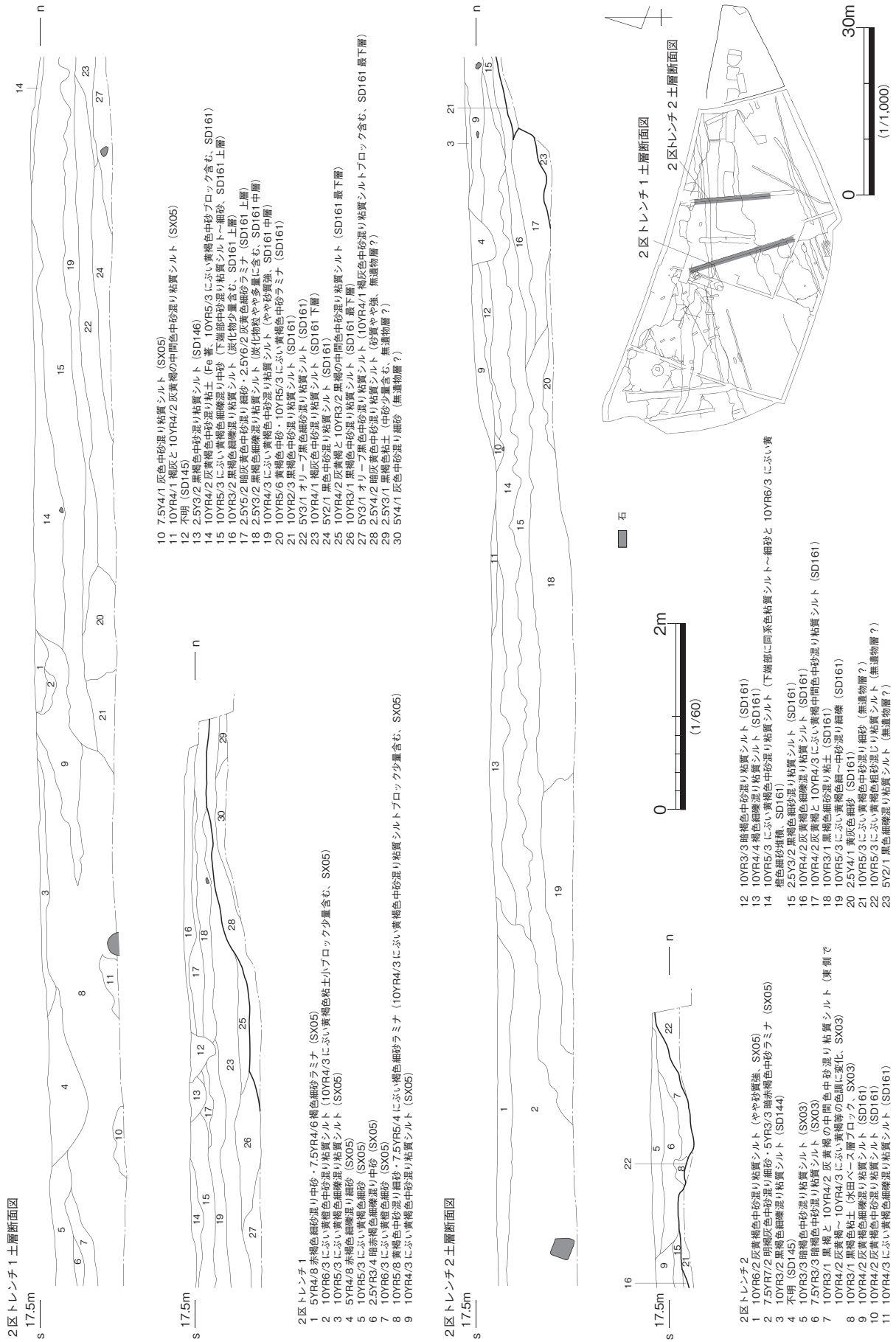
第6図 2区北壁土層断面図



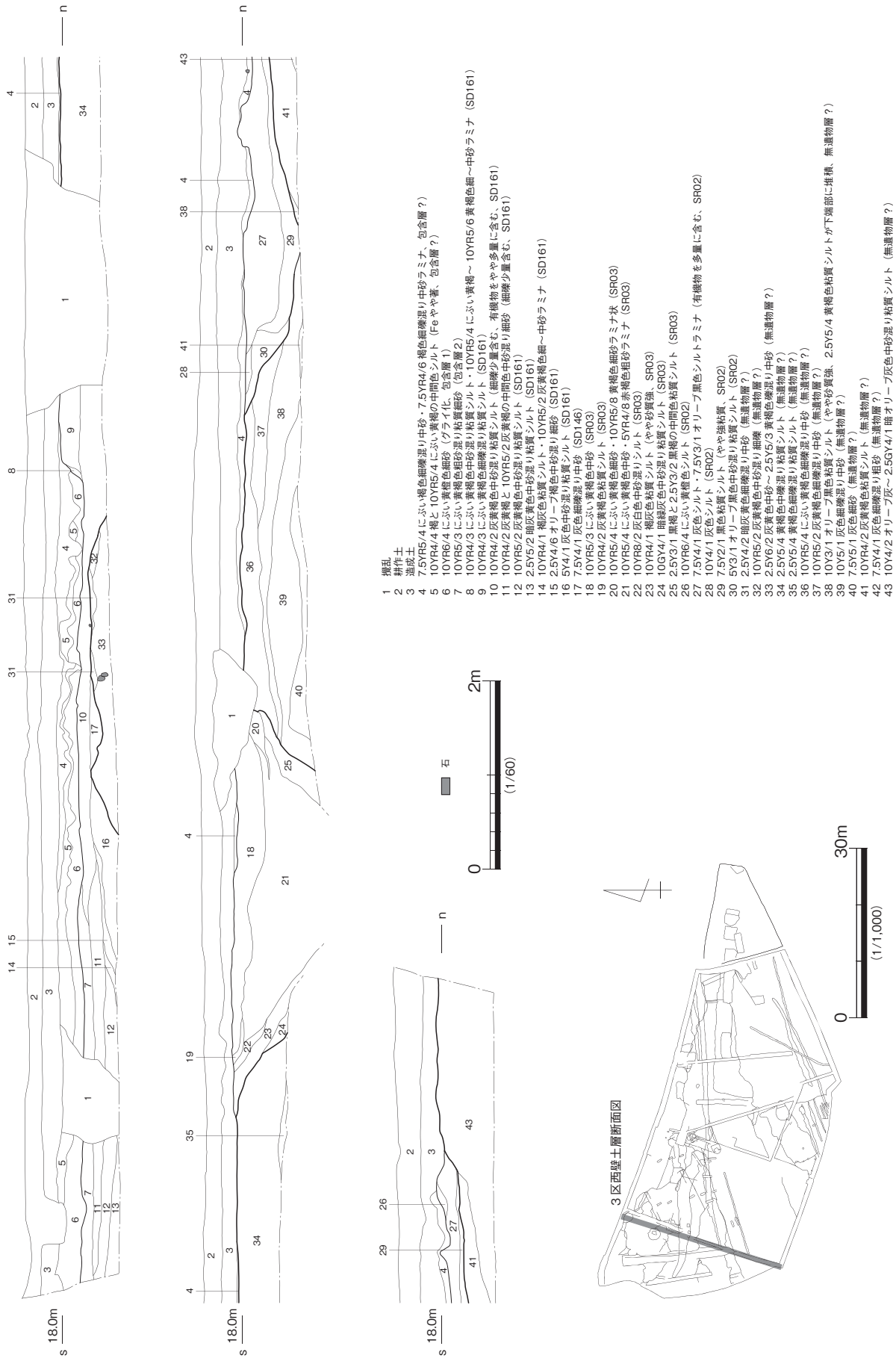




第8図 2区西壁土層断面図



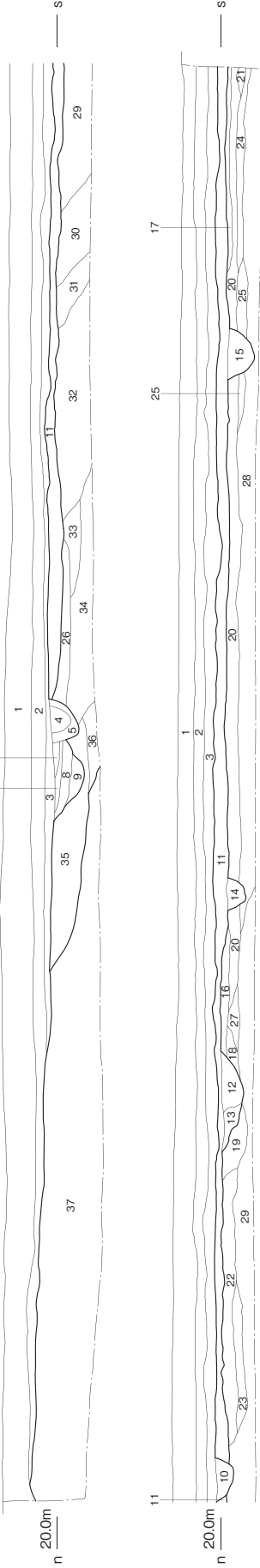
第9図 2区トレンチ1・トレンチ2土層断面図



第10図 3区西壁土層断面図



5区東壁土層断面図



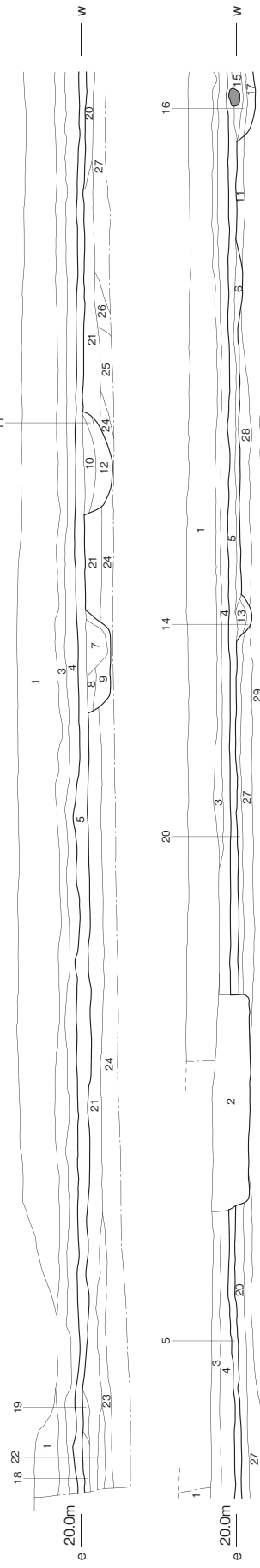
5区東壁土層断面図

- 1 10YR3/2 黒褐色砂質土 (耕作土)
- 2 7.5YR4/4 褐色細砂 (床土?)
- 3 7.5YR7/3 にぶい褐色細砂 (床土?)
- 4 5YR5/2 灰褐色粘質土 (遺構埋土)
- 5 5YR6/8 褐色粘質粗砂 (遺構埋土)
- 6 5YR6/2 灰褐色粗砂 (遺構埋土)
- 7 5YR5/3 にぶい赤褐色粘質土 (遺構埋土)
- 8 7.5YR5/6 明褐色粘土 (遺構埋土)
- 9 7.5YR5/2 灰褐色粘土・7.5YR5/2 灰褐色粘土ラミナ (遺構埋土)
- 10 7.5YR5/6 明褐色砂質土 (SD012)
- 11 7.5YR7/1 明褐色細砂 (第2面含層)
- 12 7.5YR5/2 灰褐色粗砂 (SD026)

- 13 7.5YR6/6 褐色粗砂 (SD026)
- 14 7.5YR6/3 にぶい褐色粗砂 (SD038)
- 15 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質粗砂 (SD033)
- 16 7.5YR6/2 灰褐色粘土・7.5YR7/2 明褐色粘土ラミナ (SR01)
- 17 7.5YR6/6 褐色粘質土・7.5YR7/2 明褐色粘土ラミナ (SR01)
- 18 7.5YR7/6 褐色粗砂 (SR01)
- 19 7.5YR5/6 明褐色粗砂 (SR01)
- 20 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土・7.5YR5/2 灰褐色シルトラミナ (SR01)
- 21 7.5YR6/4 にぶい褐色粗砂 (SR01)
- 22 7.5YR7/6 褐色粗砂 (SR01)
- 23 7.5YR6/6 褐色中砂 (SR01)
- 24 7.5YR4/4 褐色粗砂 (SR01)
- 25 5YR5/6 明赤褐色粗砂 (SR01)

- 26 5YR6/4 にぶい褐色粗砂 (SR01)
- 27 7.5YR7/4 にぶい褐色中砂 (SR01)
- 28 10YR5/2 灰褐色粘土・7.5YR6/8 褐色粘土ラミナ (SR01)
- 29 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土・7.5YR6/8 褐色粘土ラミナ (SR01)
- 30 7.5YR6/3 にぶい褐色粘質粗砂 (SR01)
- 31 7.5YR6/2 灰褐色粘質粗砂 (SR01)
- 32 5YR6/6 明赤褐色粗砂 (SR01)
- 33 7.5YR6/3 にぶい褐色粗砂 (径2~5mmの小礫を多量に含む, SR01)
- 34 7.5YR5/4 にぶい褐色粗砂 (径2~5mmの小礫を多量に含む, SR01)
- 35 7.5YR3/2 黒褐色粘土 (SR01)
- 36 7.5YR4/1 褐色粘質粗砂 (SR01)
- 37 7.5YR7/8 黄褐色/ライラン土 (無遺物層)

5区南壁土層断面図

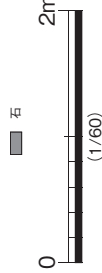
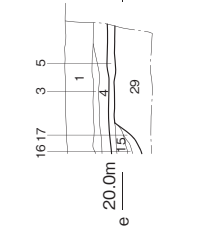


5区南壁土層断面図

- 1 盛土 (花崗土)
- 2 攪乱 (註欄トレンチ)
- 3 7.5YR6/1 褐色シルト・7.5YR6/6 褐色砂質土ラミナ (旧耕作土?)
- 4 7.5YR6/2 灰褐色粘質土 (第2面含層)
- 5 7.5YR7/2 明褐色粘土・7.5YR4/1 褐色粘土ラミナ (旧耕作土?)
- 6 10YR5/6 黄褐色粘土 (第2面含層)
- 7 7.5YR6/6 黄褐色粘土・10YR7/1 灰褐色粘土ラミナ (SR01)
- 8 7.5YR6/1 褐色粘質粗砂・7.5YR4/1 褐色粘土ラミナ (SD031)
- 9 7.5YR5/2 灰褐色粗砂 (SD103)
- 10 7.5YR6/6 褐色粘質土 (SD105)
- 11 7.5YR5/2 灰褐色粗砂 (SD105)
- 12 7.5YR6/2 灰褐色粗砂 (SD105)

- 13 10YR6/6 明黄褐色粗砂と7.5YR6/3 にぶい褐色粗砂が混じる (SD099)
- 14 7.5YR6/3 にぶい褐色粗砂 (SD099)
- 15 7.5YR6/6 褐色粗砂と7.5YR6/1 褐色粘土ラミナが混じる (SD105)
- 16 7.5YR6/4 にぶい褐色粗砂 (SD105)
- 17 7.5YR6/1 褐色粘質粗砂と7.5YR6/6 褐色粘土ラミナが混じる (SD105)
- 18 7.5YR6/6 褐色粘質土・7.5YR7/2 明褐色粘土ラミナ (SR01)
- 19 7.5YR7/2 明褐色粗砂 (SR01)
- 20 10YR6/6 明黄褐色粗砂・10YR7/1 灰褐色粘土ラミナ (SR01)
- 21 7.5YR5/4 にぶい褐色粘土・7.5YR5/2 灰褐色シルトラミナ (SR01)
- 22 7.5YR6/4 にぶい褐色粗砂 (SR01)
- 23 7.5YR4/4 褐色粗砂 (SR01)
- 24 10YR5/2 灰褐色粘土・7.5YR6/8 褐色粘土ラミナ (SR01)
- 25 7.5YR5/1 褐色粘質シルト・7.5YR6/8 褐色粘土ラミナ (SR01)

- 26 7.5YR5/4 にぶい褐色粗砂 (SR01)
- 27 7.5YR6/3 にぶい褐色粗砂 (SR01)
- 28 7.5YR6/2 灰褐色粘質粗砂 (SR01)
- 29 7.5YR5/3 にぶい褐色粘土 (径5~10mmの小礫を少量含む, SR01)



第12図 5区東壁・南壁土層断面図

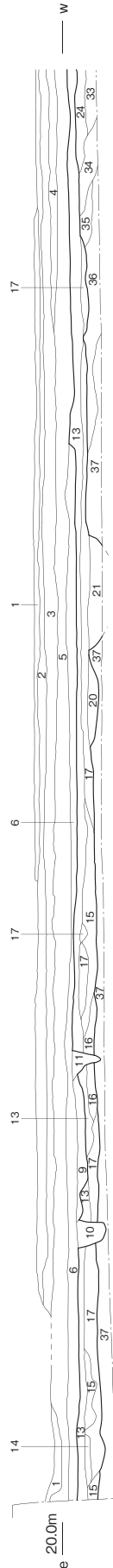


6区西壁土層断面図



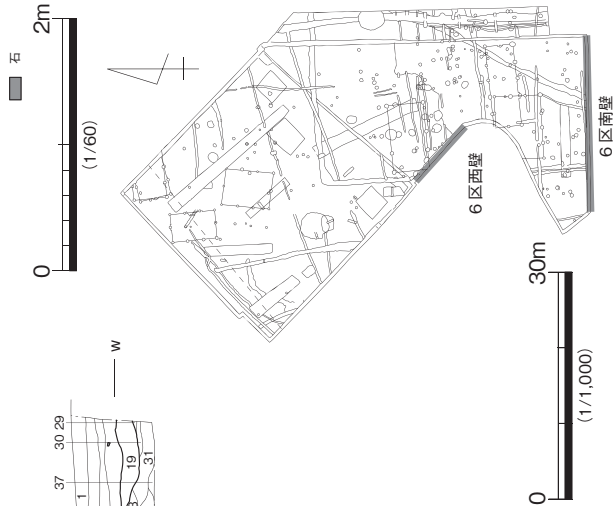
- 6区西壁土層断面図
- 1 花崗土(造成土)
  - 2 7.5YR7/2明褐色細砂粘質土 (Fe多、旧耕作土)
  - 3 10YR7/3にぶい黄褐色細砂粘質土 (Fe多、床土?)
  - 4 5YR5/1褐色細砂粘質土 (Fe、Mn多、床土?)
  - 5 5YR5/1褐色細砂粘質土 (Fe、Mn多、床土?)
  - 6 5YR5/1褐色細砂粘質土 (Fe、Mn多、床土?)
  - 7 5YR7/3にぶい褐色細砂粘質土 (SP100?)
  - 8 7.5YR7/1明褐色シルト (SP100?)
  - 9 7.5YR6/2灰褐色細砂粘質土 (SP100?)
  - 10 10YR7/1明褐色細砂粘質土 (SP100?)
  - 11 10YR7/1明褐色細砂粘質土 (SP100?)
  - 12 10YR7/2にぶい黄褐色細砂粘質土 (第2面包含層)
  - 13 10YR7/3にぶい黄褐色細砂粘質土 (第2面包含層)
  - 14 7.5YR7/1明褐色シルト~細砂 (第2面包含層)
  - 15 10YR6/2灰黄褐色細砂粘質土 (SD105)
  - 16 7.5YR7/1明褐色シルト~細砂 (SR01)
  - 17 7.5YR6/1褐色細砂粘質土 (SR01?)
  - 18 NG/灰色シルト(ラミナ)
  - 19 10YR7/2にぶい黄褐色細砂粘質土 (SR01)
  - 20 10YR6/1褐色シルト (SR01)
  - 21 7.5YR7/1明褐色シルト (SR01)
  - 22 2.5Y7/2灰黄色細砂のラミナ層 (SR01)
  - 23 10YR8/2灰白色中砂 (SR01)

6区南壁土層断面図



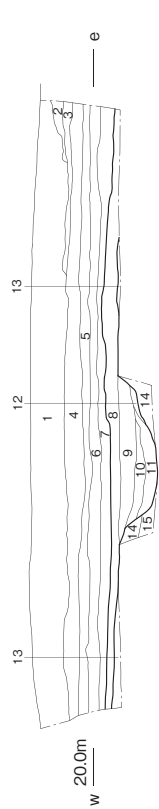
- 6区南壁土層断面図
- 1 NG/灰色粘質土 (耕作土)
  - 2 7.5YR7/2明褐色細砂粘質土 (床土?)
  - 3 7.5YR7/4にぶい褐色細砂粘質土 (Fe多、床土?)
  - 4 10YR7/3にぶい黄褐色細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 5 10YR7/3にぶい黄褐色細砂粘質土 (Fe、Mn多、床土?)
  - 6 10YR6/2灰黄褐色細砂粘質土 (Fe多、旧耕作土?)
  - 7 10YR7/1灰白色細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 8 10YR7/4にぶい黄褐色細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 9 7.5YR5/1褐色細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 10 7.5YR5/1褐色細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 11 2.5Y7/2灰黄色細砂粘質土 (サンクラックの埋土?)
  - 12 10YR7/1灰白色細砂粘質土 (SD139)
  - 13 7.5YR6/2灰褐色細砂粘質土 (Fe、Mn多、第2面包含層?)
  - 14 10YR7/6明褐色中砂のラミナ層 (第2面包含層?)
  - 15 5YR6/1褐色細砂粘質土 (Mn多、第2面包含層?)
  - 16 5YR6/1褐色細砂粘質土 (Mn多、第2面包含層?)
  - 17 7.5YR6/1褐色細砂粘質土 (Mn多、第2面包含層?)
  - 18 7.5YR6/4にぶい褐色細砂粘質土 (第2面包含層?)
  - 19 7.5YR7/1明褐色細砂粘質土 (第2面包含層?)
  - 20 7.5YR6/2灰褐色中砂粘質土 (遺構埋土?)
  - 21 10YR5/1褐色細砂粘質土 (SD128)
  - 22 10YR7/1灰白色細砂粘質土 (SD138)
  - 23 10YR7/2にぶい黄褐色細砂粘質土 (SD138)
  - 24 7.5YR7/2明褐色中砂 (SR01)
  - 25 7.5YR6/3にぶい褐色中砂 (SR01)
  - 26 10YR7/2にぶい黄褐色中砂 (SR01)
  - 27 10YR8/1灰白色中砂 (SR01)
  - 28 10YR6/3浅黄褐色細砂 (SR01)
  - 29 10YR8/3浅黄褐色細砂 (SR01)
  - 30 7.5YR7/2明褐色細砂粘質土 (SR01)
  - 31 2.5Y8/1灰白色中砂 (SR01)
  - 32 7.5YR6/1褐色中砂 (SR01)
  - 33 10YR6/2灰黄褐色中砂 (SR01)
  - 34 5YR6/1褐色細砂粘質土 (Mn多、SR01)
  - 35 2.5Y7/3浅黄色細砂~中砂粘質土 (SR01)
  - 36 10YR7/2にぶい黄褐色中砂粘質土 (SR01)
  - 37 10YR6/1褐色細砂粘質土 (SR01)

第14図 6区西壁・南壁土層断面図



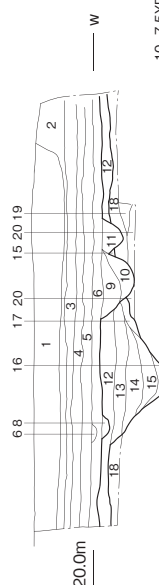


7区北壁土層断面図



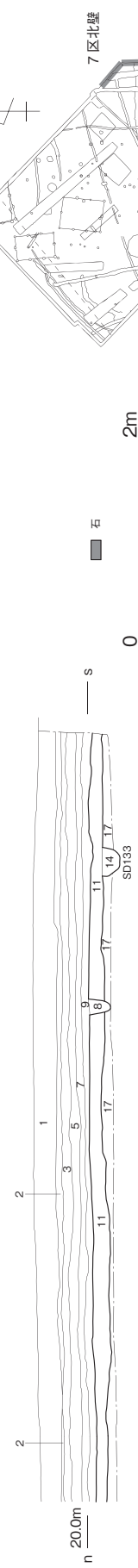
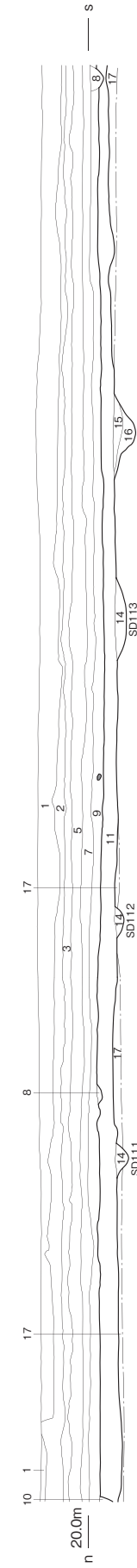
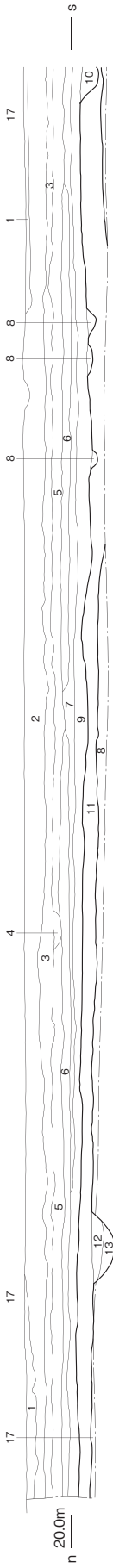
- 7区北壁土層断面図
- 1 花崗土 (造成土)
  - 2 N4/ 灰色粘質土 (耕作土)
  - 3 2.5YR6/1 赤灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 床土)
  - 4 5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 5 5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Fe多, 旧耕作土?)
  - 6 7.5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Mn多, 旧耕作土?)
  - 7 7.5YR5/1 褐灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 旧耕作土?)
  - 8 7.5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (Mn多, 第2面包含層)
  - 9 5YR5/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SD102 上層)
  - 10 7.5YR4/1 褐灰色粘土 (SD102 上層)
  - 11 7.5YR4/1 褐灰色粘土 (SD102 下層)
  - 12 5YR5/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SD102 下層)
  - 13 5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SR01)
  - 14 5YR6/2 灰褐色細砂 (SR01)
  - 15 5YR6/2 灰褐色細~中砂 (SR01)

7区南壁土層断面図

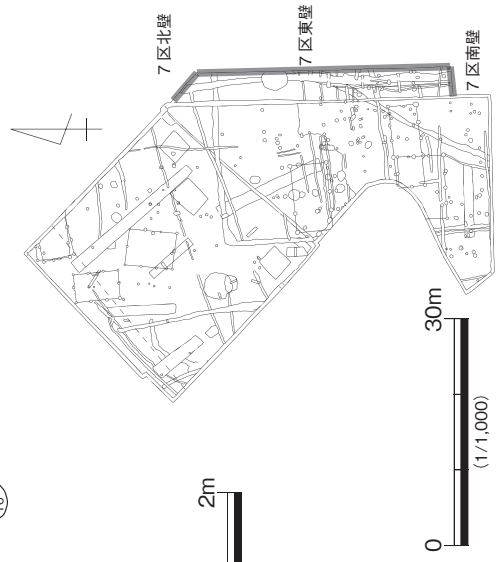


- 7区南壁土層断面図
- 1 盛土 (花崗土)
  - 2 N4/ 灰色粘質土 (耕作土)
  - 3 2.5YR6/1 赤灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 床土)
  - 4 5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 5 5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Fe多, 旧耕作土?)
  - 6 5YR7/1 明褐色泥細砂粘質土 (Mn多, 旧耕作土?)
  - 7 7.5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Mn多, 旧耕作土?)
  - 8 7.5YR7/3 に近い黄褐色泥細砂粘質土 (鐵溝埋土?)
  - 9 7.5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (SD118)
  - 10 7.5YR7/1 明褐色泥細砂粘質土 (SD118)
  - 11 10YR7/1 灰白色泥細砂粘質土 (SD115)
  - 12 5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (第2面包含層)
  - 13 2.5Y7/1 灰白色泥細砂粘質土 (SD102 上層)
  - 14 10YR6/2 灰黄褐色泥細砂粘質土 (SD102 上層)
  - 15 7.5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SD102 上層)
  - 16 5YR7/1 明褐色泥細砂粘質土 (やや強粘質, SD102 下層)
  - 17 10YR6/2 灰黄褐色泥細砂粘質土 (強粘質, SD102 下層)
  - 18 5YR5/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SR01)
  - 19 5YR6/2 灰褐色細~中砂 (SR01)
  - 20 7.5YR7/1 明褐色泥細砂粘質土 (SR01)

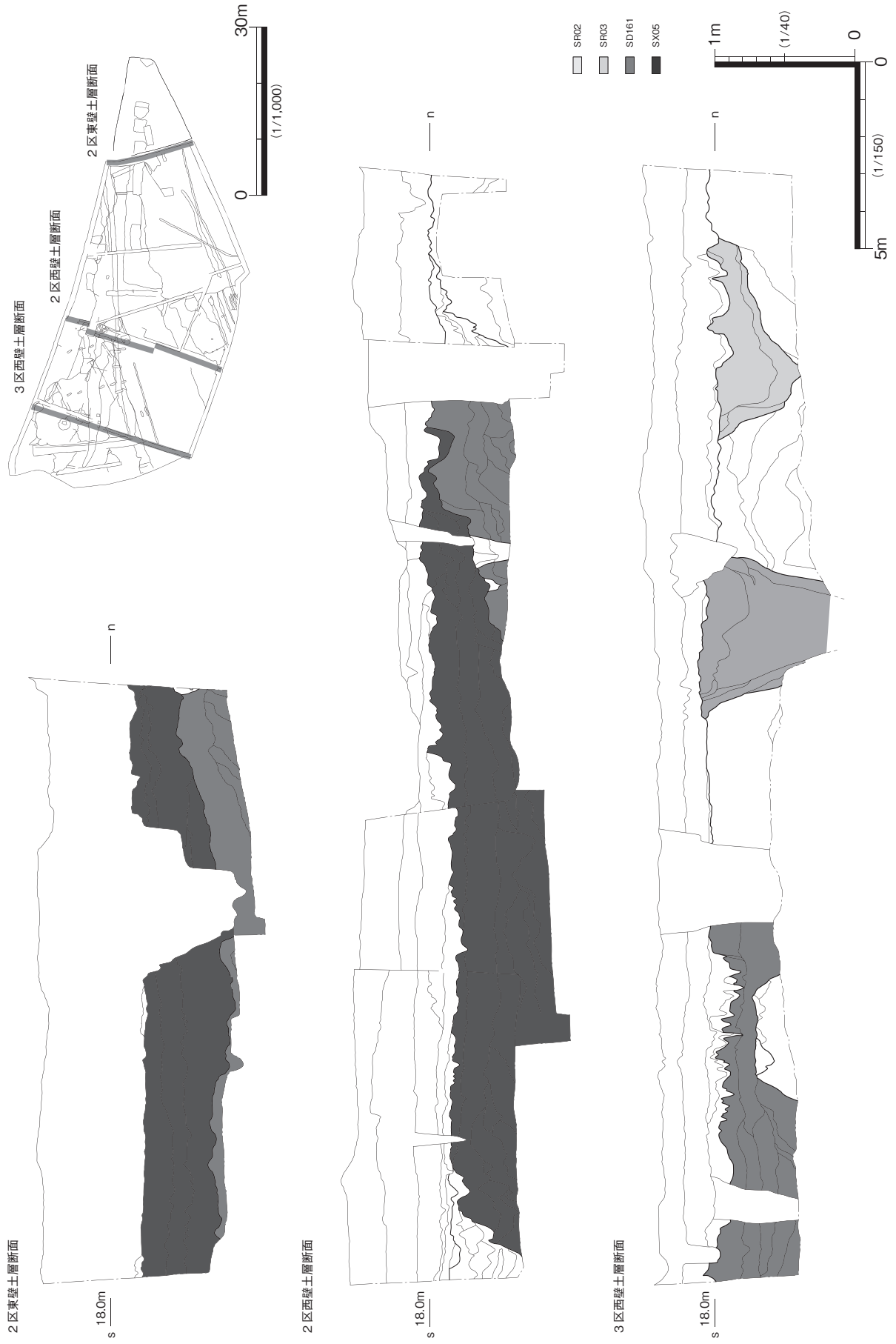
7区東壁土層断面図



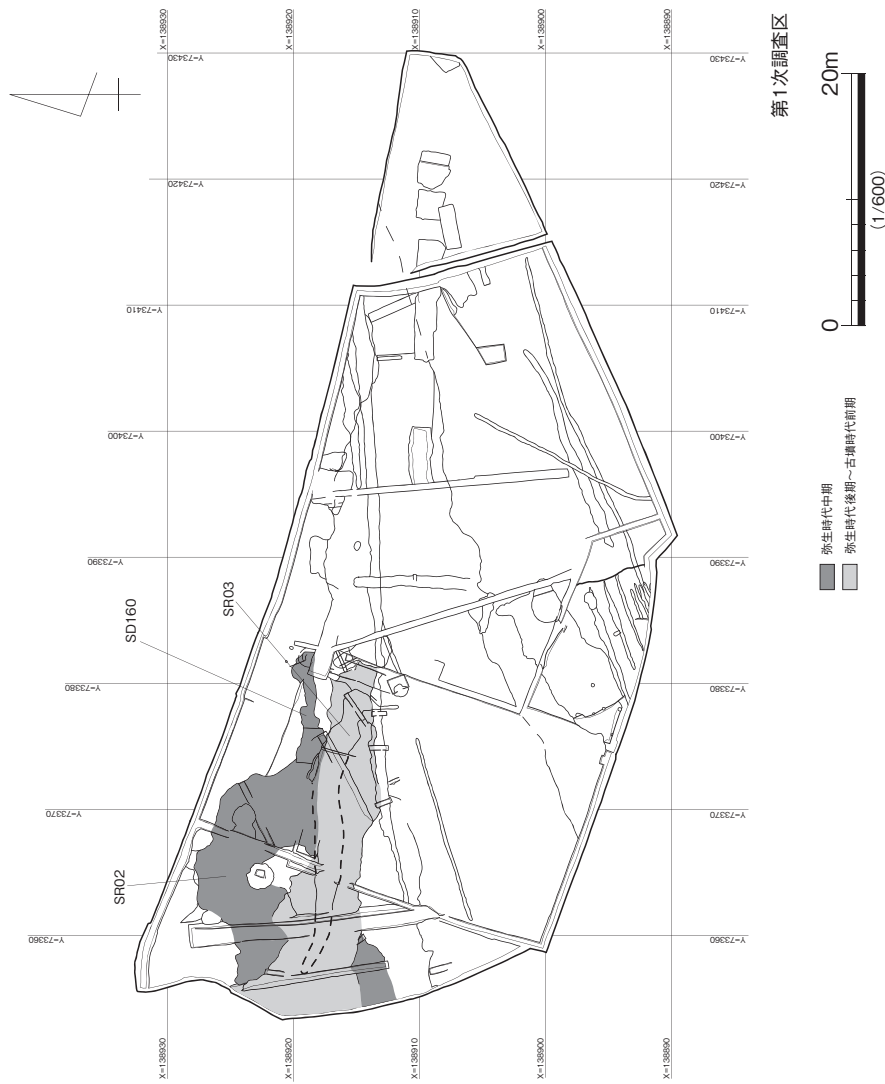
- 7区東壁土層断面図
- 1 花崗土 (造成土)
  - 2 N4/ 灰色粘質土 (耕作土)
  - 3 2.5YR6/1 赤灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 床土)
  - 4 10YR6/2 灰黄褐色泥細砂粘質土 (旧耕作土?)
  - 5 5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 旧耕作土?)
  - 6 5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Fe多, 旧耕作土?)
  - 7 10YR7/4 に近い黄褐色泥細砂粘質土 (Mn多, 旧耕作土?)
  - 8 5YR7/1 明褐色泥細砂粘質土 (鐵溝埋土?)
  - 9 7.5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (Mn多, 旧耕作土?)
  - 10 10YR7/3 に近い黄褐色泥細砂粘質土 (灰化物含む, 鐵溝埋土?)
  - 11 7.5YR5/1 褐灰色泥細砂粘質土 (Fe多, 第2面包含層)
  - 12 7.5YR7/2 明褐色泥細砂粘質土 (SD105)
  - 13 7.5YR6/2 灰褐色泥細砂粘質土 (SD105)
  - 14 10YR7/1 灰白色泥細砂粘質土 (SD111, SD112, SD113, SD133)
  - 15 7.5YR7/2 明褐色泥細砂粘質土 (鐵砂や多量に含む, SD129)
  - 16 7.5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (SD129)
  - 17 7.5YR6/1 褐灰色泥細砂粘質土 (Mn多, SR01)



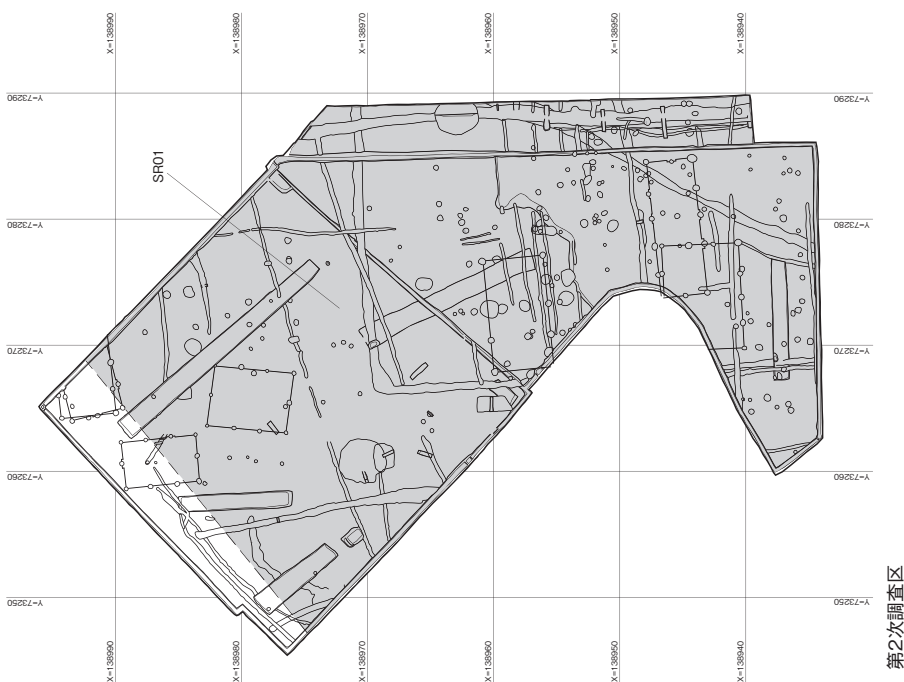
第15図 7区北壁・南壁・東壁土層断面図



第16図 SR02・SR03・SX05・SD161 重複関係



第17図 弥生時代遺構配置図



用されていた。調査前の現地表面の標高は、西側の水田（5区西半）が20.6 m前後、東側の水田（5区東半・6区・7区）が20.3 m前後で、第1次調査区同様東へ緩やかに傾斜する緩斜面地である。本調査区では、5区東・西・南壁、6区西壁の一部・南壁、7区東・北・南壁において、層序を記録した。各調査区において、基本的な層序に大きな差は認められなかった。

現地表下には、2～6層に細分される耕作土や床土、旧耕作土の水平堆積が認められた。近世～近代以降の耕作土層と考えられる。これら堆積層下で、後述する第2遺構面包含層や、5区北端では無遺物層である黄橙色バイラン土(第12図37層)をベースとする鋤溝群を主体とする遺構面を検出し

た。これを第1遺構面とする。第1遺構面の標高は、5区北端で20.2m前後、7区南端で19.9m前後と南へ緩やかに傾斜し、複数段の雛段状の耕作地として造成されていた可能性が高いと考えられる。第1遺構面の時期は、出土遺物より近世後半以降である。なお、6・7区では調査の都合上、第1遺構面の調査は実施せず、第2遺構面まで重機で掘り下げて調査を実施した。

上述した第2遺構面包含層は、5区北端を除くほぼ調査区全面において堆積が確認され、層厚は0.05～0.18mを確認した。包含層は6層以上に細分され、各々色調や土質に大きな差異が認められ、単一時期の堆積層ではない可能性が想定される。しかし、包含層からの出土遺物に乏しいため具体的な時期を特定できない。

さて、その第2面包含層下で、柱穴や溝等の遺構を検出し、これを第2遺構面として調査を行った。第2遺構面の標高は、5区北端で20.0m前後、6区南端で19.7m前後と南へ傾斜して検出された。第2遺構面で検出された建物柱穴の残存深は0.1～0.3m前後と浅く、遺構面は包含層堆積前に大きく削奪を被っている可能性が高く、遺構検出面の高低差が当時の地表面を反映したものかは不明である。なお、第2遺構面の各遺構の時期は、出土遺物より概ね13世紀を中心とする。

上述した第2遺構面のベースには、褐色系粘質土や粗砂等が堆積し、弥生土器等の遺物が出土した。一部トレンチを掘り下げて堆積状況を確認し、弥生時代後期を中心とした時期に埋没した自然河川SR01の堆積物と判断した。第2遺構面と掘り込み位置は同じだが、本自然河川を第3遺構面の遺構として、以下報告する。本自然河川については、一部トレンチにおいて底面まで掘り下げ、自然河川下に異なる時期の遺構が所在しないことを確認した。

### 第3節 遺構・遺物

#### 弥生時代

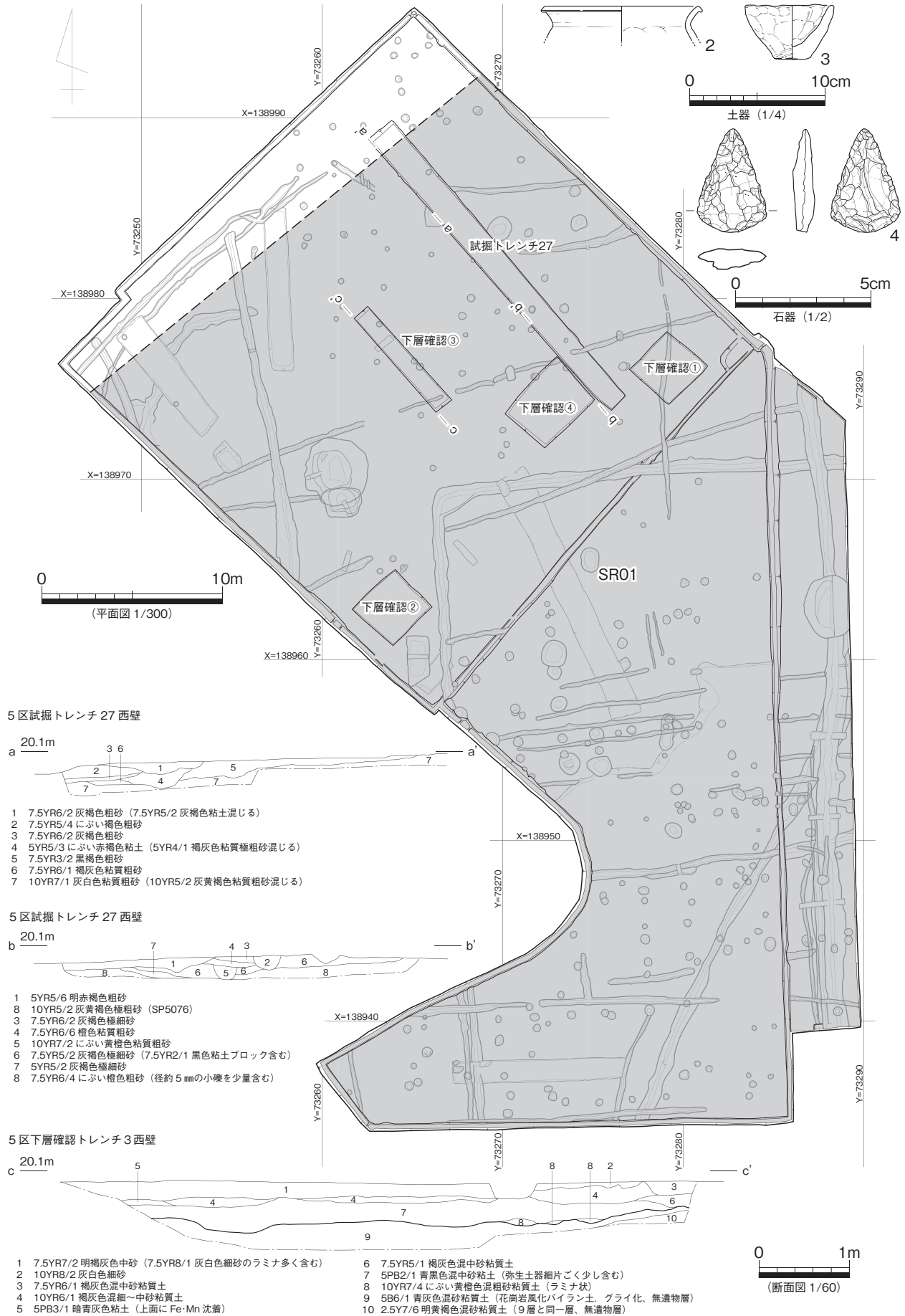
第2次調査区第3遺構面で自然河川SR01を、第1次調査区で自然河川SR02・SR03や溝SD160を検出した。

#### SR01(第18図)

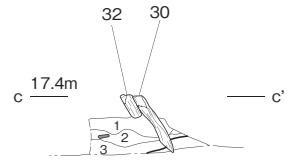
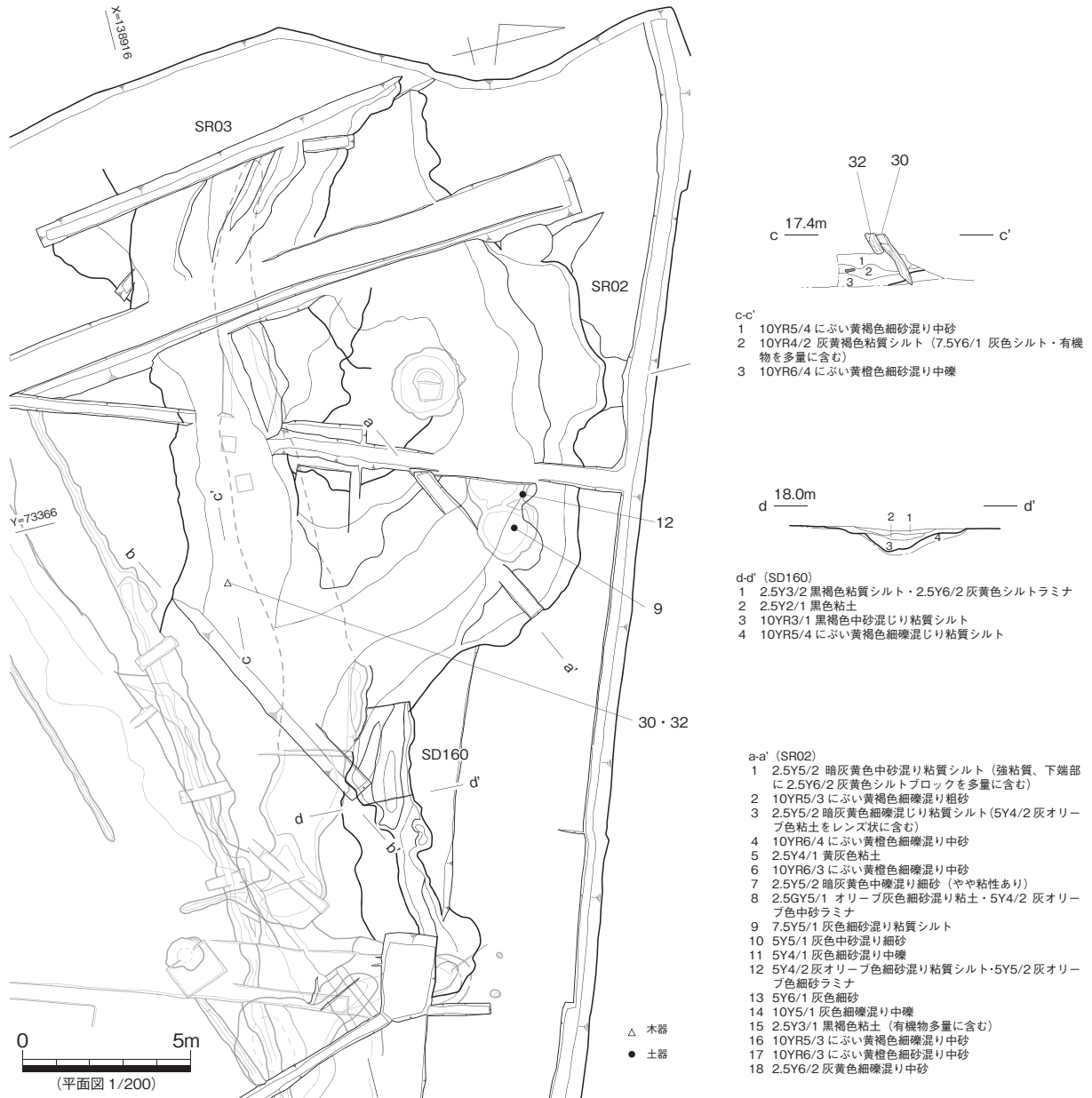
第2次調査区第3遺構面で検出した、南西から北東方向に走行する自然河川である。5区北端部旧耕作土及び第2遺構面包含層下で、無遺物層である黄橙色バイラン土(第12図37層)が露出し、北岸を確認した。南岸は調査区内で確認されず、流路幅は50m以上を測る。調査に際しては、5区において確認トレンチを4箇所設定し、さらに試掘調査時のトレンチ壁や調査区外周の壁面において、流路埋土の堆積状況を記録し、遺物を採取した。確認トレンチ3では、第2面検出面下0.68m、標高19.4m付近で流路底を確認し、北岸は緩やかに南へ傾斜して落ち込むことが確認された。なお、6・7区の調査区壁面では、最深で標高19.5m付近まで掘り下げたが、流路底面は確認できなかった。

遺物は、各確認トレンチからは弥生土器小片が少量出土したのみであったが、後述する第2遺構面の中世遺構の埋土や包含層などからは、多量の弥生土器片などが混入して出土しており、本来的には本遺構に帰属する遺物と考えられる。出土遺物には、表面に磨滅の乏しい資料も多く、近接して当該期の集落が所在する可能性が考えられる。

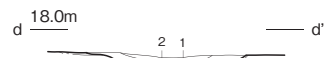
2は弥生土器甕の小片。3は同小形鉢。やや突出した平底を呈する。4は凸基式の打製石鏃。ローリ



第18図 SR01 平・断面・出土遺物実測図

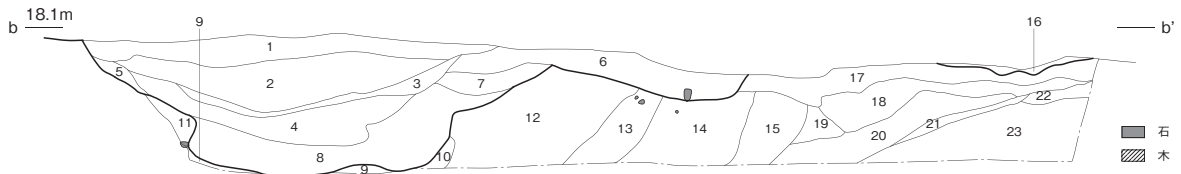
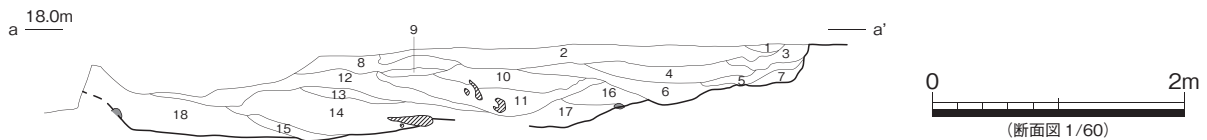


- c-c'
- 1 10YR5/4 にぶい黄褐色細砂混り中砂
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色粘質シルト (7.5Y6/1 灰色シルト・有機物を多量に含む)
  - 3 10YR6/4 にぶい黄褐色細砂混り中礫



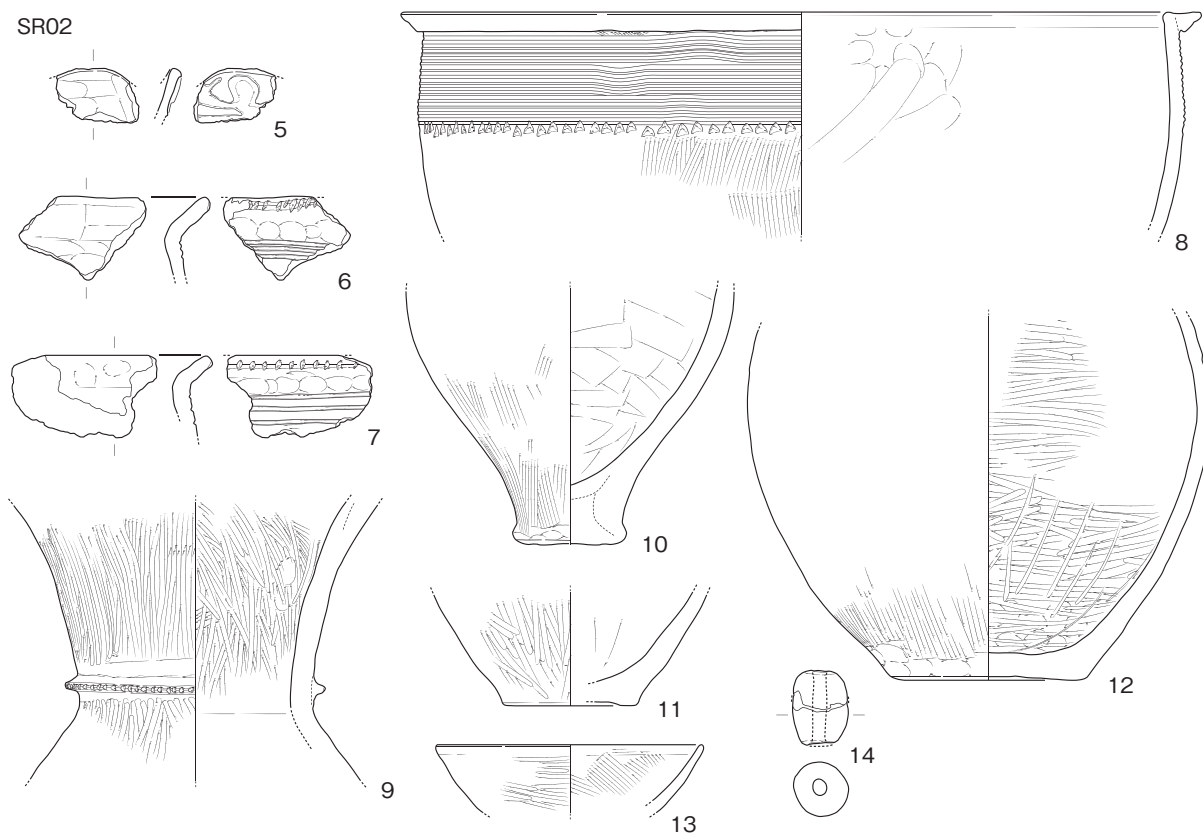
- d-d' (SD160)
- 1 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト・2.5Y6/2 灰黄色シルトラミナ
  - 2 2.5Y2/1 黒色粘土
  - 3 10YR3/1 黒褐色中砂混り粘質シルト
  - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色細礫混り粘質シルト

- a-a' (SR02)
- 1 2.5Y5/2 暗灰黄色中砂混り粘質シルト (強粘質、下端部に2.5Y6/2 灰黄色シルトブロックを多量に含む)
  - 2 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混り粗砂
  - 3 2.5Y5/2 暗灰黄色細礫混り粘質シルト (5Y4/2 灰オリブ色粘土をレンズ状に含む)
  - 4 10YR6/4 にぶい黄褐色細礫混り中砂
  - 5 2.5Y4/1 黄灰色粘土
  - 6 10YR6/3 にぶい黄褐色細礫混り中砂
  - 7 2.5Y5/2 暗灰黄色中礫混り細砂 (やや粘性あり)
  - 8 2.5GY5/1 オリブ灰色細砂混り粘土・5Y4/2 灰オリブ色中砂ラミナ
  - 9 7.5Y5/1 灰色細砂混り粘質シルト
  - 10 5Y5/1 灰色中砂混り細砂
  - 11 5Y4/1 灰色細砂混り中礫
  - 12 5Y4/2 灰オリブ色細砂混り粘質シルト・5Y5/2 灰オリブ色細砂ラミナ
  - 13 5Y6/1 灰色細砂
  - 14 10Y5/1 灰色細礫混り中礫
  - 15 2.5Y3/1 黒褐色粘土 (有機物多量に含む)
  - 16 10YR5/3 にぶい黄褐色細礫混り中砂
  - 17 10YR6/3 にぶい黄褐色細砂混り中砂
  - 18 2.5Y6/2 灰黄色細礫混り中砂

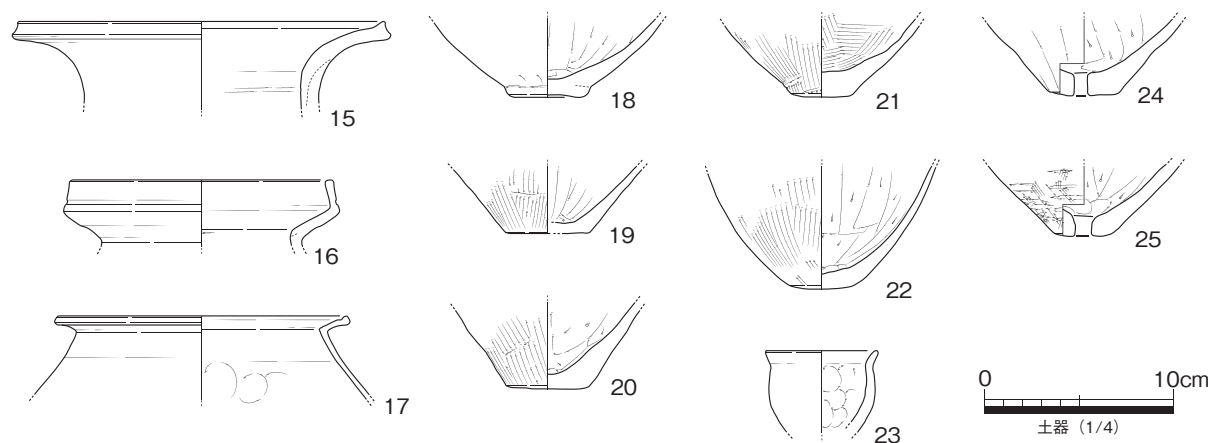


- b-b' (SR02・SR03)
- 1 10YR5/6 黄褐色中礫混り中砂 (SR03)
  - 2 2.5Y5/4 黄褐色中礫混り中砂 (西側中砂～細砂、東やや粗い、SR03)
  - 3 2.5Y6/4 にぶい黄色細～中砂 (SR03)
  - 4 10YR5/4 にぶい黄褐色中砂～中礫 (径5cm程度の小礫少量含む、SR03)
  - 5 2.5Y4/2 暗灰黄色粘質シルト (SR03)
  - 6 10YR3/2 黒褐色中礫混り細礫 (SR03)
  - 7 2.5Y7/2 灰黄色細砂混り中砂 (SR03)
  - 8 10YR5/3 にぶい黄褐色中砂混り細砂 (ラミナ著、SR03)
  - 9 2.5Y5/4 黄褐色細砂 (SR02)
  - 10 10YR4/1 褐灰色細砂質粘質シルト (SR02)
  - 11 2.5Y4/1 黄灰色粘質シルト (SR02)
  - 12 10YR5/3 にぶい黄褐色中礫混り細砂
  - 13 10YR4/1 褐灰色中礫混り細礫
  - 14 10YR5/2 灰黄褐色砂礫
  - 15 2.5Y5/3 黄褐色中礫混り細礫
  - 16 10YR5/2 灰黄褐色中砂 (SR03)
  - 17 2.5Y6/2 灰黄色細礫混り粘土 (グライ化)
  - 18 7.5Y4/1 灰色細砂 (細礫を多量に含む)
  - 19 2.5Y6/3 にぶい黄色中礫混り粗砂
  - 20 2.5Y5/2 暗灰黄色中礫混り粗砂
  - 21 5Y6/1 灰色細～粗砂
  - 22 2.5Y6/2 灰黄と2.5Y5/2 暗灰黄の中間色中砂混りシルト
  - 23 5Y5/1 灰色中砂～中礫

第19図 SR02・SR03 平・断面図



SR03



第20図 SR02・SR03 出土遺物実測図1

ングを被り、全体にやや磨滅する。確実に本遺構に伴う遺物は乏しいものの、上述した中世以降の遺構埋土などより出土した弥生土器資料含め、概ね弥生時代後期中葉～古墳時代前期前葉での流下・埋没の可能性を想定する。

SR02・SD160 (第19・20図)

3・4区北端部付近で検出した自然河川で、U字状に大きく蛇行して東西に配され、東端部でSD160が東より合流する。西端は調査区外へ延長し、東端は後述するSR03との重複位置で上面よりSD142が

開削されていたため、SR03との切り合い関係が平面的に確認できなかったが、遺物よりSR03より先行すると考えられる。またSR03の南では中世の大型幹線水路SD161が東西走しており、SD161に切られ延長を確認できていない。SK18、SE01、SD142、SR03などより先行し、本遺跡で確認された遺構としては最も古く位置付けられる。検出面幅5.8～7.0m、残存深約0.7mを測り、断面形は箱形ないし逆台形状を呈し、自然河川としてよいか判断に迷う。埋土は5～19層以上に細分され、シルトを中心に一部細～粗砂の流水堆積を認める。土層観察位置により埋土の堆積状況は大きく異なり、相互の対応関係は不詳だが、第11図(試掘トレンチ)や第19図(a断面)では複数の流路が埋没と開削を繰り返し、重複して流下していた可能性が指摘できる。

SD160は、流路方向N 88.89° Eとほぼ東西に配された直線溝である。検出面幅0.8～1.7m、残存深0.2m前後を測る。埋土は3層に細分された。

遺物は、コンテナ1箱程度の土器などが出土した。後掲観察表に記載された調査区より各々出土したが、出土層位は各遺物のラベルより、**10**は3区試掘トレンチ(第11図)17層、**7**は同15層、**13**は同12層、**6**は同14層、**8・11**が同19層、**5**が4区西壁(第10図)29層とされる。

**5**は縄文土器深鉢の口縁部小片。縄文時代後期に位置付けられ、混入資料と考える。**9**は弥生土器広口壺。頸基部の刻目突帯1条を貼付する。**12**は同壺の体～底部片とした。上げ底気味の安定した平底を呈する。**6～8・10**は同甕。**6・7**は、いずれも口縁端部下縁に刻目、頸部外面に3条のヘラ描き沈線文を施し、前期中葉に位置付けられる。**8**は口縁部下に4条1帯の複帯構成の櫛描沈線文と刺突文で飾る。中期初頭。**11**は同鉢の底部片として図示した。胎土中に結晶片岩粒を含み、徳島県吉野川流域からの搬入品の可能性がある。**13**は同小形鉢。後期後半以降に下り、後述するSR03の混入資料の可能性が高い。**14**は紡錘形を呈する管状土錘である。

出土遺物より、弥生時代前期中葉～中期前葉に流下・埋没した可能性を想定する。

### SR03(第19～21図)

4区西端から3区にかけて緩やかに屈曲して南東へ流下する自然河川として報告する。規模や概ね直線状に配される点から、大型灌漑水路の可能性も考えられる。西端は調査区外へ延長し、東端はSD161やSD142に切られ延長を確認していない。切り合い関係より、上述したSR02より後出し、SD142やSD145、SR04より先行する。検出面幅3.5～5.2m、残存深1.1mを測り、断面形は逆台形状を呈する。埋土は8～9層に細分され、一部の遺物について層位別に取り上げた。細～中砂の流水堆積が顕著にみられ、本流路も複数時期の流路が重複して流下・埋没した可能性が考えられる。

流路やや東よりの中央部付近で、打設された2本の木杭(**30・32**)を検出した。その他木杭3点と丸太材2点が出土しており、シガラミや護岸施設などが構築されていた可能性も考えられるが、**30・32**以外は詳細な出土位置などが記録されておらず不詳である。**30**は打設された木杭で、東から西へ、つまり下流側から上流側へ水平面に対して約57°傾斜して打ち込まれ、また根入りの深さは、流路底から数センチ程度と浅いことから、一定程度流路が埋没した後に打設された可能性が考えられる。**32**も形状や立位で出土した点から木杭としたが、長さは約21cmと短く、先端が流路底よりかなり浮いた位置にあることから、木杭として使用されたかは不詳である。

遺物は、コンテナ1箱の土器や石器のほか、上述した木杭等の木製品や種実などが出土している。**20**は3区西壁(第10図)21層、**16・19**は同層下端、**15・18・24**は同層上部より出土した以外は、





第21図 SR03出土遺物実測図2

出土層位不明の遺物である。**15**は古式土師器広口壺の口縁部片。**16**は吉備系の古式土師器甕の口縁部片。胎土や色調より搬入品とみられる。**17**は弥生土器甕の口縁部片で、高松平野香東川下流域産の搬入資料である。**18**～**22**は弥生土器壺・甕の底部片。**18**は小さく突出した円盤状の底部で、やや上げ底状を呈する。**22**の体部外面には煤が付着する。**23**は弥生土器小形鉢。**24**・**25**は同底部有孔鉢の底部片。いずれも小さな平底を呈し、その中央に径約0.8cmの円孔を伴う。

**26**は径約5cmのモミ属の、**27**は同約5cm、**28**は径約7cm、**30**は同約6cm、**32**は同約7.5cmのそれぞれコナラ属クスギ節の芯持材の下端を、**32**は1方向、**27**・**28**は2方向、**26**・**30**は3方向からそれぞれ削り尖らせた木杭である。**26**を除いて樹皮が残る。**32**の上端には、長軸にほぼ直交する切断痕を認めるが、本来のものかは不明である。それ以外は、いずれも上半部を折損しているとみられる。

**29**は、径約9cmのコナラ属クスギ節の芯持丸太材で、一部に樹皮が残る。下端部は、刃幅約3cm以上の伐採斧による切断痕が残され、上端は折損しているとみられるが、腐食により不明。**31**も、径約11cmのコナラ属クスギ節の芯持丸太材で、樹皮が良好に残る。下端部は、刃幅約5cm以上の伐採斧による切断痕が残され、上端は折損しているとみられるが、腐食により不明。また、中央部付近に一部切断痕が残る。

出土遺物より、弥生時代後期末～古墳時代前期前葉に流下・埋没した可能性を想定する。

## 古代

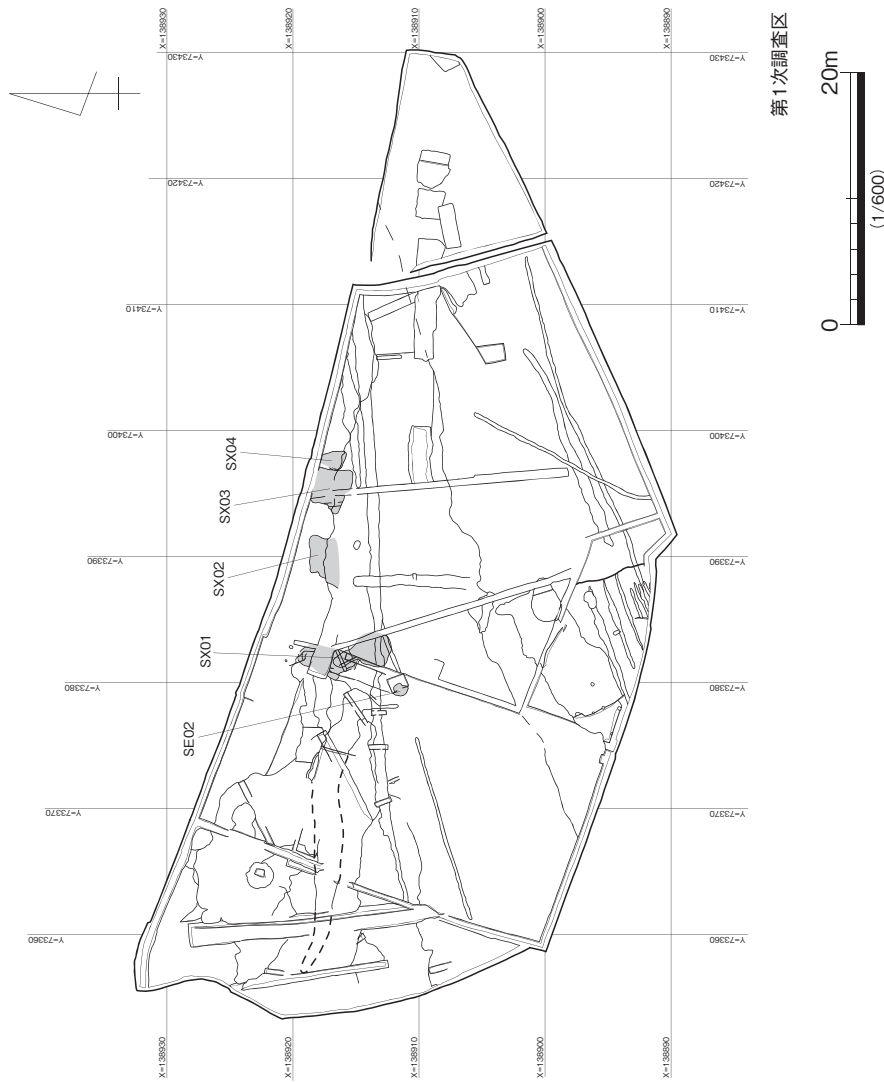
古代の遺構は、第1次調査区第2遺構面において、井戸1基と土坑状の落ち込み4基を検出した。本来の遺構面を0.5mほど掘り下げて遺構を検出したこともあり、確認された遺構数は少ない。また、多量の土器と共に、井戸や炊飯具などの遺構・遺物が出土しており、調査区外へかけて、当該期の建物等の居住施設が展開していた可能性が想定される。さらに、陶硯や銅碗のほか、斎串や土馬、墨書土器などの祭祀遺物が出土しており、文書行政に関わる有力層の居宅や官衙的性格を有する遺跡であった可能性も考えられる。

## 井戸

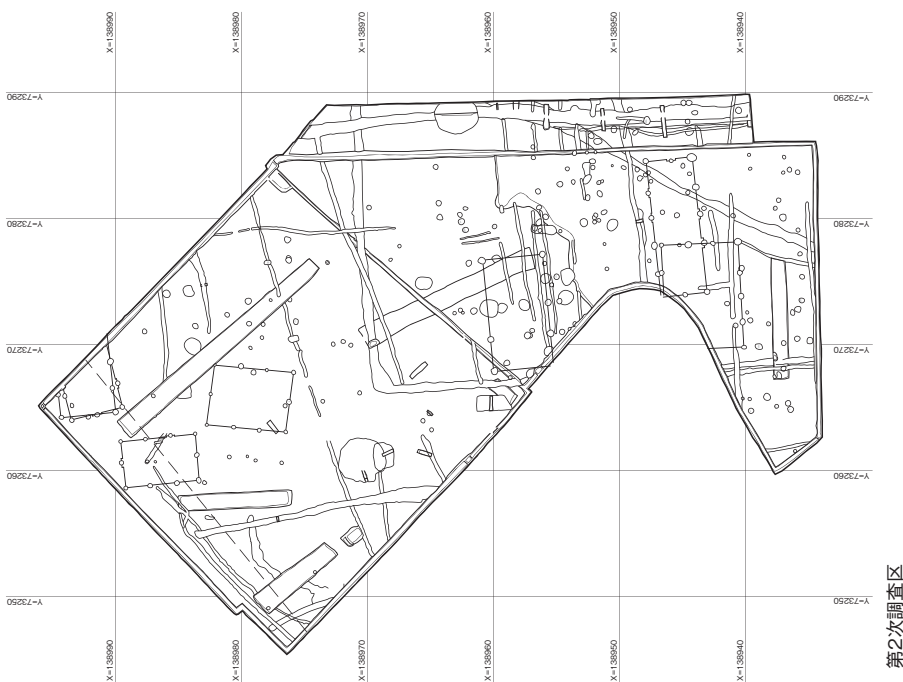
### SE02(第23図)

3区中央東端SD161の下面で検出した、曲物を井戸枠とする井戸である。掘方は、南北1.32m、東西1.02mの不整楕円形を呈し、その中央やや北よりに曲物が据え置かれていた。残存深は0.67mで、断面形は概ね逆台形状を呈し、掘方南側はやや緩やかに掘り込まれ、段掘りとなっていた。おそらくは曲物設置時に、掘方内に昇降する際に利用したものと考えられる。井戸底面は、灰色系中砂や細砂を掘り抜いており、調査時にも多量の湧水が認められた。また曲物設置後、掘方内は井戸掘削時の掘削土とみられる灰色系中砂やシルトにより埋め戻されていた。上述したようにSD161の下面で検出され、検出面で後述する曲物最上段が露出していた。検出状況より、井戸掘り方上半部は、SD161により大きく削奪されたと考えられる。

曲物は3段が積み上げられており、下位2段は完形品で、最上段の曲物のみ大きく破損して出土した。破損した曲物では井戸枠としての機能が十全ではないと考えられ、井戸構築時に破損した可能性は低い。重複するSD161開削時か開削後の水流により破損・再埋没した可能性が考えられる。調査記録では、最下段の曲物は内径0.32m、中段の曲物は内径0.40m、最上段の曲物はそれよりも一回り大き



第22図 古代遺構配置図



第2次調査区

く記録されているが、後述する曲物個々の実測値とは合致せず、ほぼ同形の曲物を積み重ねていたようである。また、中段の曲物の中位付近には、曲物を固定するため、拳大～人頭大の深成岩の垂円礫が曲物周囲に据え置かれていた。曲物内には、黒褐色系粘質シルトが堆積し、底面付近には人頭程度の垂角礫が出土し、曲げ物上面に石組が設置されていた可能性が想定される。なお、浄水施設は認められなかった。

遺物は、土師器碗や器種不詳の土器小片が数点出土したほか、掘り方より板材や炭化材小片、種実等の自然遺物が出土した。33は掘り方より出土した土師質土器碗。磨滅が顕著だが、内面にはミガキを認める。34～36は、井戸側に用いられた曲

物である。取り上げ時に大きく破損し、接合を試みたが完形には復元不能で、図示した以外にも多くの破片がある。側板の合わせ目が良好に残存しているもののみを図化した。34・35は中段、36は下段の曲物であるが、底板を固定する釘孔の位置を下に、それを認めないものは残存する端部を下に図示した。したがって図の上下が、井戸での設置時と同じであるかは不詳である。調査時の記録からは、いずれも帯板が確認されるが、復元はできなかった。現状で34に3箇所、35と36にそれぞれ2箇所の、底板を固定する径4mm程度の釘孔を認める。また、いずれも内面にはケビキが施されているが、36は斜格子状を呈する。打合せは、いずれも正面向って右前であった。

本井戸は出土遺物より、詳細な時期を特定することは困難であった。そこで、曲物36の合わせ目を綴じた樹皮について、放射性炭素年代測定を実施した。分析の詳細は第4章に記すが、結果8世紀後半～9世紀後半の年代が得られた。都合により1点のみの分析となってしまったが、井戸構築時期を推定する手がかりとなろう。遺物の面では、掘方出土とされる土師質土器碗33は、上限を佐藤編年IV期中～新相に位置付けられ、分析値の下限とせよと重複する。またこの年代は、後述する井戸周辺のSX01～SX04と概ね同時期であることも、井戸の時期を上述した年代に求めることの傍証とできよう。また本例のような積み上げ式曲物組型の出現時期は8世紀中頃とされ(鐘方2003)、香川県内で同様の構造を有する例として、高松市小山・南谷遺跡SE603があり、曲物内より出土した遺物より9世紀末～10世紀前半を上限とする廃絶時期が想定されている。以上の検討により、本井戸の開削時期については、9世紀後葉～10世紀前葉の可能性を想定する。また、この年代は後述するSD161の推定開削時期とも矛盾しない。

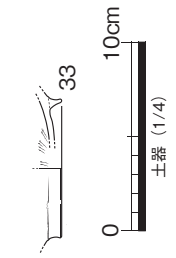
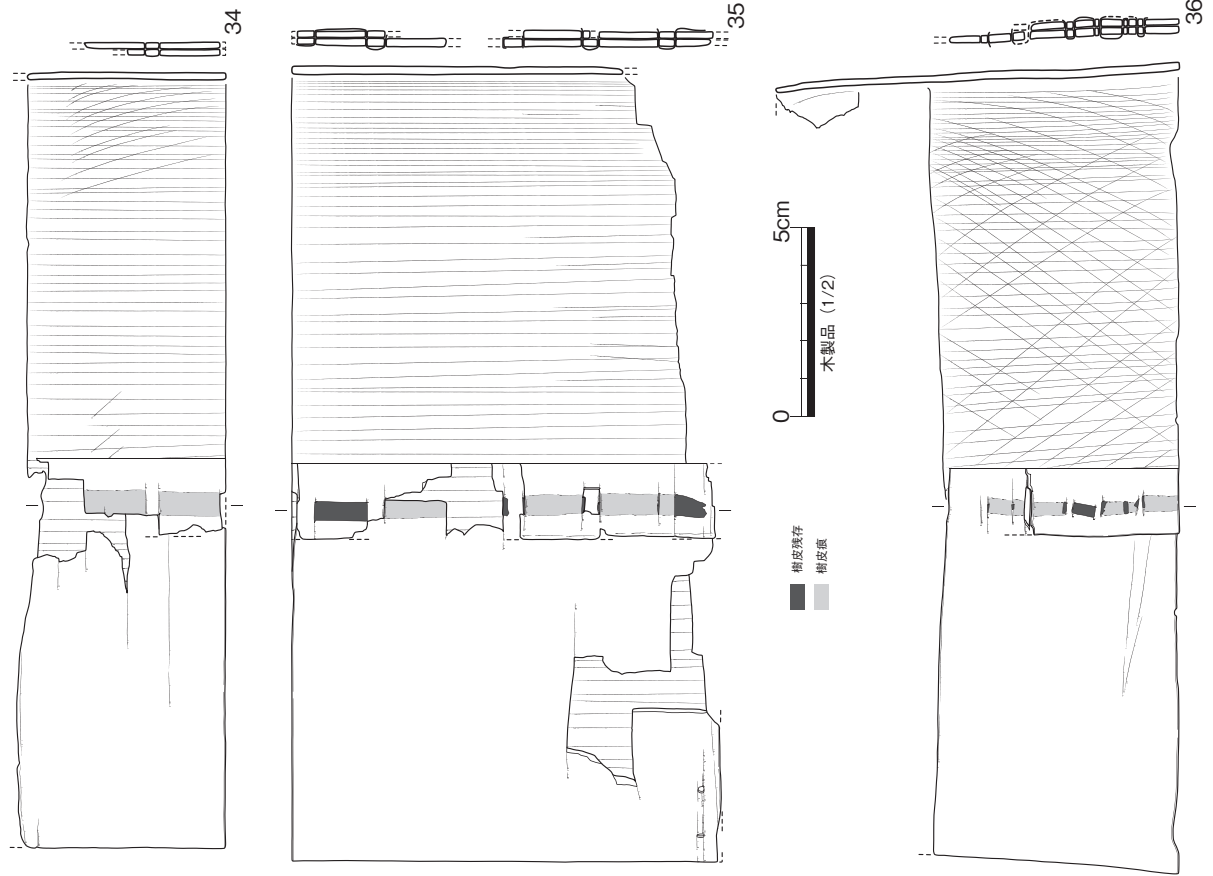
なお、本遺構からは複数個体のモモ(核)が出土している。食用や栽培の可能性を想定して、種実同定を実施した。同定の結果、ネズミ類による食痕のある個体が数点認められたものの、人為的な破砕等については、数が乏しく断定できなかった。モモ(核)については、近接して検出されたSX01やSX02などからも出土している。これら遺構は後述するように出土遺物の点から、近接した時期に開削・埋没したことが想定され、また井戸や土坑などが設置された空間であることから、モモは自生したものではなく、食用や観賞用として植樹・管理されていた可能性が考えられる。

## 性格不明遺構

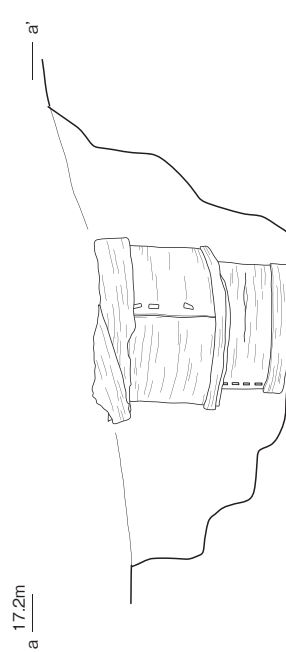
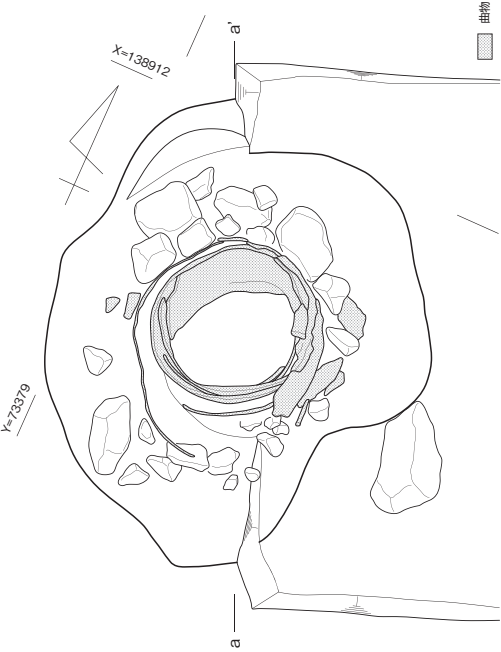
### SX01(第24～26図)

2・3区北部で検出した落ち込みである。南半部上面を大溝SD161により削奪されるほか、北半部と東端部を試掘トレンチなどにより攪乱を被り、全体形状は不詳である。南北約7.4m、東西2.3m以上を測る。調査記録では、上述した攪乱などの影響のためか、平面形は安定した形状を呈さない。しかし、写真記録(図版21～23等)を見ると、南端部の円形を呈する部分は、より以北と埋土が相違し、後出する別の遺構の可能性もある。底面の標高は、北端部で17.43mを、中央部で17.18mをそれぞれ測り、強く南へ傾斜して掘り込まれているが、これは上述した複数の遺構の重複を誤認して調査を進めた結果かもしれない。埋土は6層に細分され、上位3層中には炭化物の混入が認められる。遺構周辺で何らかの燃焼行為が生じ、その残滓を廃棄した廃棄土坑の可能性も想像される。しかしながら、埋土に関する情報が乏しいこともあり、遺構の性格などについては明らかにできない。

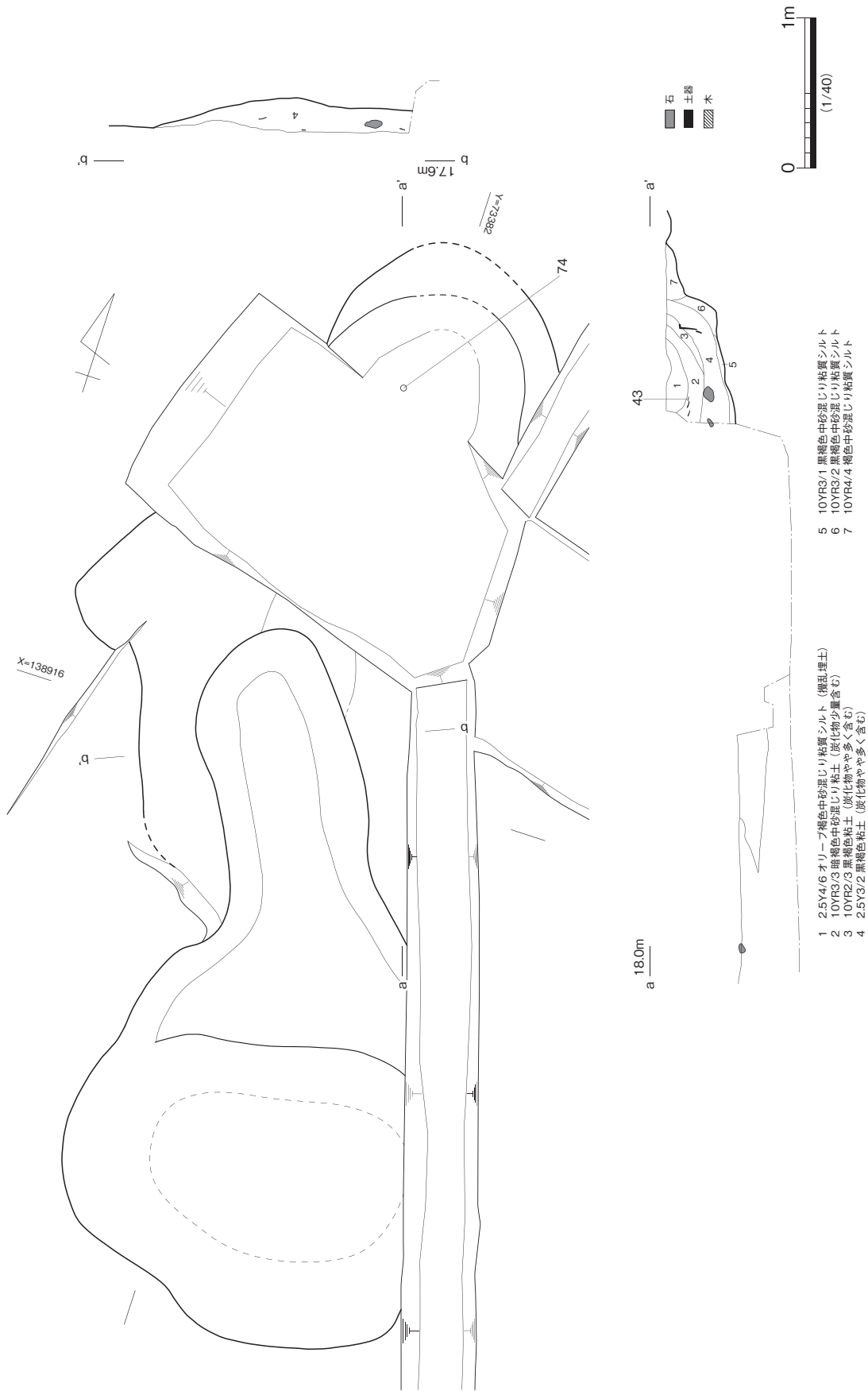
遺物は、図示した遺物のほか、土師器竈や須恵器杯・碗・壺等の小片がコンテナ1箱程度出土したほか、4層を中心に炭化材や種実などの自然遺物が少量出土した。上述したように、本遺構は複数の遺構



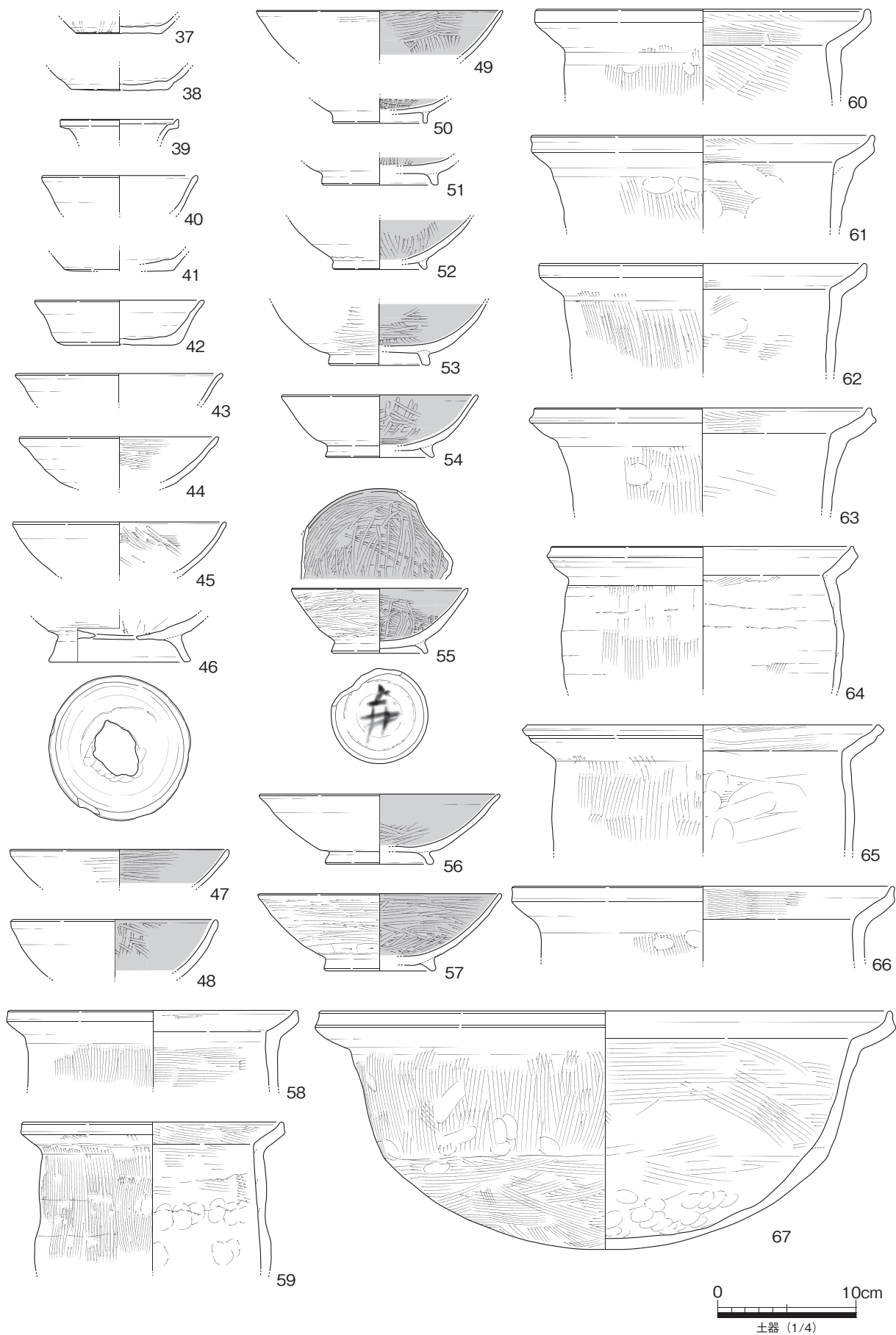
- 1 7.5YR2/2 黒褐色と 10YR3/1 黒褐色の中細砂混り粘質シルト
- 2 5Y4/1 灰色細混り粘質シルト (径 30mm以下の礫含む)
- 3 5Y4/1 灰と 5Y3/1 オリーブ風の中間色細砂混り中砂
- 4 5Y7/1 灰白色細砂混り中砂
- 5 10GY6/1 緑灰色中砂混り粘質シルト
- 6 2.5GY6/1 オリーブ灰色細砂混り中砂 (10GY6/1 緑灰色粘質シルトをブロック状に含む)
- 7 5Y5/1 灰色中砂混り粘質シルト (無遺物層?)
- 8 5Y5/1 灰色中砂混り粘質シルト (7.5Y7/1 灰白色シルト等をミナ粒に含む、無遺物層?)
- 9 5Y7/1 灰白色中砂混り細砂 (無遺物層?)
- 10 5Y6/1 灰色粘質シルト (無遺物層?)



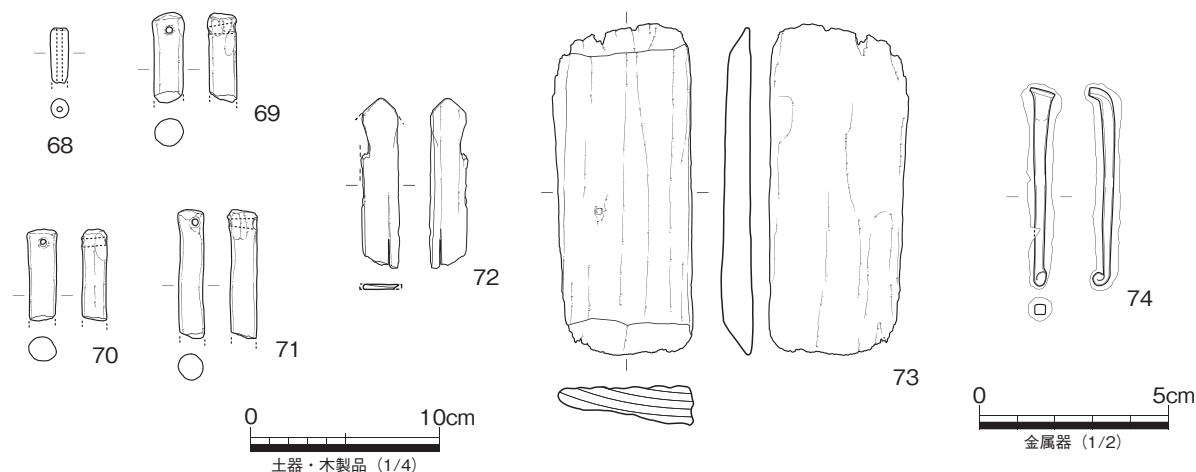
第23図 SE02 平・断面・出土遺物実測図



第24図 SX01 平・断面図



第25図 SX01 出土遺物実測図1



第26図 SX01出土遺物実測図2

の重複の可能性が高く、出土遺物はそれら遺構の遺物が混在したものである。各遺物の詳細な出土位置は不明で、重複した遺構の時期を推定することはできない。

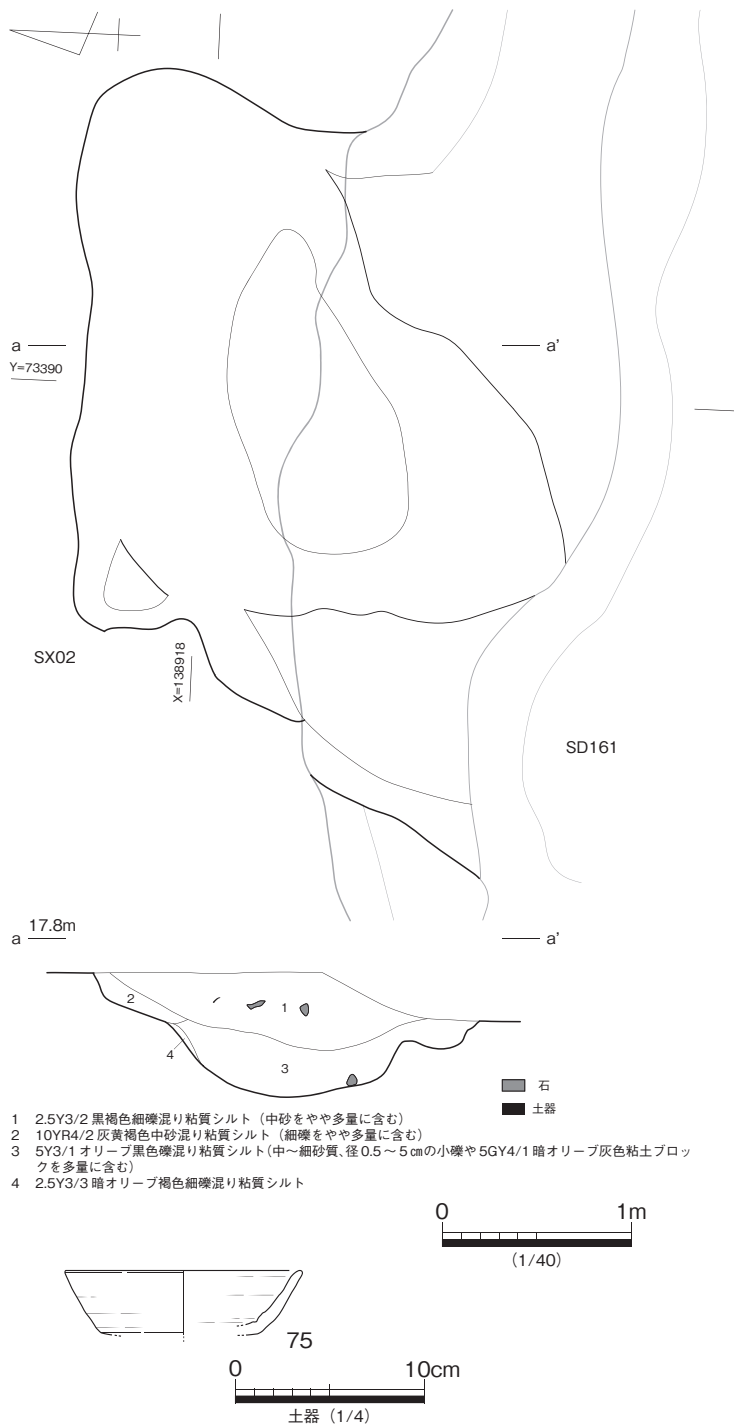
37・38は須恵器杯の底部片。39は須恵器壺の口縁部。40～42は土師質土器杯で、口縁部は小さく外反して開く。43は畿内産の緑釉陶器碗の口縁部小片。口縁端部は小さく外反し、内外面に明緑色の釉が掛けられる。44・45は土師質土器碗。内面にミガキ調整は認められるものの、器形より12世紀後半に位置付けられ、混入の可能性も考えられる。46は同台付杯の高台部片。内外面に薄く煤が付着する。また底部中央部の孔は、意図的に焼成後穿孔した可能性があるが、磨滅のため断定はできない。47～57は黒色土器A類碗。55を除いて、器面は磨滅が顕著な資料が多い。53はB類碗の可能性はあるが、外面への炭素の吸着が内面と比して著しく劣ることからA類として報告する。55の高台内には「上井」と墨書がみられる。井堰などの用水に関わるものと考えられ、後述する斎串とともに、祭祀に用いられた可能性が考えられる。57は体下端部にケズリ調整を施し、その後底部に高台を貼付している。58～66は土師器甕。いずれも外面には薄く煤が付着するか、被熱による変色を認める。胎土中に黒雲母細粒をやや多量に含むものと、少量しか認めないものとがあり、製作地が異なる可能性がある。67は完形に近く復元される土師質土器鍋。体～底部外面を中心に、煤が厚く付着する。

68は管状土錘である。69～71は棒状土錘。いずれも半損しており全形は不明。71の紐孔は、やや図右側へ偏って穿たれる。69は胎土中に角閃石細粒を少量含み、搬入資料の可能性はある。

72は、アスナロの板目材を用いた斎串である。頭部を圭頭状に尖らせ、左右肩部に1箇所切り込みをそれぞれ入れる。下半部は折損しており不明。下川津遺跡分類(香川県教育委員会ほか1990)の2類に分類される。73は用途不明のヒノキの板材である。図左面上下端は、上面より1.5～2.0cm程度斜めに削り、長軸方向の断面形状は台形状を呈して尖る。表面は腐食が進み、加工痕などは不明である。74は角釘で、頭部を折り曲げ、先端部は小さく屈曲する。

出土した遺物は、混入資料を除くと佐藤編年IV期中相(56・57・63・64等)と、同IV期新相(46・54・55・66・67等)の大きく2時期に位置付けられ、上述した遺構の重複の可能性を遺物の点からも傍証するものとする。





第27図 SX02 平・断面・出土遺物実測図

り中世に位置付けられ、時期や切り合い関係が正しいとすれば、本遺構の出土遺物はすべて混入資料となる。SD161埋土(第9図15層)底面と本遺構の埋土(同図6層)の底面が、ほぼ同じレベルで連続することからすれば、誤認の可能性も考えられる。

東西3.65m以上、南北3.16m以上を測り、平面形は検出部分でやや歪な隅丸形状を呈する。残存深は0.68mで、断面形は概ね逆台形状を呈するが、底面には不整な起伏が多数認められた。平・断面形状から、複数遺構の重複の可能性も考えられる。埋土は7層に細分され、埋土中位東壁付近(4・5層)には、壁面の崩落に起因するとみられるブロック土の混入がみられ、下位層(6・7層)はグライ

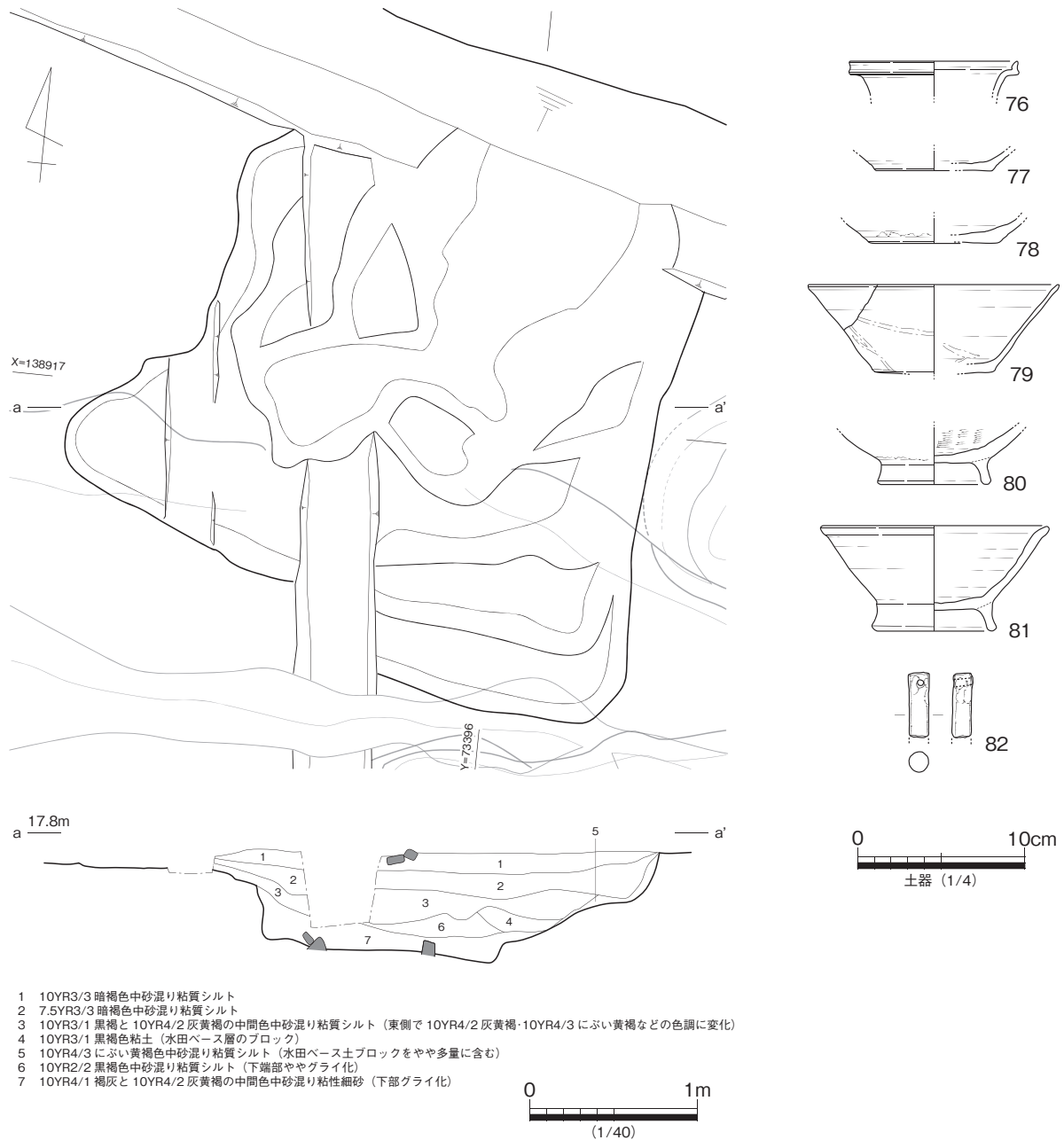
### SX02 (第27図)

2区北端部で検出した落ち込みである。南半部上面を後述するSD161に削奪され、全形は不詳である。現状で、東西3.4m以上、南北2.6m以上を測り、平面形は安定した形状を呈さない。残存深は0.66mで、断面形は概ね逆台形状を呈するものの、南辺には不整なテラス面が付す。埋土は4層に細分され、下位層(3層)のみ多量のブロック土を含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。平・断面形状や埋土の特徴より、複数の遺構が重複していた可能性が考えられる。

遺物は、図示した以外に、器種不詳の土器や須恵器の小片計7点が出土したほか、種実が少量出土した。75は須恵器杯である。出土遺物が乏しく詳細な時期を特定することは困難だが、9世紀後半～10世紀前葉を前後する時期に位置付ける。

### SX03 (第28図)

2区中央北端部で検出した落ち込みで、北半部は調査区外へ延長し、全形は不詳である。また、切り合い関係より後述するSX04より後出する。なお、2区トレンチ2の土層図(第9図)では、SD161上面より本遺構が穿たれていることが記録されている。しかし、後述するようにSD161は出土遺物より

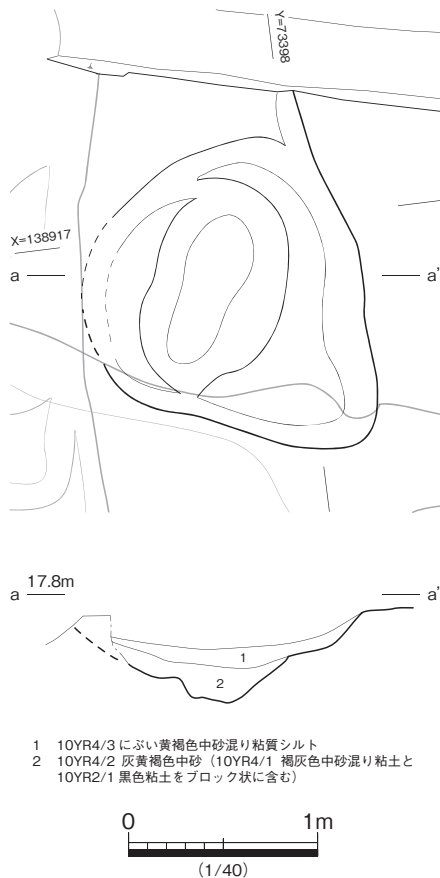


- 1 10YR3/3 暗褐色中砂混り粘質シルト
- 2 7.5YR3/3 暗褐色中砂混り粘質シルト
- 3 10YR3/1 黒褐と10YR4/2 灰黄褐の中間色中砂混り粘質シルト (東側で10YR4/2 灰黄褐・10YR4/3 にぶい黄褐などの色調に変化)
- 4 10YR3/1 黒褐色粘土 (水田ベース層のブロック)
- 5 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (水田ベース土ブロックをやや多量に含む)
- 6 10YR2/2 黒褐色中砂混り粘質シルト (下端部ややグライ化)
- 7 10YR4/1 褐灰と10YR4/2 灰黄褐の中間色中砂混り粘性細砂 (下部グライ化)

第28図 SX03 平・断面・出土遺物実測図

化し、滞水下の埋没の可能性が想定された。遺構開削後、オープンな状況下で一定期間放置された可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺、赤彩土師器、土師器杯・碗・甕、黒色土器、須恵器杯などの小片が若干量出土したほか、サヌカイト剥片1点(7.70 g)が出土した。上下2層に分層して、遺物を取り上げられているが、挿図に上・下の層名の記載がなく不明である。図示した遺物では、82が上層、76は層位不明、以外はすべて下層出土とされる。76は須恵器壺の口縁部小片である。77は同皿の底部片。79は同杯で、破損後に内外面に黒色物が付着する。以上の須恵器は、概ね十瓶山編年Ⅲ-1～2期に位置付けられる。78は土師質土器杯の底部片。80・81は同碗である。80の外面には、煤が付着した痕跡がある。81は、10世紀中葉から後半に位置付けられる可能性があり、出土遺物には若干の時期幅を認める。82は棒状土錘。胎土中に角閃石細粒を少量含み、搬入品の可能性がある。



第29図 SX04 平・断面図

## SX04 (第29図)

2区中央北端で検出した落ち込みである。北半部は調査区外へ延長し、西端部は上述したSX03に切れ、南端部上面をSD161に削奪され、全形は不詳である。東西1.48m以上、南北1.76m以上を測り、平面形は現状で歪な隅丸方形状を呈する。残存深は0.48mで、断面形は播鉢状を呈する。埋土は2層に細分され、黄褐色系の粘質シルト・中砂が堆積していた。

遺物は、土師器や黒色土器の小片が計4点出土したのみである。図化可能な資料はなく、時期を特定することは困難であるが、上述したようにSX03やSD161より先行し、出土遺物の内容より、10世紀前葉を中心とした時期に位置付けられると考える。

## 中世

当該期の遺構は、第2次調査区で13世紀代の屋敷地やそれに後続する畑などの耕作地、第1次調査区で大型灌漑水路などの遺構を検出した。屋敷地の調査では、屋敷地成立にやや遅れて方形区画溝が開削される。しかし区画は短期間で廃され、その後も屋敷地の経営は継続するものの、区画の有

無は調査からは明らかにできなかった。屋敷地が廃絶した後は、鋤溝群が展開し、畑などの耕作地として利用されたようだ。また、1次調査区の水路SD161は、屋敷地成立前に開削され、番屋川から直接取水する大型灌漑水路と考えられ、屋敷地の経営期間にも維持され、屋敷地の廃絶を待たずに水路は放棄されてはいるが、位置や時期からみて、水路と屋敷地とは何らかの有機的な関係をもっていた可能性が想定される。

なお、屋敷地の建物や溝の主軸方向は、調査区周辺の現状地割に概ね合致し、才野池東方に広く分布する条里型地割とは異なる。遺跡周辺には、条里型地割は及ばなかったと考えられ、地割施工時期に遅れて開発がなされたことが、その要因の一つと考えられる。

## 掘立柱建物

## SB01 (第31図)

5区北東隅で検出した東西棟の掘立柱建物で、東半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。なお、調査区東壁(第12図)で遺構埋土とした29・30(4・5)層は、本建物に伴う柱穴の可能性が高く、仮にそのように理解すれば、第2面包含層である5層上面より掘り込まれており、本遺構は第1遺構面に帰属する遺構の可能性が高い。後述するSB02と重複し、SP12を共有し、後述するように調査区東壁の31～34(6～9)層を、SB02に伴う柱穴埋土とすれば、SB02より後出する。桁行2間(4.01m)以上、梁間2間(4.33m)、床面積17.36㎡以上、主軸方向N 6.31°Wに配された東西棟の側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.35～0.50mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.08～0.22mの断面

U字状ないしは皿状を呈する。柱穴底面の標高は、19.83～20.07 mと一定しないが、柱通りは概ね揃う。明確な柱痕が確認された柱穴は乏しく、また詰石や根石なども確認していない。埋土は、灰褐色粗砂や黄橙色粘質土の単層であった。

遺物は、SP01・SP02より器種不詳の土器小片各1点と、SP12より器種不詳の土師質土器などの小片2点が出土した。図化可能な資料はなく、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、出土遺物や周辺遺構との関係などより、当該期の遺構として報告する。

### SB02 (第32図)

5区北東隅で検出した東西棟の掘立柱建物で、東半部は調査区外へ延長し、全形は不明である。上述したように、調査区東壁(第12図)の31～34(6～9)層は、本建物に伴う柱穴埋土の可能性が高く、仮にそのように理解すれば、本建物も第1遺構面に帰属し、SB01より先行する。桁行2間(3.74 m)以上、梁間2間(4.16 m)、床面積15.56㎡以上、主軸方向N 13.97° Wに配された側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.36～0.50 mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.13～0.16 mの断面箱形ないしはU字状を呈する。柱穴底面の標高は、19.80～20.05 mと一定せず、柱通りもやや揃わない。柱痕が確認された柱穴はなく、また詰石や根石等も確認していない。埋土は、灰褐色粗砂や黄橙色粘質土の単層であった。

遺物は、上述したSB01と柱穴を共有するSP12より出土した器種不詳の土師質土器などの小片2点のみが出土した。図化可能な資料はなく、出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、出土遺物や周辺遺構との関係などより、当該期の遺構として報告する。

### SB03 (第33図)

5区中央北端第2面で検出した南北棟の掘立柱建物である。SD015・SD017と重複するが、柱穴に切り合い関係はなく、先後関係は不明である。桁行3間(5.90 m)、梁間2間(3.69 m)、床面積21.77㎡、主軸方向N 6.27° Wに配された側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.28～0.45 mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.10～0.20 mの断面皿状ないし箱形を呈する。柱穴底面の標高は、19.83～20.13 mと一定しないが、柱通りは概ね揃う。建物南東隅のSP30で、径0.30 mの柱痕を確認したのみで、それ以外の柱穴で柱痕は確認されず、また詰石・根石などは検出していない。埋土は、褐色系粗砂や粘質土が堆積していた。

遺物は、SP16より器種不詳の弥生土器等の小片2点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、柱穴埋土や周辺遺構との関係等より、当該期の遺構として報告する。

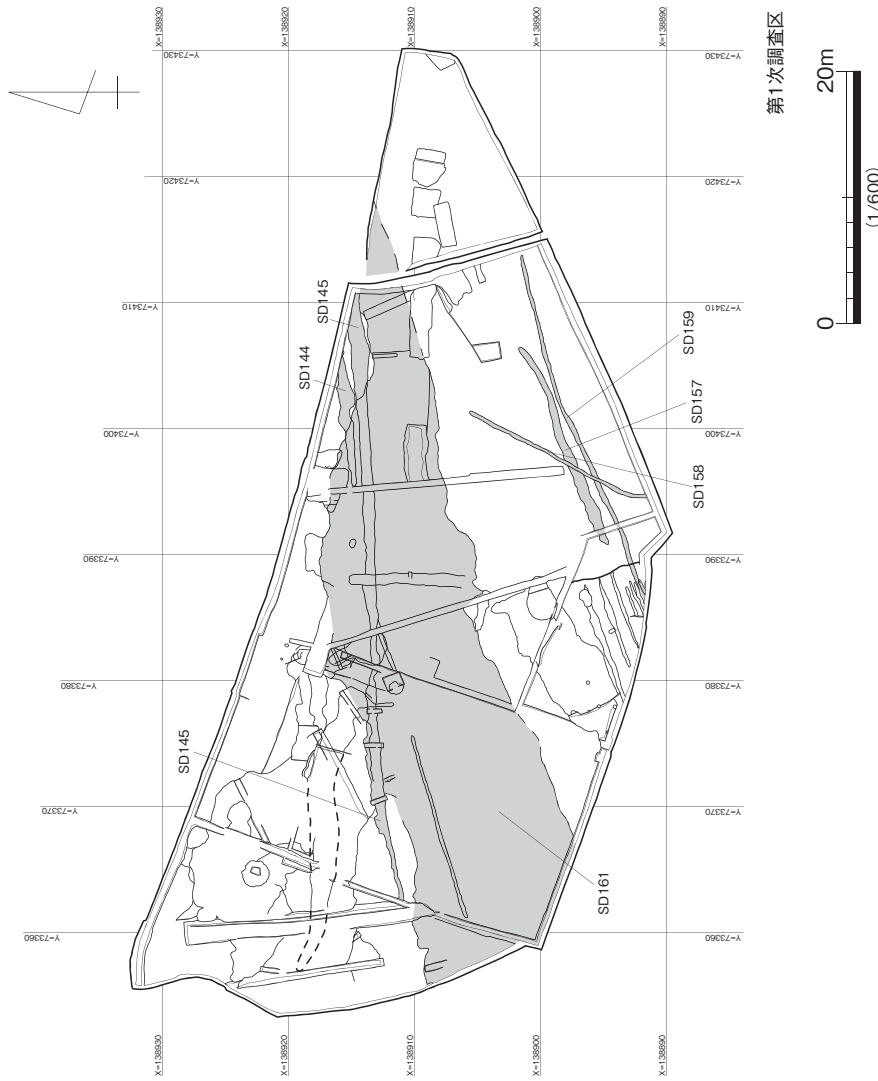
### SB04 (第34図)

5区中央北部第2面で検出した南北棟の掘立柱建物である。北東隅SP35を試掘トレンチに切られるが、ほぼ全形を検出した。桁行3間(6.29 m)、梁間2間(4.79 m)、床面積30.13㎡、遺跡周辺の条里型地割に概ね合致するN 5.09° Eに配された側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.23～0.40 mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.03～0.13 mと浅く、断面形は皿状を呈する。柱穴底面の標高は19.86～19.94 mと一定し、柱通りも概ね揃っている。建物梁間南列中央SP60で、径0.17 m前後の柱痕を確認したのみで、それ以外の柱穴で柱痕は確認されず、また詰石・根石などは検出していない。埋土は、主にベースSR01に由来する褐色系粘質粗砂が認められた。

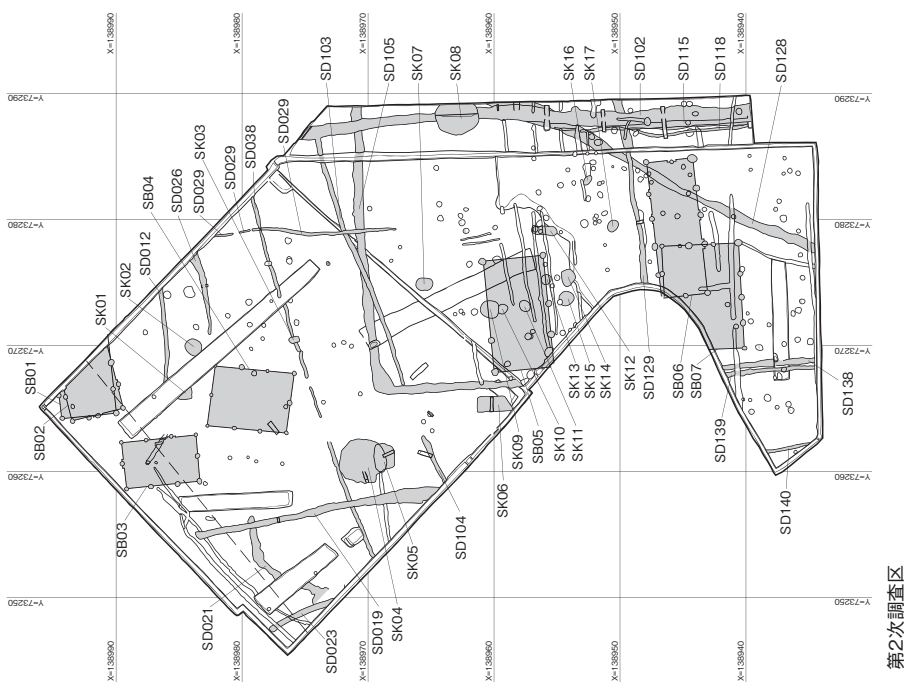
遺物は、SP46とSP60より器種不詳の土器小片計3点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、柱穴埋土や周辺遺構との関係などより、当該期の遺構として報告する。

SB05 (第35図)

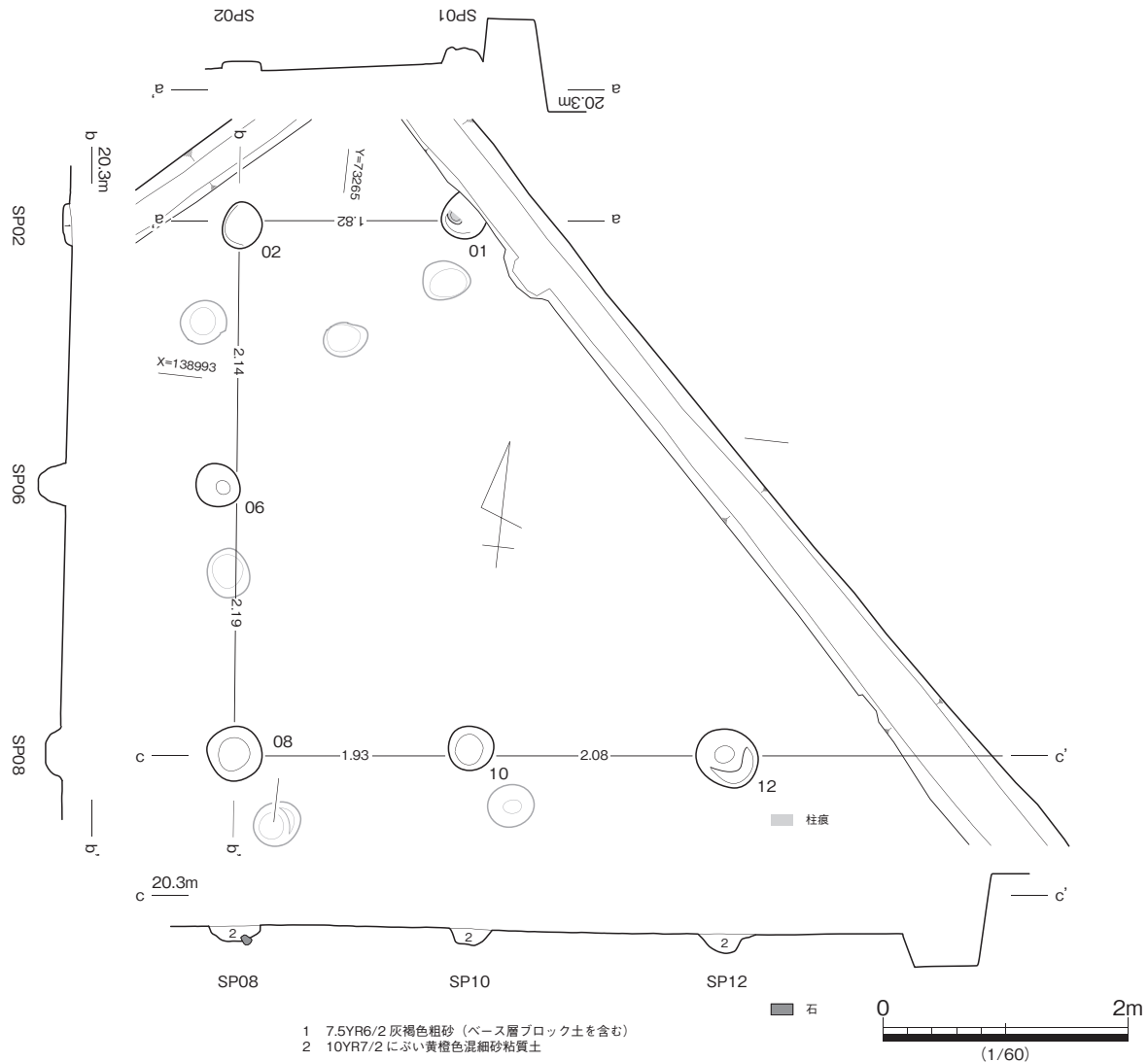
6区北西隅で検出した東西棟の掘立柱建物である。南西隅柱が調査区外となるが、概ね全形は確認できた。SK09・SK13と重複し、重複位置で本建物に伴う柱穴が確認できなかったことから、これら遺構よりも先行すると考える。桁行4間(8.80m)、梁間1間(4.81m)、床面積42.33㎡、主軸方向N6.45°Wに配された大型の側柱建物として復元する。北と南面に庇を伴う可能性が想定されたが、



第30図 中世遺構配置図



第2次調査区



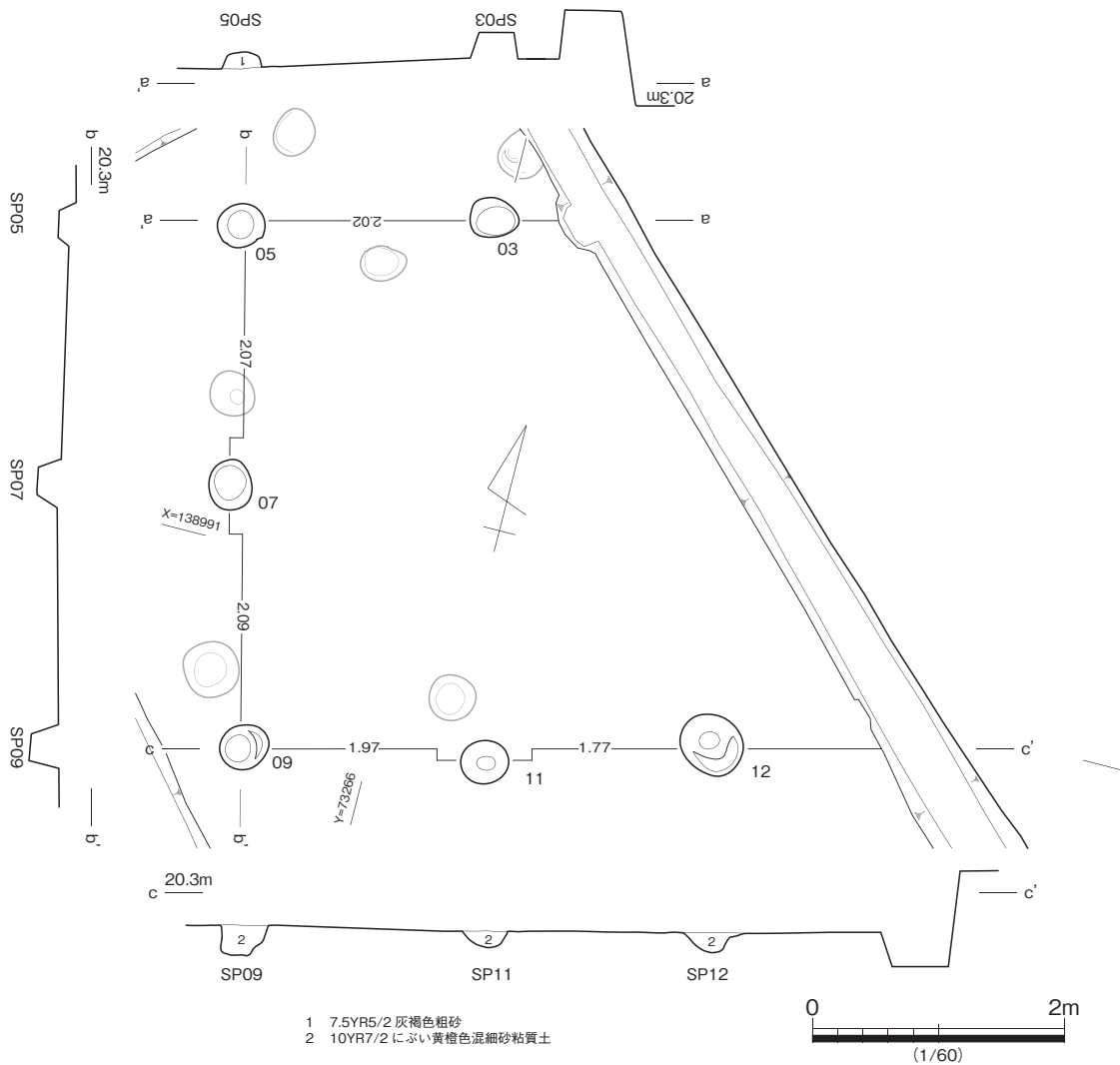
第31図 SB01 平・断面図

断定できなかったため図示していない。柱穴は、長径 0.42～0.53 m の平面略円ないし不整形を呈し、残存深 0.12～0.35 m で、断面形は箱形ないし皿状を呈する。柱穴底面の標高は 19.52～19.77 m と一定しないが、柱通りは概ね揃っている。桁行南列 SP109・SP113・SP114 の各柱穴で、径 0.2～0.3 m の柱痕を確認したのみで、それ以外の柱穴で柱痕は確認されず、また詰石・根石などは検出していない。埋土は、主に褐灰色粘質土が堆積していた。

遺物は、SP84 より器種不詳の土器や須恵器、土師質土器皿の小片各 1 点、SP90 より土師質土器皿などの小片 3 点、SP91 より弥生土器や須恵器壺、土師質土器杯などの小片 14 点、SP109 より器種不詳の土器小片 2 点、SP112 より土師質土器皿などの小片 3 点、SP114 より器種不詳の弥生土器や土師質土器小片 7 点がそれぞれ出土した。**83** は SP91 より出土した土師質土器平高台碗の小片。空港跡地遺跡編年 I -1～2 期に位置付けられ、混入資料の可能性が高い。

SB06 (第36図)

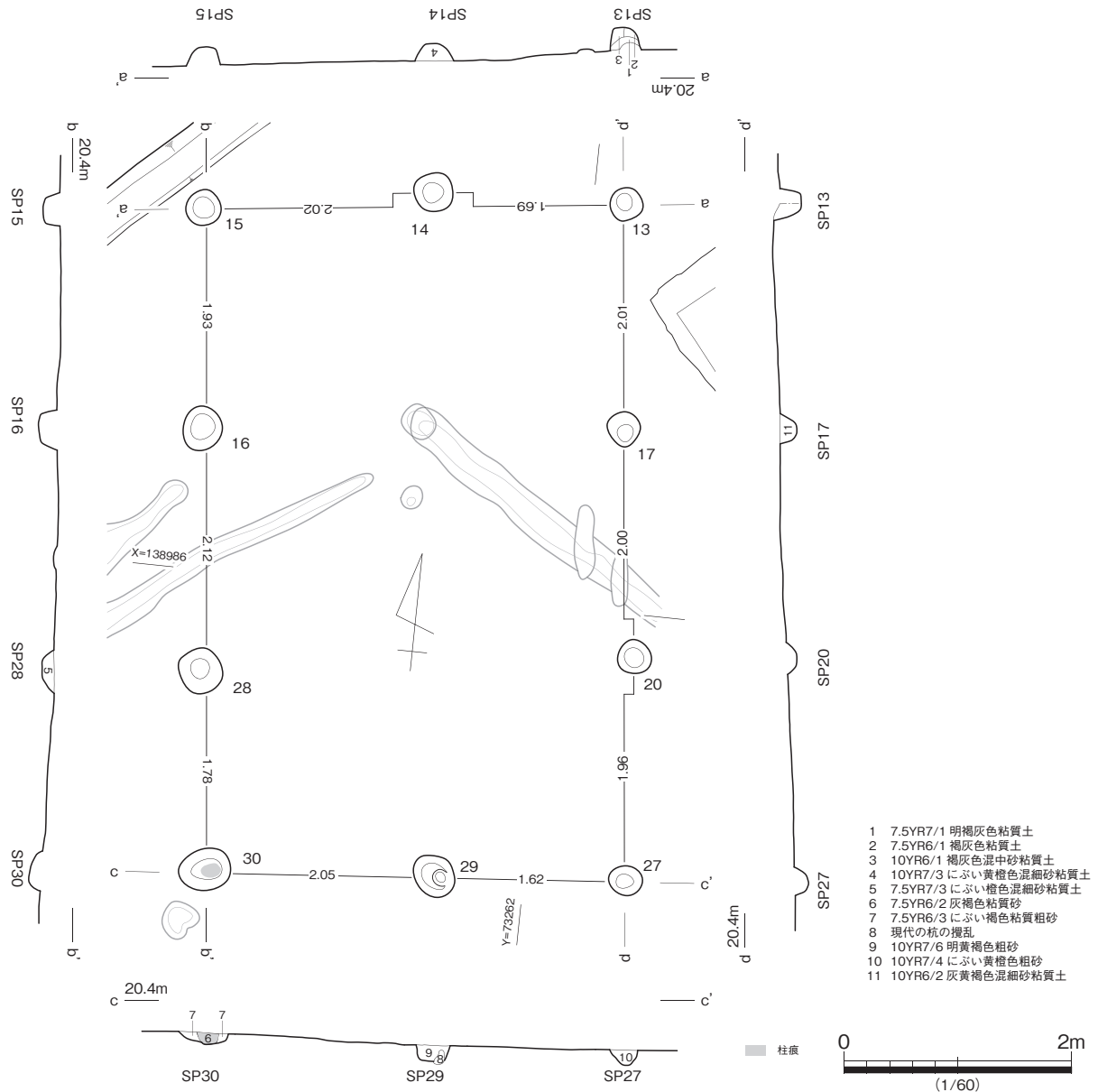
6区中央南半で検出した東西棟の掘立柱建物である。北西隅柱が調査区外となるが、概ね全形は確認



第32図 SB02 平・断面図

できた。また、桁行南列西より2穴目の柱穴を欠く。SD128と重複するが、柱穴と切り合い関係はなく先後関係は不明である。後述するSB07とはSP161が重複し、切り合い関係より先行する。桁行5間(10.75 m)、梁間2間(3.63 m)、床面積39.02㎡、N 6.72° Wに配された大型の側柱建物として復元する。さらに1間東に延びる可能性も考えられたが、北東隅柱が検出されていないため、図示した復元案を提示する。柱穴は、長径0.27～0.74 mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.09～0.30 mで、断面形はU字状ないし皿状を呈する。柱穴底面の標高は19.31～19.67 mと一定せず、柱通りもやや乱れが認められる。なお、柱穴底面はやや東に深く掘り込まれている傾向が認められるが、その要因については明らかにはできなかった。各柱穴で、明確な柱痕は確認されず、また詰石・根石などは検出していない。埋土は、主に褐灰色系粘質土が堆積していた。

遺物は、SP149より土師質土器や黒色土器碗等の小片5点、SP156より弥生土器や土師質土器皿等の小片5点、SP158より土師質土器皿等の小片5点、SP161より土師質土器皿・杯等の小片10点、SP163より土師質土器皿の小片2点、SP169より弥生土器や土師質土器皿等の小片11点、SP172より弥生土器や土師質土器皿等の小片6点、SP176より土師質土器皿や黒色土器碗、布目丸瓦等の小片10点、SP179より須恵器や土師質土器皿等の小片4点、SP181より土師質土器皿の小片2点、SP182より土師



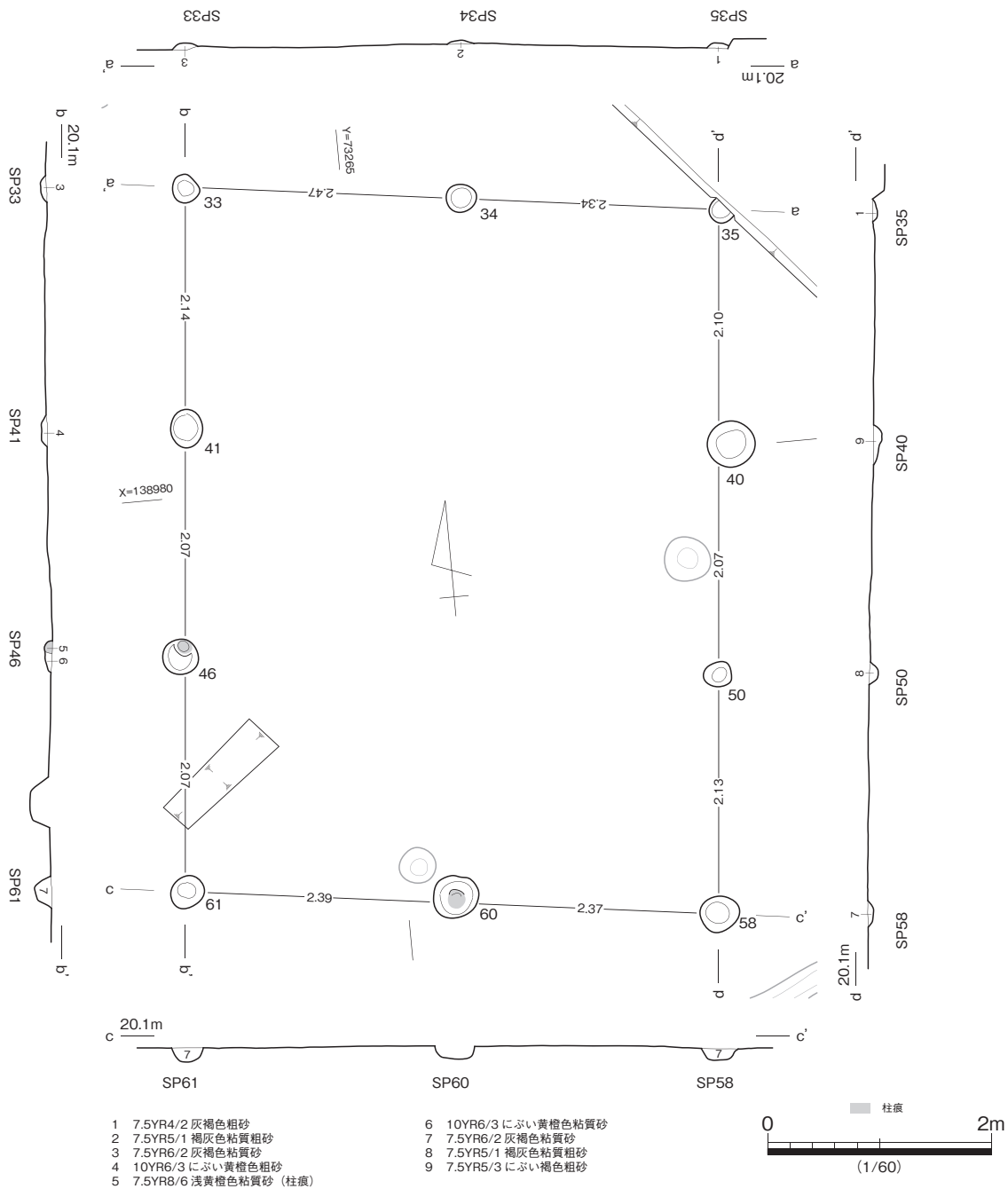
第33図 SB03平・断面図

質土器皿・杯等の小片14点がそれぞれ出土した。**84**はSP161より出土した土師質土器皿である。**85**はSP182より出土した同杯。空港跡地遺跡編年Ⅱ-1～2期か。**86**はSP179より出土した東播系須恵器捏鉢の小片。森田編年第Ⅷ期2段階前後に位置付けられる。**87**はSP179より出土した、鉄釘とみられる細い方柱状の鉄製品である。出土遺物より、12世紀末～13世紀前葉を前後する時期に位置付けられる。

SB07 (第37図)

6区南西部で検出した東西棟の掘立柱建物である。SD132、SD137と重複し、切り合い関係より、そのいずれよりも後出する。また上述したようにSB06より後出する。建物西半部は調査区外へ延長し、全形は不詳だが、後述する復元案のとおり報告する。桁行4間(8.38m)、梁間3間(6.08m)、床面積50.95㎡、主軸方向N 3.21°Wに配された大型の側柱建物として復元する。柱穴は、長径0.37～0.49mの平面略円ないし楕円形を呈し、残存深0.10～0.26mで、断面形はU字状ないし箱形を呈する。柱穴底

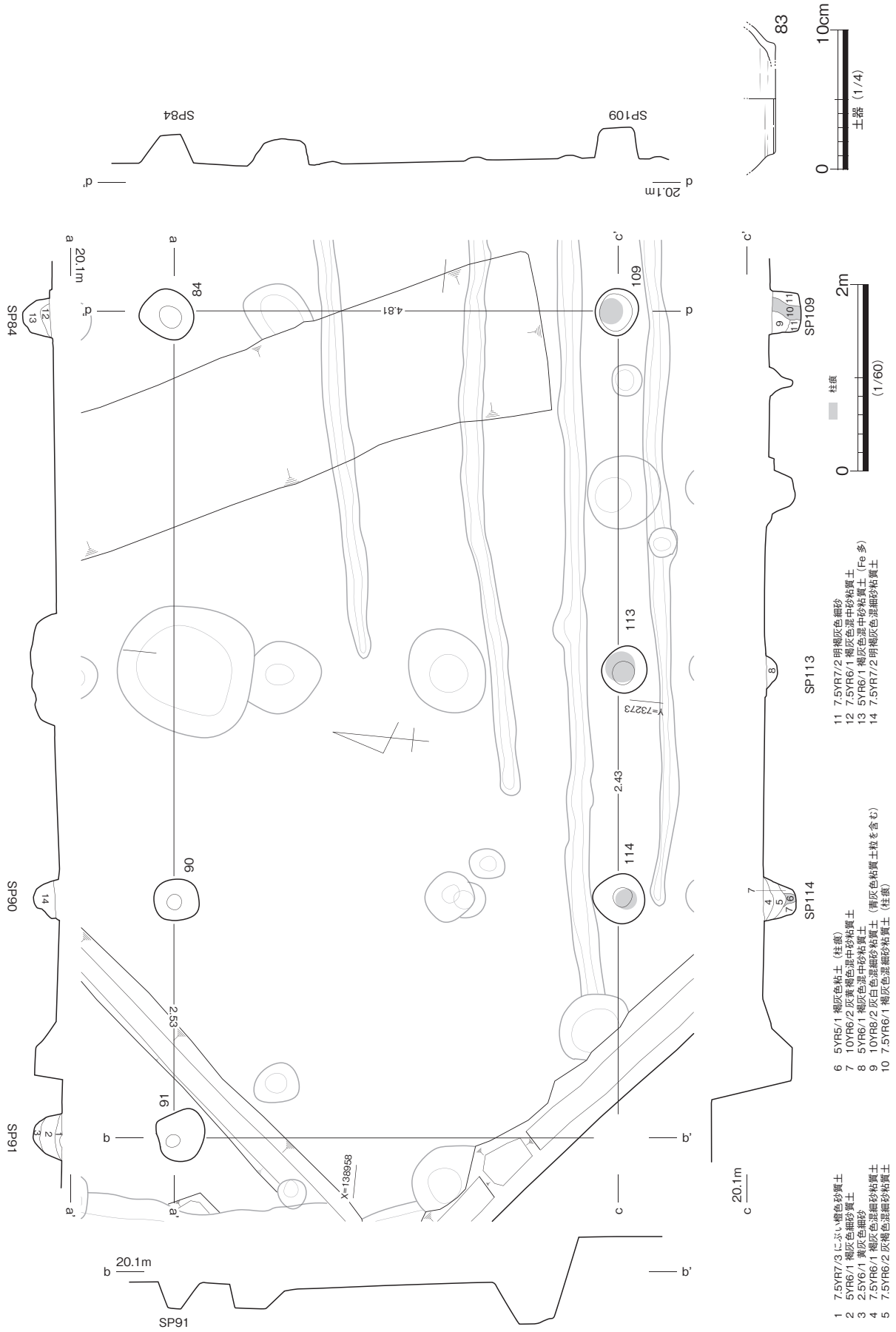


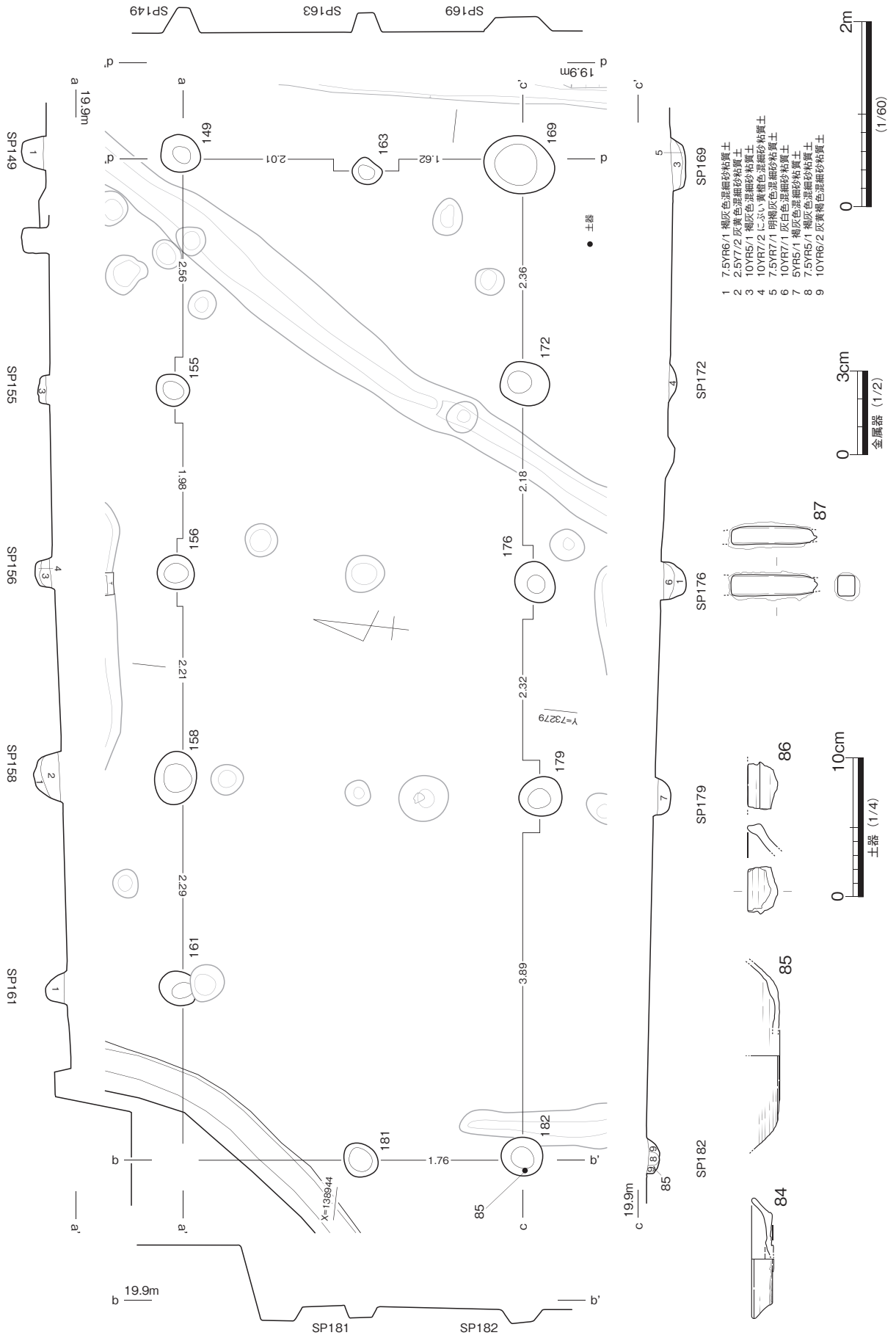


第 34 図 SB04 平・断面図

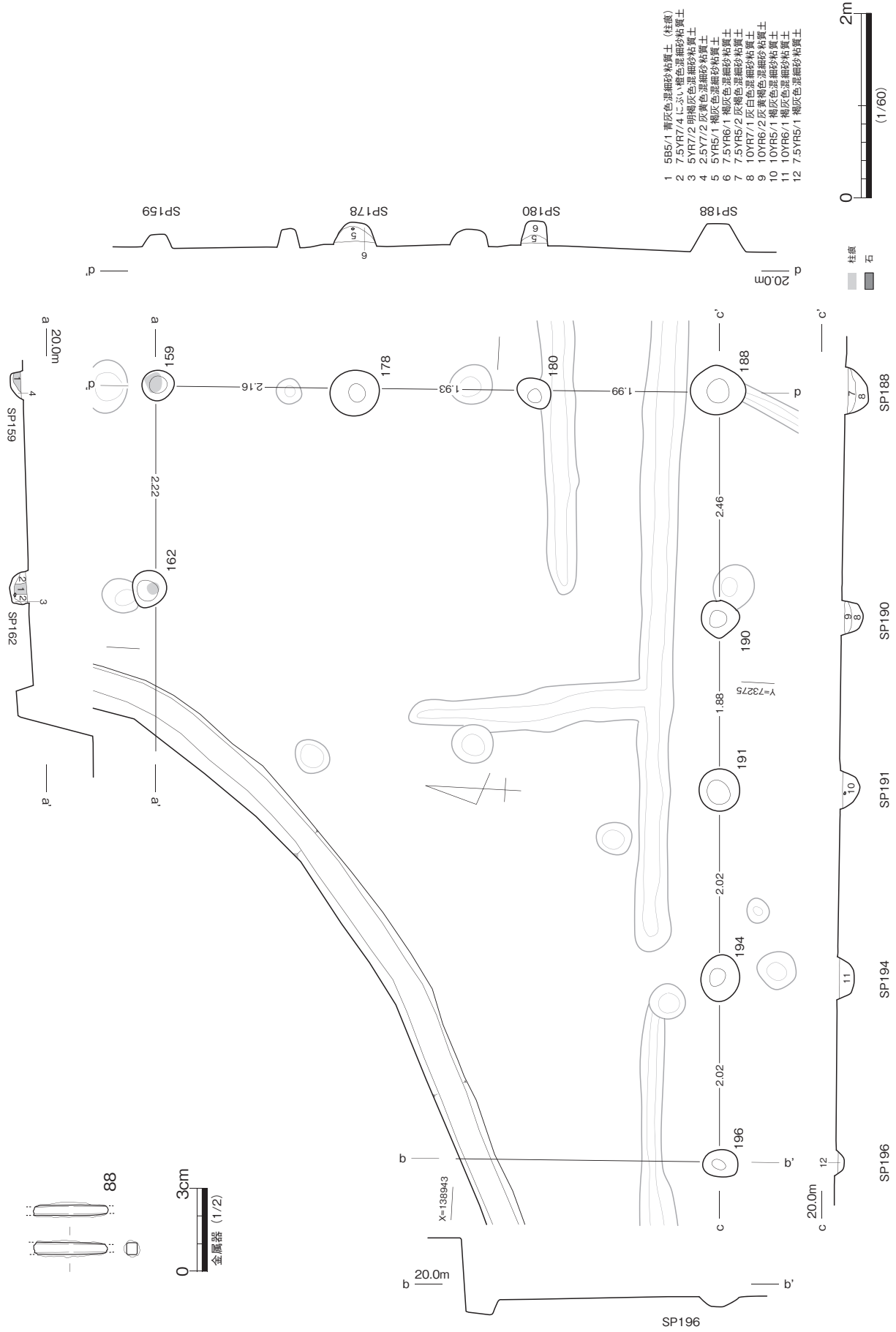
面の標高は 19.46 ~ 19.75 m と一定しないが、柱通りは概ね揃っていた。また、各柱穴底面は上述した SB06 同様に、東にやや深く掘り込まれていた。桁行北列の SP159 と SP162 で、径 0.15 ~ 0.20 m の柱痕を確認したのみで、それ以外の柱穴で柱痕は確認されず、また詰石・根石などは検出していない。埋土は、主に褐灰色粘質土が堆積していた。

遺物は、SP162 より土師質土器皿の小片 2 点と近世平瓦の小片 1 点、SP178 より土師質土器皿等の小片 7 点、SP180 より土師質土器皿等の小片 8 点と鉄滓 3 点、SP191 より弥生土器や土師質土器皿等の小片 4 点、SP194 より土師質土器皿等の小片 6 点、SP196 より土師質土器皿等の小片 5 点がそれぞれ出土した。88 は SP162 より出土した鉄釘である。出土遺物より時期を特定することは困難だが、上述した

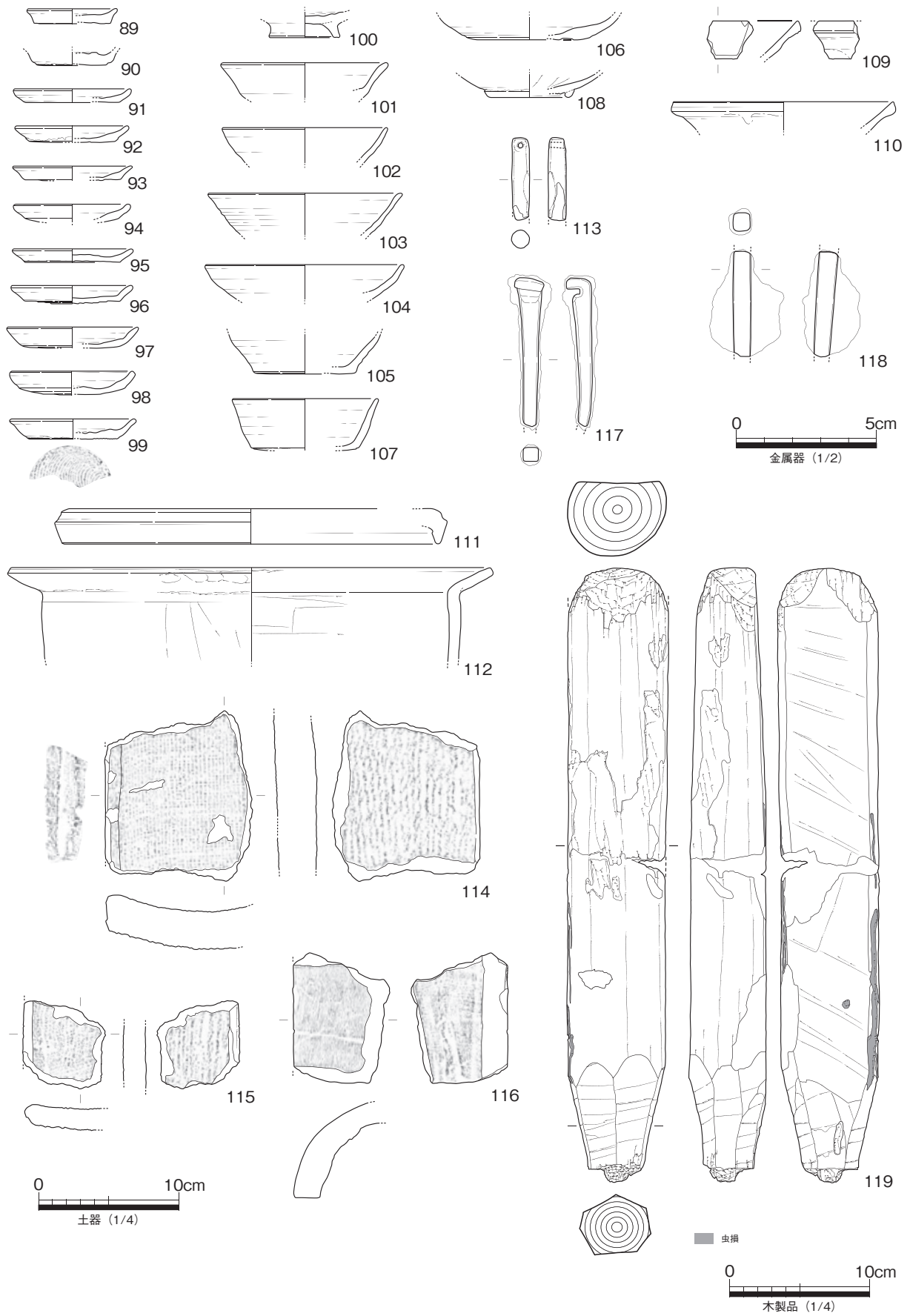




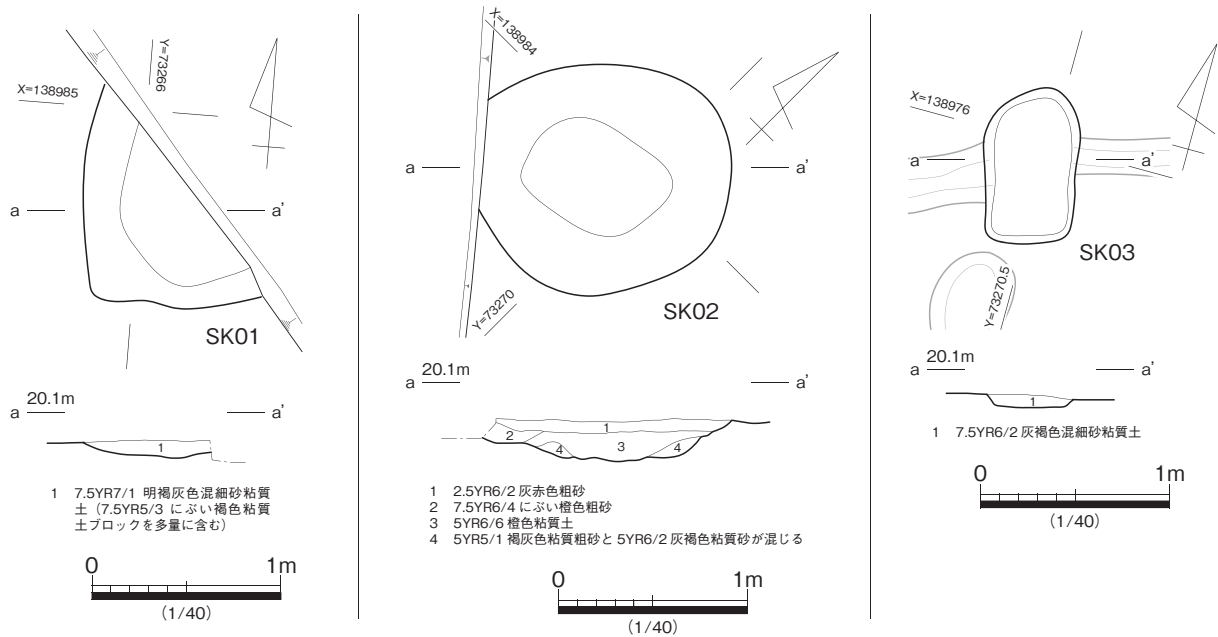
第36図 SB06 平・断面・出土遺物実測図



第37図 SB07 平・断面・出土遺物実測図



第38図 柱穴出土遺物実測図



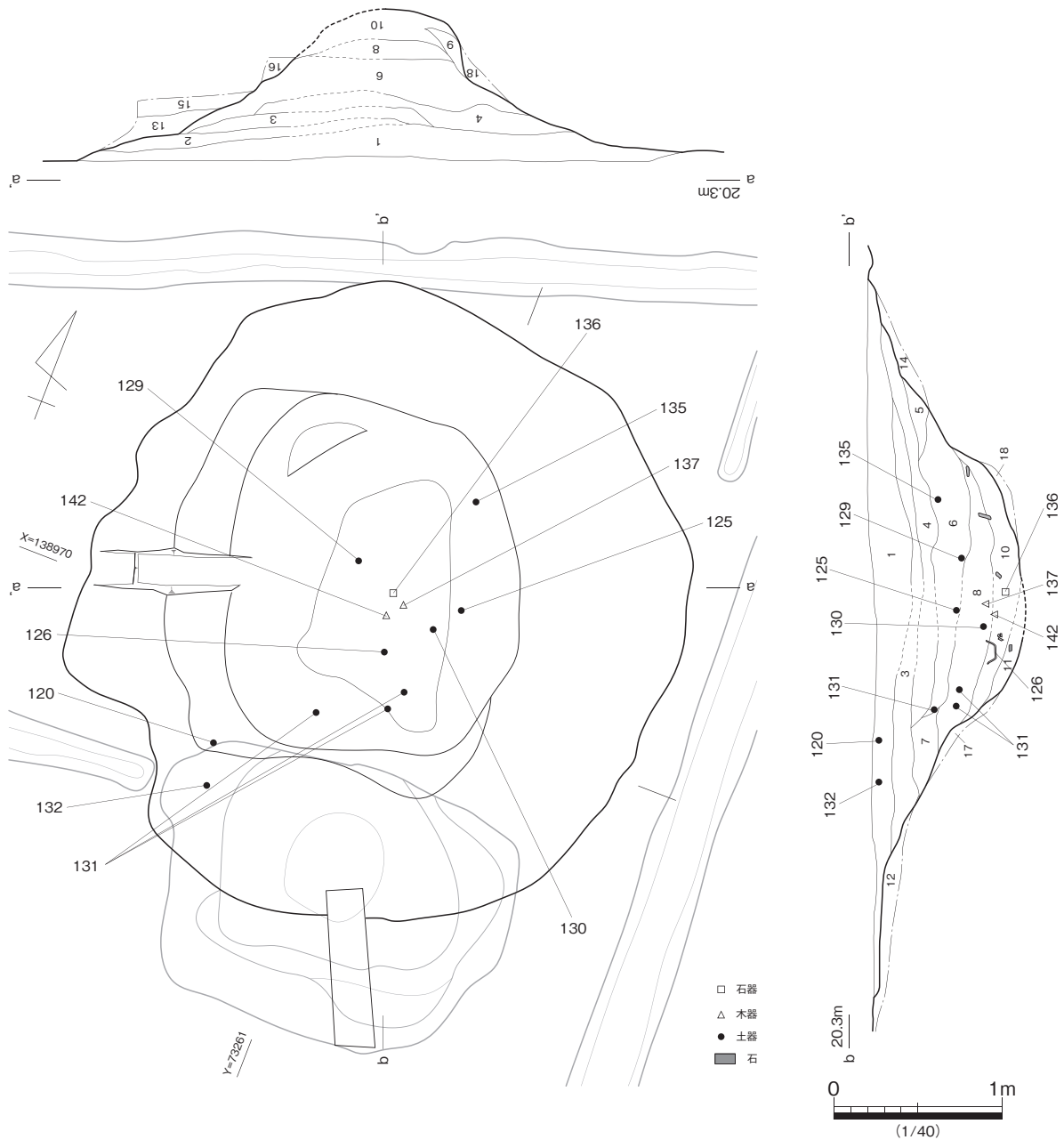
第 39 図 SK01 ~ SK03 平・断面図

ようにSB06より後出することから、13世紀前半代を中心とした時期に位置付けられると考える。

### 柱穴 (第 38 図)

第 38 図に掲載した遺物は、建物遺構を構成しない柱穴より出土した資料である。

89はSP76、90はSP105、91～93はSP203、94はSP206、95はSP213、96・99はSP200、97はSP205、98はSP204出土のそれぞれ土師質土器皿である。いずれも空港跡地遺跡編年Ⅰ-2～Ⅱ-2期。98の外面底部は、回転ヘラ切とみられるが、ヘラ切痕は後に丁寧にナデ消されている。90・99の底部は、回転糸切である。100は、高台径より同台付杯として図示した。小片のため他の器種となる可能性もある。101はSP197、102はSP94、103・106はSP201、104はSP62、105はSP115出土のそれぞれ同杯である。104も小片のため、別の器種となる可能性もある。106の底部外面は糸切とみられるが、ナデ調整により消されており不明である。107はSP92出土の須恵器杯。十瓶山編年Ⅱ-4～5期に位置付けられ、混入資料の可能性が高い。108はSP116出土の十瓶山周辺窯産の須恵器碗。空港跡地遺跡編年Ⅱ-1～2期。109はSP152、110はSP140出土のそれぞれ中国製白磁Ⅳ-1類碗の小片である。異なる遺構より出土したが、釉調などが酷似しており、同一個体の可能性もある。111は瓦質土器火鉢の蓋として図示したが、小片のため器種を断定できない。112はSP203出土の土師質土器鍋の小片。空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～5期。113はSP85出土の棒状土錘である。114はSP206、115はSP218出土のそれぞれ須恵質焼成の布目平瓦の小片である。114の側面には布目痕を認める。116はSP205出土の布目丸瓦の小片である。117は、SP68出土の頭部を折り返した角釘で、先端部のみ折損する。118は、SP168出土の各柱状を呈する鉄器小片で、鉄釘として図示した。下半部に鉄塊状の付着物を認めるが、性格は明らかにできなかった。119は、SP99出土の径約7.2cmのマツ属複雑管束亜属の芯持材で、柱穴中央部より立位で出土したことから、建物柱材か柵列の杭材として使用されたと考えられる。下端は、7方向から削られるものの、先端7cm程は切断されている。図右面は、幅5.8cm程が平坦に加工され、斜交する刃痕を認める。それ以外は加工を認めず、一部樹皮を残す。上端は、腐食により断定は困難だが、転用のため切断された可能



- |                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| 1 10YR6/2 灰黄褐色混細砂質土 (最上層)             | 10 5BG4/1 暗青灰色粘土 (板片混じる、最下層)                        |
| 2 10YR7/8 黄橙色混細砂質土 (上層)               | 11 5B5/1 青灰色混中砂粘土 (最下層)                             |
| 3 2.5YR6/2 灰赤色混細砂質土 (上層)              | 12 5YR4/1 褐灰色粘土と 10YR7/3 にぶい黄橙色混中砂土のブロック土 (SK05 埋土) |
| 4 7.5YR7/1 明褐灰色混細砂質土 (上層)             | 13 10YR7/6 明黄褐色中～粗砂 (ベース SR01 埋土)                   |
| 5 7.5YR7/2 明褐灰色混細砂質土 (中層)             | 14 7.5YR7/6 橙色混細砂質土 (ベース SR01 埋土)                   |
| 6 2.5GY6/1 オリーブ灰色混細砂質土 (黄褐色ラミナを含む、中層) | 15 2.5GY3/1 暗オリーブ灰色粘土 (ベース SR01 埋土)                 |
| 7 2.5GY7/1 明オリーブ灰色混細砂質土 (中層)          | 16 2.5YR3/1 暗赤灰色粘土 (強粘質、ベース SR01 埋土)                |
| 8 2.5GY6/1 オリーブ灰色粘質土 (5層より強粘質、下層)     | 17 7.5YR6/2 灰褐色中砂 (ベース SR01 埋土)                     |
| 9 5BG6/1 青灰色細～中砂 (最下層)                | 18 5YR7/2 明褐灰色細～中砂 (ベース SR01 埋土)                    |

第40図 SK04 平・断面図

性が高い。

各柱穴より出土した遺物は、若干の混入とみられる資料を除いて、上述した建物出土資料との間に大きな時間的隔たりを認めない。

### 土坑

#### SK01 (第39図)

5区北東部第2面で検出した土坑である。東半部は試掘トレンチにより攪乱を被り、西半部のみ検出

した。平面形は、東西 0.77 m 以上、南北 1.18 m 以上のやや歪な隅丸形状を呈するとみられる。残存深は 0.09 m と浅く、断面形は皿状を呈する。埋土は、褐色系粘質土の単層で、ブロック土を多量に含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片 2 点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難であるが、出土遺物や周辺遺構との関係などより、当該期の遺構として報告する。

#### SK02 (第 39 図)

5 区北東部第 2 面で検出した土坑である。西端部は試掘トレンチにより攪乱を被るが、およその全形は判断される。平面形は、東西 1.31 m 以上、南北 1.21 m のやや歪な隅丸長形状を呈する。残存深は 0.22 m で、断面形は逆台形状を呈する。埋土は 4 層に細分され、灰色ないし橙色系粗砂ないし粘質土が堆積する。3 層は、4 層を掘り込むように堆積しており、4 層堆積後に改修等がなされた可能性が想定される。

遺物は、ベース自然河川からの混入とみられる、器種不詳の弥生土器小片 3 点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、遺構検出面や周辺遺構との関係などより、当該期の遺構の可能性を想定する。

#### SK03 (第 39 図)

5 区中央部第 2 面で検出した土坑で、SD038 と重複し、切り合い関係より後出する。平面形は、東西 0.46 m、南北 0.79 m のやや歪な隅丸形状を呈する。残存深は 0.07 m と浅く、断面形は底面が平坦な箱形を呈し、埋土は灰褐色粘質土の単層であった。

遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片 5 点が出土したのみである。出土遺物より時期を特定することは困難だが、当該期の遺構として報告する。

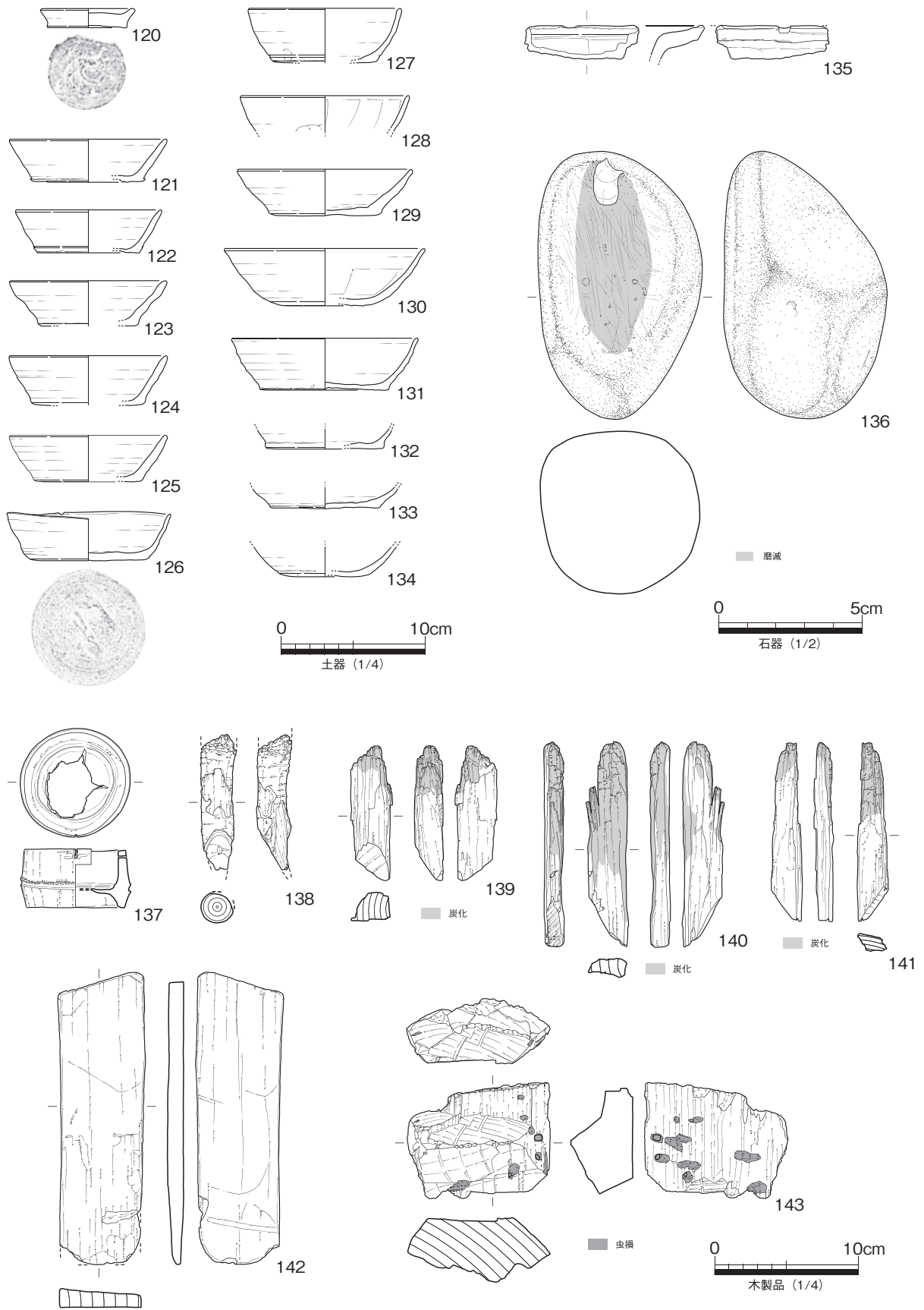
#### SK04 (第 40・41 図)

5 区西部 2 面で検出した大型土坑で、後述する SK05 や SD038 と重複し、切り合い関係よりいずれよりも後出する。平面形は、東西 3.66 m、南北 3.78 m の歪な楕円形状を呈する。残存深は 0.90 m と深く、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は 11 層に細分され、最上～最下層の 5 層に大別する。最上～上層は、灰色ないしは橙色系粘質土で遺構廃絶後の自然堆積層と考えられる。中層は、オリーブ系粘質土を主体とする滞水下堆積層で、本層も遺構廃絶後の堆積層と考える。下～最下層はグライ化した灰色系粘土層を主体とする滞水下堆積層で、遺構機能時の堆積層であろう。多量の木質遺物が出土した。遺構底面はベース SR01 埋土中の透水層に達しており、水溜などの機能が想定される。

遺物は、弥生土器鉢、須恵器杯、黒色土器 B 類碗、土師質土器皿・杯・鍋、瓦器皿、土師質焼成の布目平瓦等の破片約 150 点のほか、加工木や自然木、炭化材、種実等の植物遺存資料がコンテナ 1 箱程度出土した。120・132 は最上層、125・129・131・135 が中層、121・123・126・130・133・136～143 が下～最下層出土の遺物である。

120 は土師質土器皿である。完形に近いが、やや磨滅を顕著に認める。121～133 は同杯である。128・130 は内外面に炭化物が付着する。134 は瓦質土器杯として図示した。本地域では類例に乏しい。135 は土師質土器鍋の口縁部小片。空港跡地遺跡編年Ⅱ 4～5 期。136 は、安山岩の垂円礫を使用した磨石である。広端面 1 面のみを使用し、強く磨滅する。





第41図 SK04出土遺物実測図

137は、竹製の節の部分で底部とした外径7.1cm、高さ4.1cmの円筒形容器である。上端より約5mmの位置に、径2.5mmの小円孔を相対して2孔穿つ。138は、径2.5cm程の芯持のマツ属複維管束亜属の枝材を用いた木杭。下端を1方向より削り、レ字状に尖らせる。上端は折損し全形は不明。樹皮がよく残る。139～141は、いずれもマツ属複維管束亜属の板状の加工木(端材)で、下端を斜めに削る。上半部は被熱により、強く炭化する。142は、ツブラジイの用途不明の板材で、図下端部を一部折損する。表面はやや腐食が進み、加工痕などは不明瞭である。143は、図左面を中心に多数の手斧による加工痕を認める用途不明のマツ属複維管束亜属の加工木。安定した形状を呈さないことから、端材とみられる。また、径3～6mmの虫食い痕を多数認める。

128・129など一部に13世紀前葉を前後する時期の資料も出土しているが、120～127・133等の資料より13世紀中葉を前後する時期に開削・埋没した可能性を想定する。

#### SK05 (第42図)

5区西部2面で検出した土坑である。上述したように、北半部をSK04に削奪されているため、全形は不詳である。平面形は、東西2.06m、南北1.72m以上のやや歪な隅丸長形状を呈する。残存深0.54mで、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は5層に細分され、上下2層に大別する。上層は、ブロック土を含む褐色系粗砂を主体とする埋土で、SK04開削に伴い人為的に埋め戻された可能性が考えられる。下層は、遺構機能時の堆積層と考えられ、黒色粘土を主体とする滞水下堆積層である。

遺物は、弥生土器甕のほか器種不詳の土師質土器等の小片約20点が出土した。図化可能な資料は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、SK04より先行することから、13世紀前半代の可能性を想定する。

#### SK06 (第42図)

5区南西隅第2面で検出した土坑である。東西1.19m、南北2.53m、主軸方向N2.12°Wとほぼ正方位に配され、平面形は南西隅がやや張り出した隅丸長形状を呈する。残存深は0.20mで、断面形は概ね箱形を呈する。埋土は2層に細分され、灰褐色系粘～砂質土が堆積していた。

遺物は、弥生土器甕や器種不詳の土師質土器小片が10点程度出土したのみである。図化可能な資料は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、遺構検出面や出土遺物より当該期の遺構として報告する。

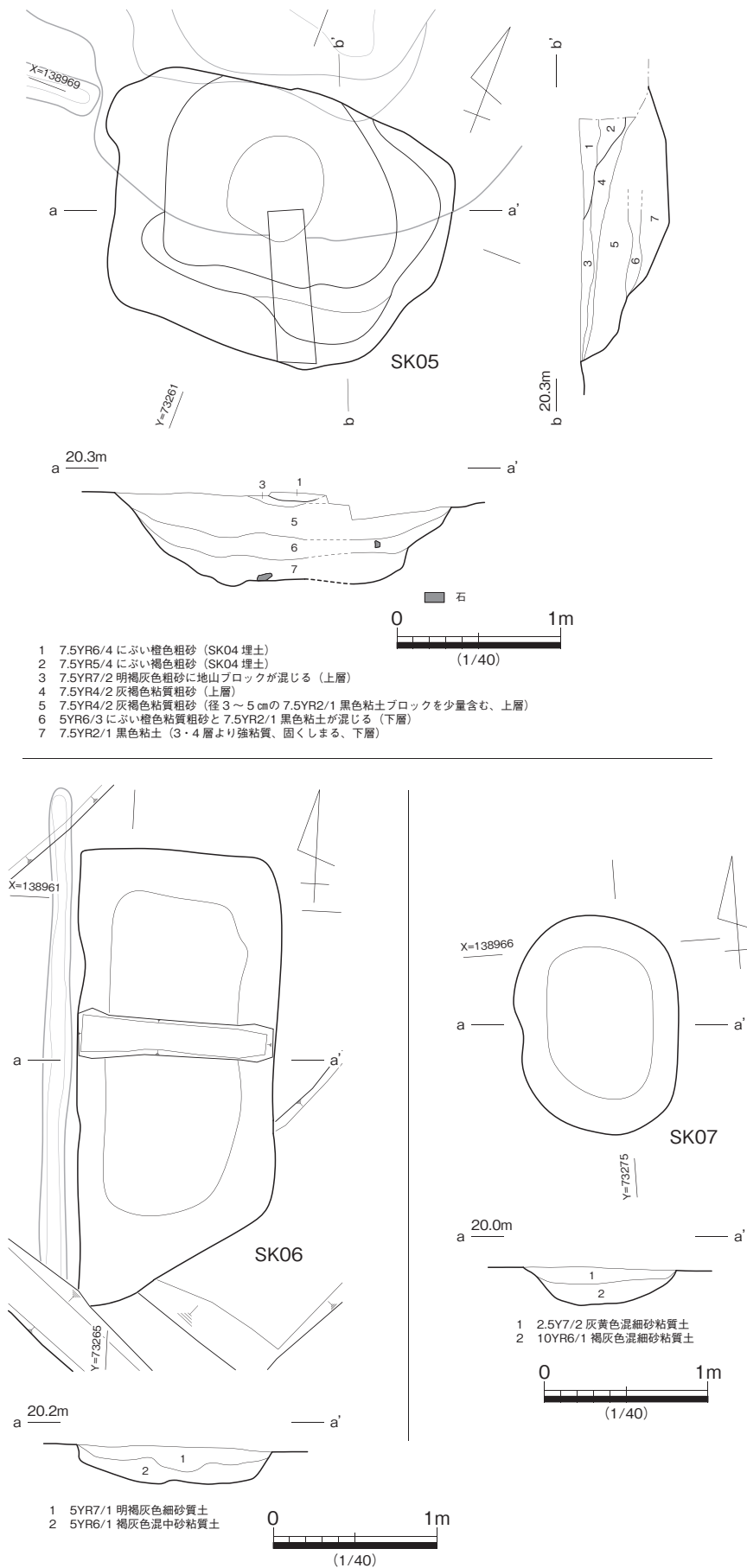
#### SK07 (第42図)

6区中央北端で検出した土坑である。東西1.00m、南北1.34m、主軸方向N2.25°Eとほぼ正方位に配され、平面形はやや歪な隅丸長形状を呈する。残存深0.24mで、断面形は浅くU字状を呈する。埋土は2層に細分され、灰色系粘質土が水平堆積していた。

遺物は、弥生土器甕や土師質土器皿等の小片6点が出土したのみである。図化可能な資料は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、出土遺物や周辺遺構の内容より当該期の遺構として報告する。

SK08 (第43～46図)

7区北部で検出した土坑で、東端部は調査区外へ延長する。東西2.37m以上、南北3.38mを測り、平面形は長楕円形状を呈する。残存深は1.68mと深く、底面は平坦で、断面形は整った箱形を呈する。埋土は22層に細分され、最上～最下層の5層に大別する。最上～上層は、主に灰色系細砂～粘質土～粘土がレンズ状に堆積し、遺構廃棄後の自然堆積層とみられる。また、上～最下層の掘り方周縁部を中心に、壁面の崩落に起因するとみられるベース層ブロック土の混入がみられる。中層は、後述する下層を上面から掘り込むように堆積し、下層堆積後に改修などがなされた可能性が考えられる。下層は灰色系の粘質土を主体とする堆積層で、最下層堆積後の自然堆積層であろう。最下層底面には、灰色細～中砂が薄く堆積し、土坑開削後滞水状況下にあった可能性が考えられる。下～最下層を中心に多量の木質遺物が出土した。遺構底面はベースSR01埋土中の透水層に達しており、水溜など

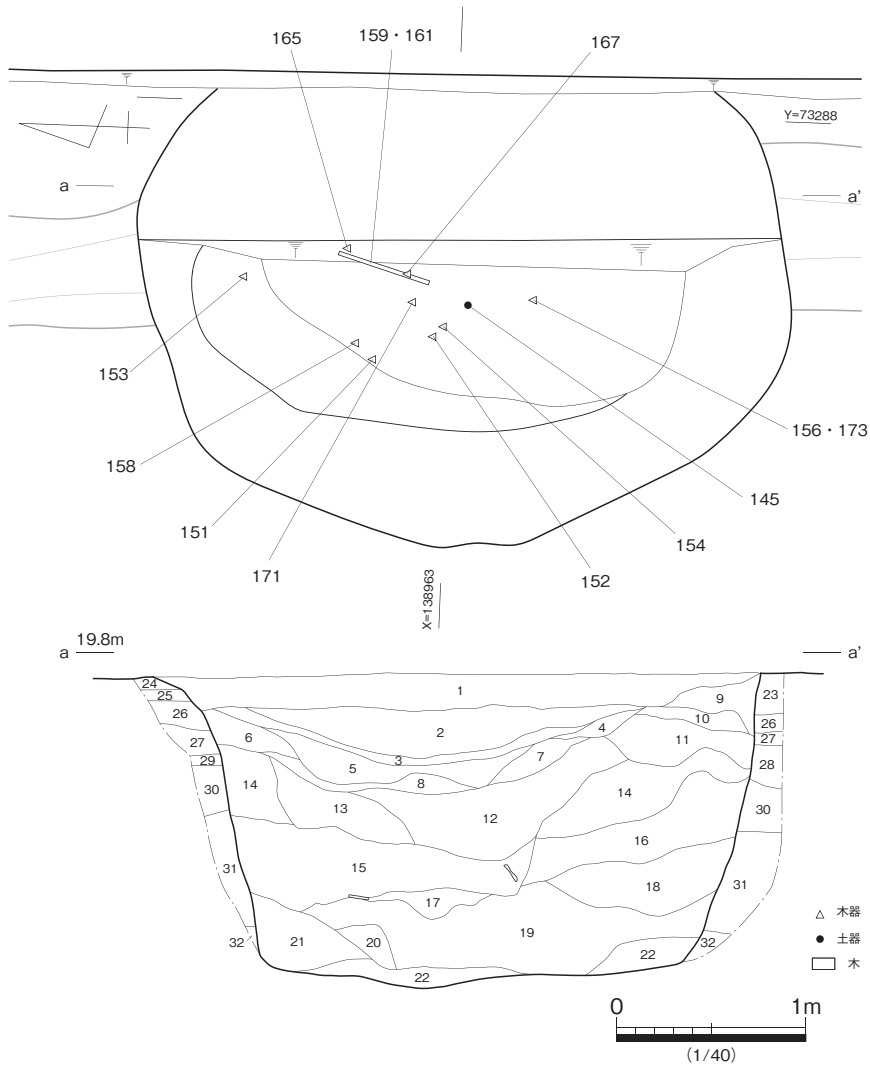


第42図 SK05～SK07 平・断面図

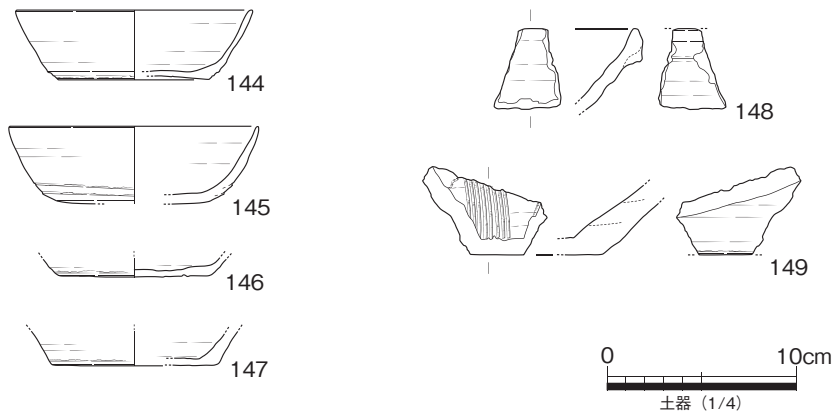
の機能が想定される。

遺物は、須恵器、土師質土器、皿・杯・鍋AⅡ類、瓦質土器、東播系須恵器捏鉢、備前焼播鉢、土師質と須恵質焼成の布目平瓦等の小片約40点のほか、板材等の木製品や自然木、木葉片、種実等の木製遺物がコンテナ7箱程度出土した。147が最上層、150・164が上層、144・145・148・154・155・160・163・167～170・172が下～最下層出土のそれぞれ遺物で、その他は出土層位不明だが、木製品は大半が下層出土とみられる。

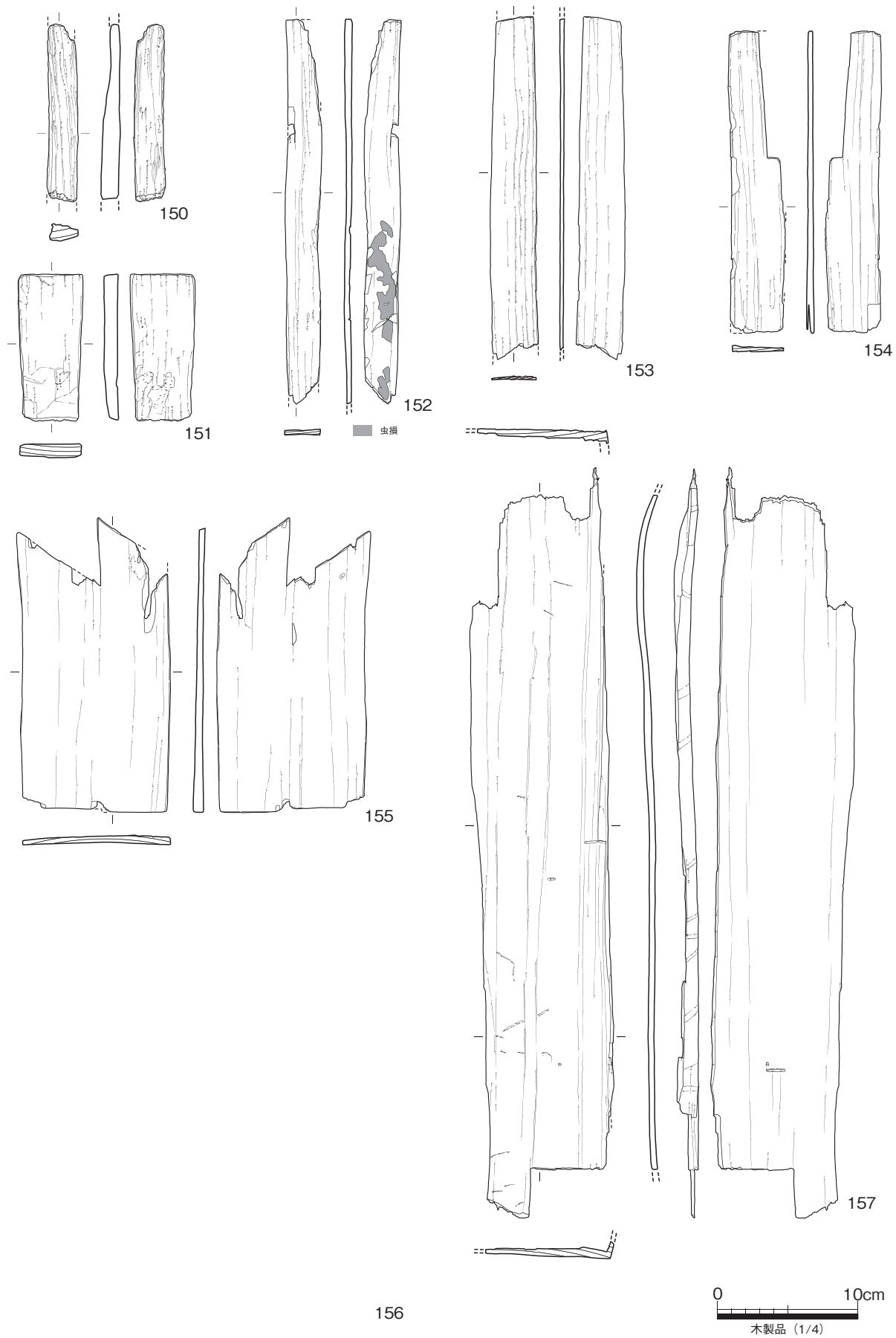
144～147は土師質土器杯。空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～4期。145の底部は回転ヘラ切とみられるが、へ



- |                                      |   |
|--------------------------------------|---|
| 1 10YR7/3 にぶい黄褐色混細砂粘質土 (最上層)         | 17 5GY4/1 暗オリーブ灰色混細砂粘質土 (下層)              |
| 2 5YR7/1 明褐色混細砂粘質土 (最上層)             | 18 5BG4/1 暗青灰色混細砂粘質土 (青灰色小ブロック土を多量に含む、下層) |
| 3 7.5YR5/1 褐色混細砂粘質土 (最上層)            | 19 10G5/1 緑灰色混細砂粘質土 (最下層)                 |
| 4 10YR8/1 灰白色細砂 (最上層)                | 20 N6/ 灰色混細砂粘質土 (最下層)                     |
| 5 2.5Y7/1 灰白色細砂 (最上層)                | 21 5G4/1 暗緑灰色混細砂粘質土 (青灰色小ブロック土を多量に含む、最下層) |
| 6 10YR6/2 灰黄褐色混細砂粘質土 (最上層)           | 22 5GY6/1 オリーブ灰色細～中砂 (最下層)                |
| 7 N6/ 灰色混中砂粘質土 (最上層)                 | 23 7.5YR5/1 褐色混細砂粘質土 (ベース SR01 埋土)        |
| 8 N6/ 灰色混細砂粘質土 (最上層)                 | 24 7.5YR7/2 明褐色混細砂粘質土 (ベース SR01 埋土)       |
| 9 10YR6/2 灰黄褐色混細砂粘質土 (最上層)           | 25 5YR7/1 明褐色シルト (ベース SR01 埋土)            |
| 10 10YR7/3 にぶい黄褐色混細砂粘質土 (最上層)        | 26 10YR7/4 にぶい黄褐色中砂 (ベース SR01 埋土)         |
| 11 7.5YR6/1 褐色混細砂粘質土 (最上層)           | 27 10YR7/2 にぶい黄褐色シルト (ベース SR01 埋土)        |
| 12 N4/ 灰色混細砂粘質土 (青灰色小ブロック土少量含む、上層)   | 28 7.5YR5/1 褐色混細砂粘質土 (ベース SR01 埋土)        |
| 13 N4/ 灰色混細砂粘質土 (上層)                 | 29 10YR4/1 褐色混細砂粘質土 (ベース SR01 埋土)         |
| 14 N5/ 灰色混細砂粘質土 (青灰色小ブロック土を多量に含む、上層) | 30 10YR 黒褐色混細砂粘土 (ベース SR01 埋土)            |
| 15 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色混細砂粘質土 (中層)       | 31 5BG6/1 青灰色混細砂粘質土 (ベース SR01 埋土)         |
| 16 N6/ 灰色混細砂粘質土 (シルト質、下層)            | 32 5G5/1 緑灰色中～粗砂 (ベース SR01 埋土)            |



第43図 SK08 平・断面・出土遺物実測図1



第44図 SK08 出土遺物実測図2

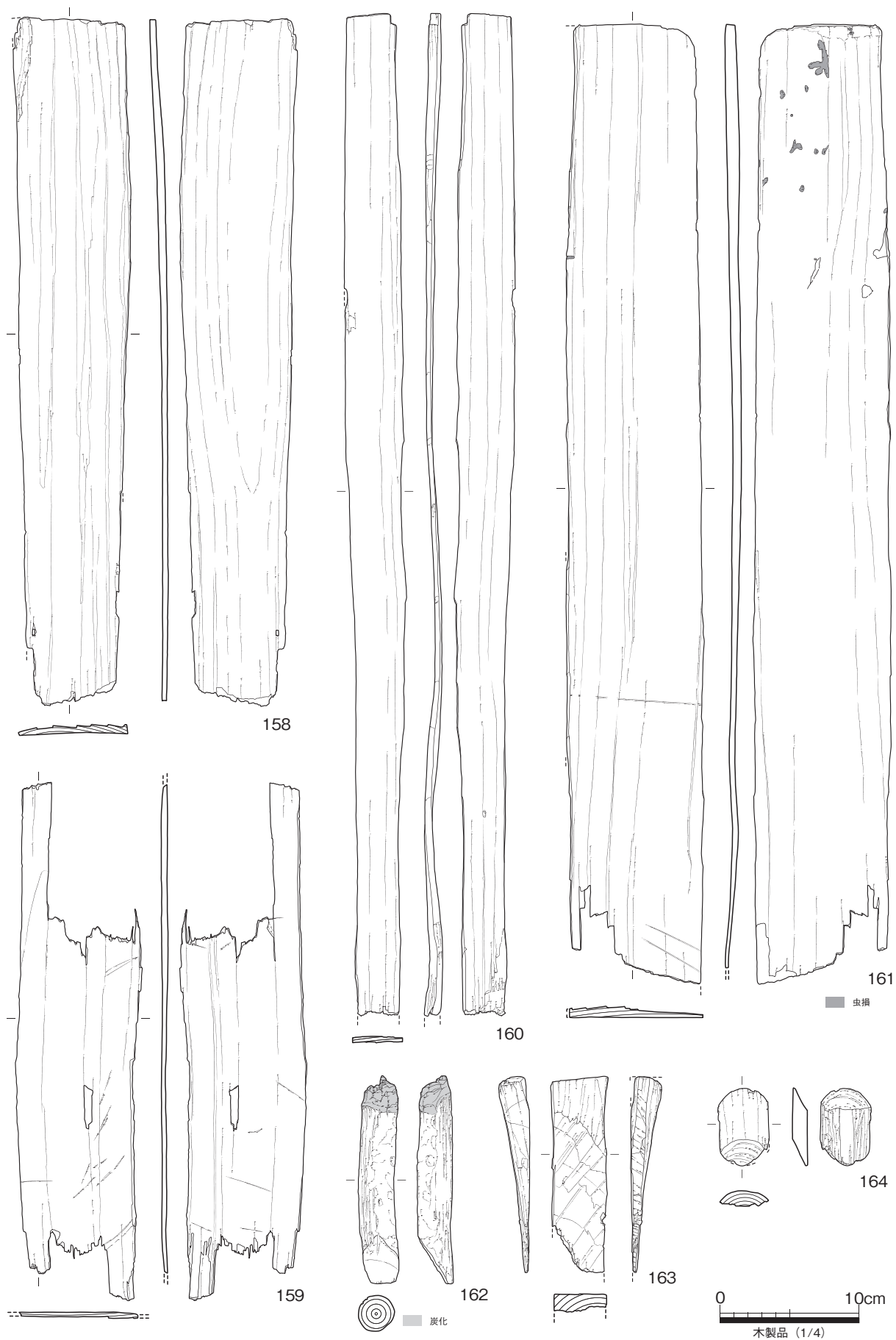
ラ切痕は丁寧にナデ消されている。**148**は東播系須恵器捏鉢の小片。森田編年第九期1段階前後。**149**は備前焼播鉢の底部片である。内面に8条/単位の卸目が施され、使用による磨滅が顕著に認められる。小片のため詳細な時期は不詳だが、乗岡編年中世2期前半の可能性はある。

**150**は、マツ属複維管束亜属を用いた断面三角形を呈する棒状の材である。**151**～**161**・**165**・**166**は、いずれも用途不明の厚さ0.3～1.0cm程度の薄い板材で、樹種はモミ属(**152**～**154**・**157**～**161**)を中心に、ツブラジイ(**151**)やツガ属(**155**・**156**・**165**・**166**)が利用される。後述するマツ属複維管束亜属の木杭等を含め、樹種が限定されることから、同一の材から切り分けた可能性も考えられる。**151**は長さ10.4cm、幅4.6cmの小型品。大型品の**165**と**166**は、幅は10.7cmで共通するが、長さは5cm程相違する等、板材の規格は一定しない。**151**は、平面形は僅かに台形状を呈し、図下端部が6mm程狭い。**152**の図右面には、虫食い痕を認める。**153**は、乾燥により硬化している。**155**は、中央部で縦に2片に半折して出土したものを、接合・復元して図示した。上部が山形に加工された端材とみられる。**156**も、同様に中央部で折損したものを、接合・復元して図示した。下端部が不整な山形に加工された端材とみられる。**157**の断面形はL字状を呈し、本来は箱状を呈した可能性もあるが、大きく破損しており不明。また、立ち上がり部は、部位により形状が異なり、未製品の可能性もある。立ち上がり部外面には、ヤリガンナとみられる加工痕を認める。**158**の下端部付近に、長さ約5mm、幅約2mmの小方孔を認めるが、人為的に穿たれたものかは断定できない。**159**は、周囲を折損するため全体形状は不明である。**160**の右図左側面には、鉋で削ったような加工痕を認める。**161**は、右図上端左隅部は丸く仕上げられており、大形の桶等の底板の可能性も考えられる。また、右図上端付近に虫食痕を認める。**165**の図右面には、材方向に斜交する刃痕を認める。

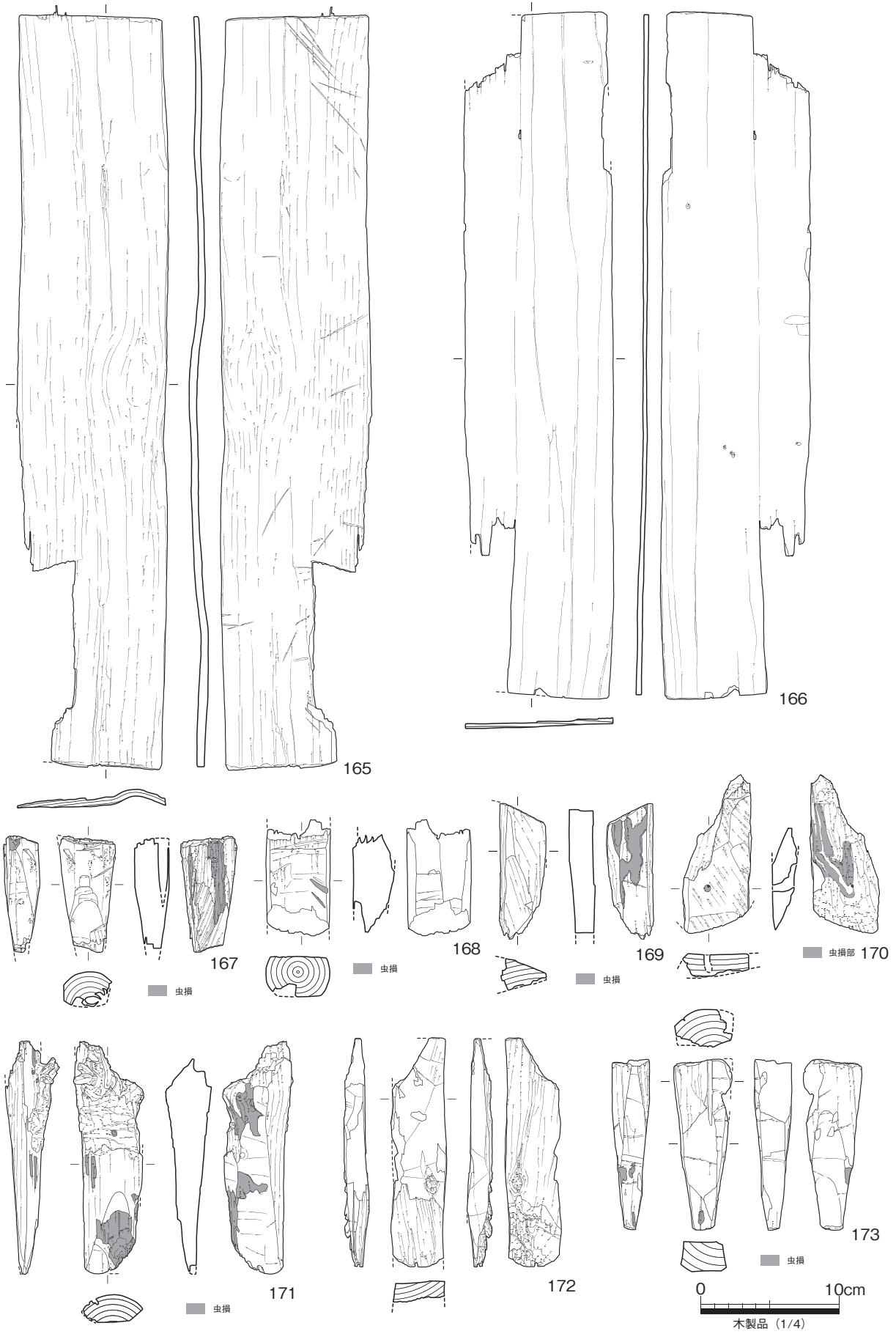
**162**～**164**・**167**～**173**は、いずれもマツ属複維管束亜属を用いる。**162**は、径2.5cm前後の枝材を用いた木杭で、下端部は削りレ字状に尖る。上端は被熱により強く炭化する。**163**は板材とみられる。背面と図下端部が折損するため、本来の形状は不明である。残存部の表面には、加工痕が明瞭に残る。**164**は端材で、図左面が樹皮側となる。**167**は用途不明の木製品で、楔状を呈する。左面下半部と両側面と裏面は平滑に削られ、横断面は不整台形状を呈する。図左面の右側面から裏面にかけて、大きく虫損を認める。**168**は、上下端等を大きく欠損し、用途を特定できない加工木である。径約4.5cmの芯持材を用いる。表裏面は平坦面をなし、両側は加工がなされず樹皮が一部残る。また、図左面上端には浅い剝り込みを施す。本資料も一部に虫損を認める。**169**は、横断面三角形を呈する用途不明の木製品。図右面は大きく虫食い痕を認める。**170**は、用途不明の加工木片。左図上面は丁寧に平滑に削られ、下端は弧状を呈してレ字状に尖る。下半部には虫食いによる径4mm程の円孔と、溝状の食害が顕著に認められる。**171**も用途不明の木製品。図左面(表面)上半部は樹皮を残し、下半部は削り尖らせる。図右面(裏面)と両側縁は削り、中央部の横断面は概ね逆台形状を呈する。本資料も、表裏面を中心に、虫食い痕を多く認める。**172**も用途不明の板材で、**163**と同一個体の可能性もあるが、幅が異なり接合しないため別個体として図示した。図右面は、明瞭な加工痕が認められず表面は剥離しているとみられる。図左面には一部に虫損を認める。**173**は、横断面矩形に加工された楔状の木製品である。右端図上半部に、樹皮を剥いだのみの未加工部を残す。また、下端部には多くの虫食い痕を認める。

#### SK09(第47図)

6区北西部で検出した土坑である。SB05、SK10と重複し、切り合い関係より後出する。平面形は、

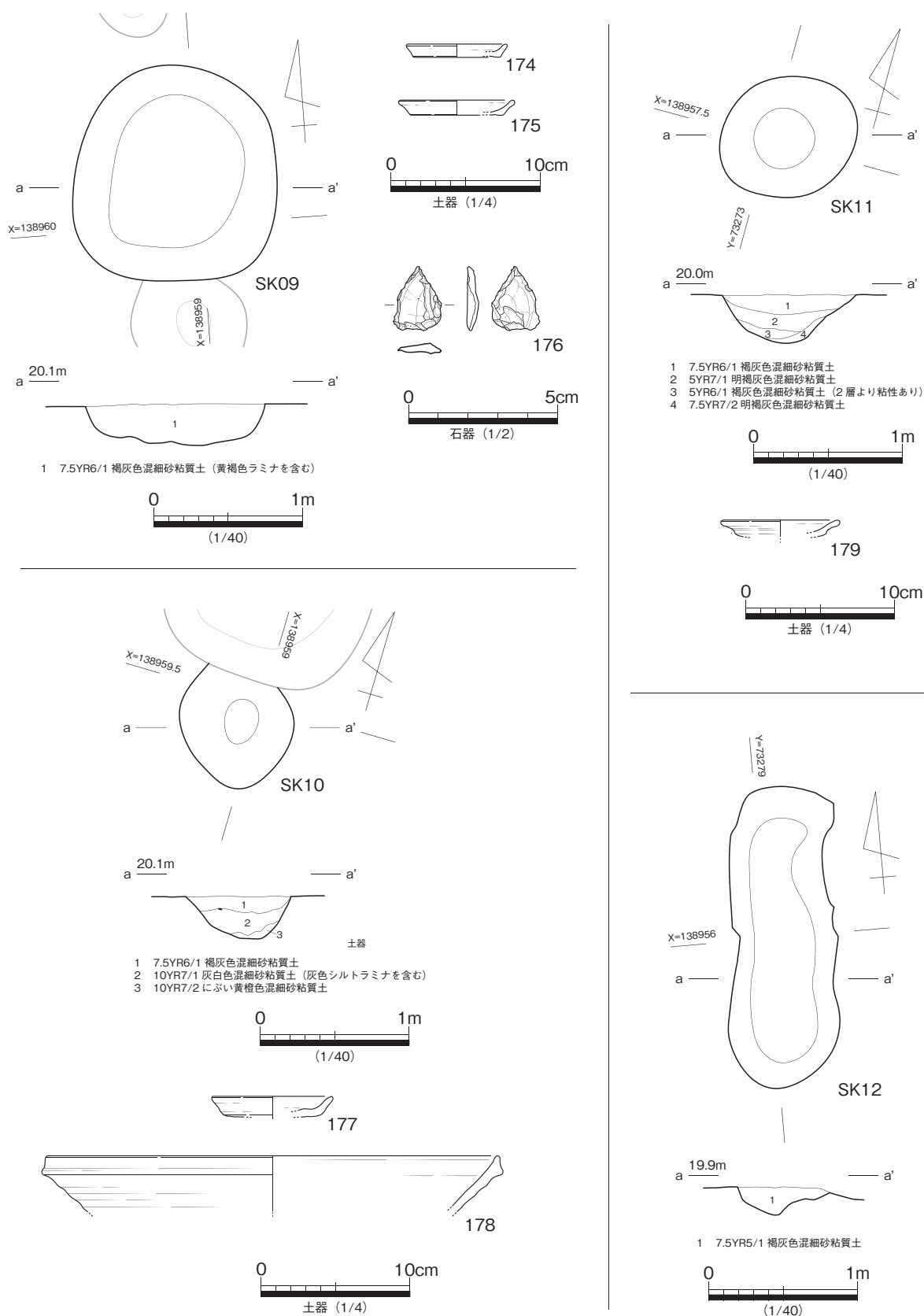


第45図 SK08 出土遺物実測図3



第46図 SK08出土遺物実測図4





第47図 SK09～SK12 平・断面・出土遺物実測図

東西 1.33 m、南北 1.42 mの隅丸長方形状を呈する。残存深 0.28 mで、断面形は椀底状を呈する。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、弥生土器甕、土師質土器皿、瓦器等の小片16点が出土し、うち3点を図示した。174・175は土師質土器皿。空港跡地遺跡編年Ⅱ-3～5期。176は平基式の打製石鏃で、本来はベースSR01に帰属する資料である。出土遺物やSB05より後出する点より、13世紀中葉を前後する時期の遺構と考える。

#### SK10 (第47図)

6区北西部で検出した土坑で、上述のとおりSK09より先行する。平面形は、東西0.71m、南北0.82mの隅丸方形状を呈する。残存深0.30mで、断面形は椀底状を呈する。埋土は3層に細分され、灰色ないし橙色系粘質土が水平堆積していた。

遺物は、土師質土器皿・杯、東播系須恵器捏鉢等の小片約10点が出土し、うち2点を図示した。177は土師質土器皿BⅢ-3類。12世紀末～13世紀代。178は東播系須恵器捏鉢の小片。森田編年第Ⅷ期2段階前後。出土遺物は乏しいが、13世紀前半を中心とする時期の遺構と考える。

#### SK11 (第47図)

6区北西部で検出した土坑である。東西0.92m、南北0.79m、残存深0.32mをそれぞれ測り、平面形は楕円形状を、断面形は椀底状をそれぞれ呈する。埋土は4層に細分され、褐灰色粘質土がレンズ状に堆積していた。

遺物は、土師質土器皿・杯等の小片6点が出土し、うち1点を図示した。179は、瓦質土器皿として図示したが、本地域で類例に乏しい器形であり、別の器種となる可能性もある。

#### SK12 (第47図)

6区中央部で検出した。SP106・SP108と重複し、そのいずれよりも後出する。東西0.65m、南北2.02m、主軸方向N6.01°Eに配された溝状を呈する土坑である。残存深0.19mで、断面形はやや歪な皿状を呈する。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、弥生土器や土師質土器皿・杯・足釜等の小片13点が出土したのみである。図化可能な資料は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、出土遺物や周辺遺構の内容などより当該期の遺構として報告する。

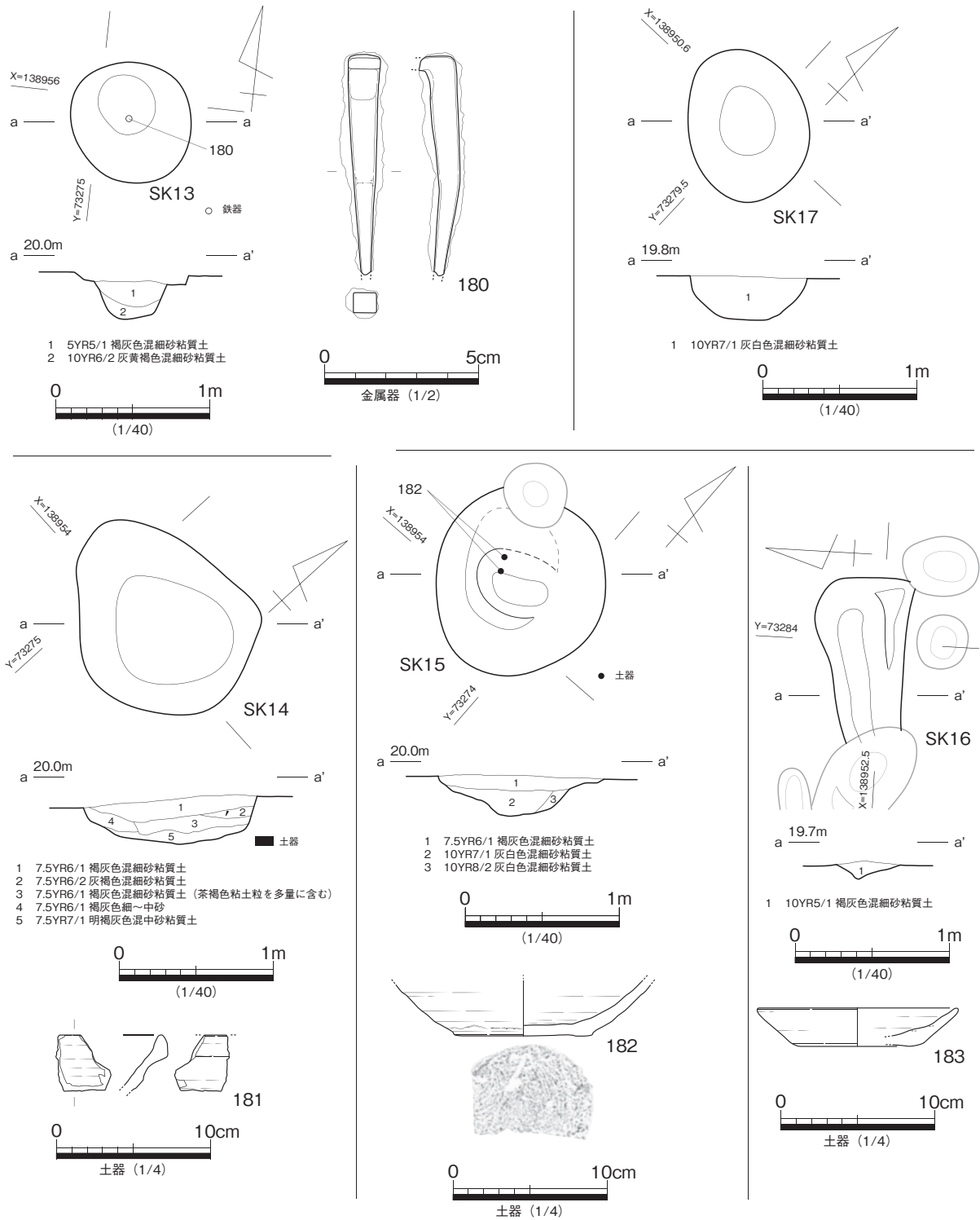
#### SK13 (第48図)

6区北西部で検出した土坑である。東西0.74m、南北0.78m、残存深0.30mをそれぞれ測り、平面形は略円形を、断面形は箱形をそれぞれ呈する。埋土は2層に細分され、褐色系粘質土がレンズ状に堆積していた。

遺物は、図示した以外には、器種不詳の弥生土器や土師質土器の小片3点が出土したのみである。180は頭部を折り曲げた大型の鉄釘である。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構の内容などより当該期の遺構として報告する。

#### SK14 (第48図)

6区北西部で検出した土坑である。東西1.12m、南北1.03m、残存深0.32mをそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形状を、断面形は逆台形状をそれぞれ呈する。埋土は5層に細分され、主に褐灰色



第48図 SK13～SK17平・断面・出土遺物実測図

系粘質土が堆積していた。4層の褐灰色細～中砂層は、西肩部より土坑中央部に向けて斜めに堆積しており、ベース自然河川SR01の流入土と考えられる。

遺物は、弥生土器や東播系須恵器捏鉢、土師質土器皿等の小片8点が出土した。181は東播系須恵器捏鉢の小片。森田編年Ⅸ期1段階前後。出土遺物より、13世紀中葉を前後する時期の遺構と考える。

### SK15 (第48図)

6区北西部で検出した土坑で、北部でSP115が上面より掘り込まれる。東西1.08m、南北1.18m以上、残存深0.26mをそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸形状を、断面形は西半部が2段掘りとなる。埋土は3層に細分され、灰色系粘質土が堆積していた。

遺物は、器種不詳の弥生土器や須恵器、土師質土器の小片5点が出土した。**182**は、東播系須恵器捏鉢の底部片。内面は使用による磨滅が顕著で、底面には炭化物の付着を認める。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、13世紀代の遺構と考える。

### SK16 (第48図)

6区中央東端で検出した。西端部でSP133が上面より掘り込まれており、全形は不明。東西0.98m以上、南北0.45m、残存深0.12mをそれぞれ測り、平面形は東西に長い溝状を、断面形は皿状をそれぞれ呈する。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、黒色土器B類碗と土師質土器杯等の小片6点が出土したのみである。**183**は、土師質土器杯。佐藤編年Ⅳ期に位置付けられ、混入資料の可能性が高い。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、周辺遺構の内容などより当該期の遺構として報告する。

### SK17 (第48図)

6区中央部で検出した土坑である。東西0.74m、南北0.98m、残存深0.29mをそれぞれ測り、平面形は楕円形を、断面形は椀底状をそれぞれ呈する。埋土は、灰白色粘質土の単層であった。

遺物は、ベース自然河川SR01からの混入とみられる弥生土器高杯等の小片3点が出土したのみである。図化可能な資料は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、埋土や周辺遺構の内容などより当該期の遺構として報告する。

## 溝

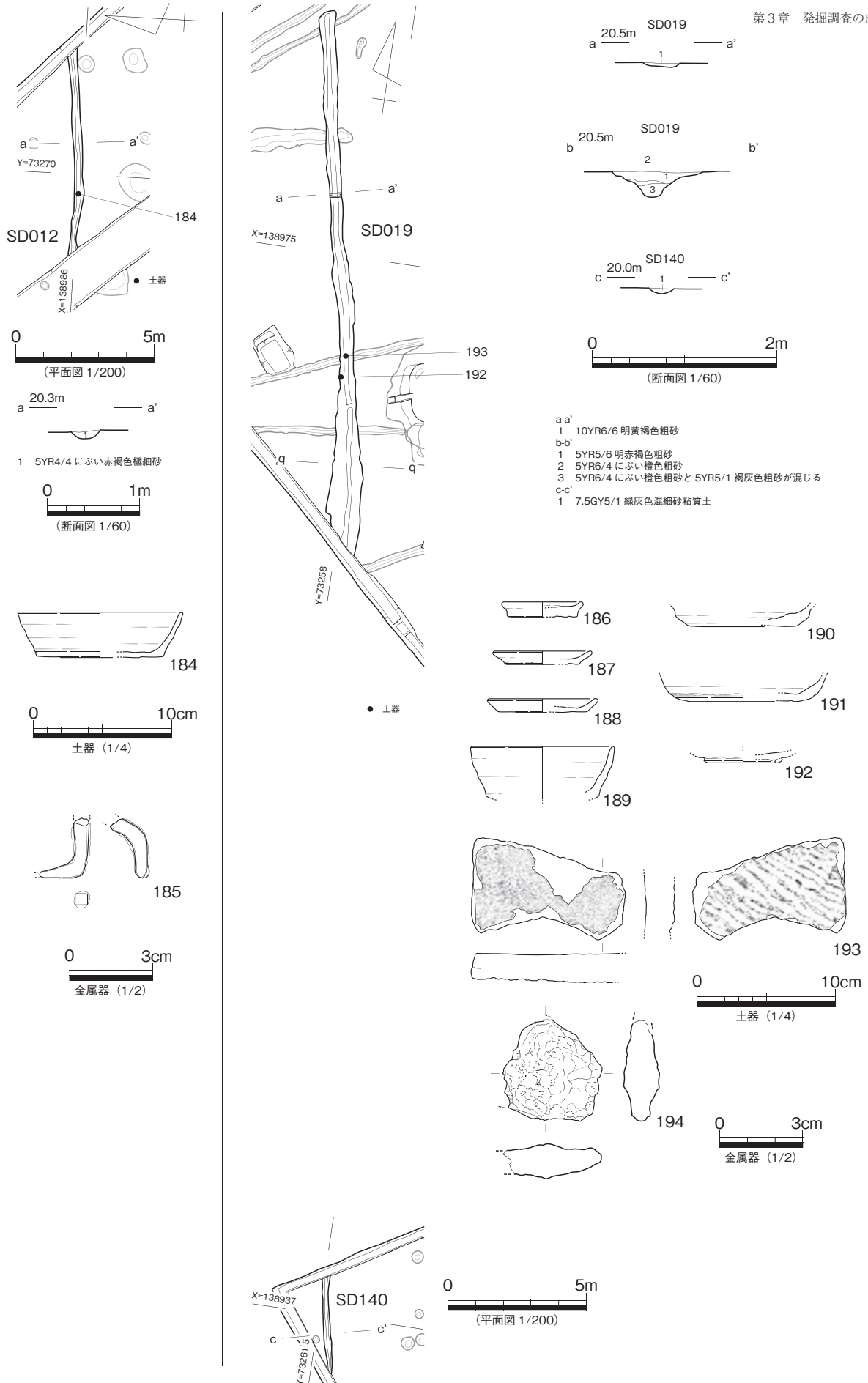
### SD012 (第49図)

5区北東部で検出した東西溝で、東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。やや南に湾曲するものの、流路方向は概ねN 85.79° Eに配される。検出面幅0.32m前後、残存深0.08m前後を測り、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端部で19.97m前後を、東端部で19.87m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土はにぶい赤褐色極細砂の単層であった。

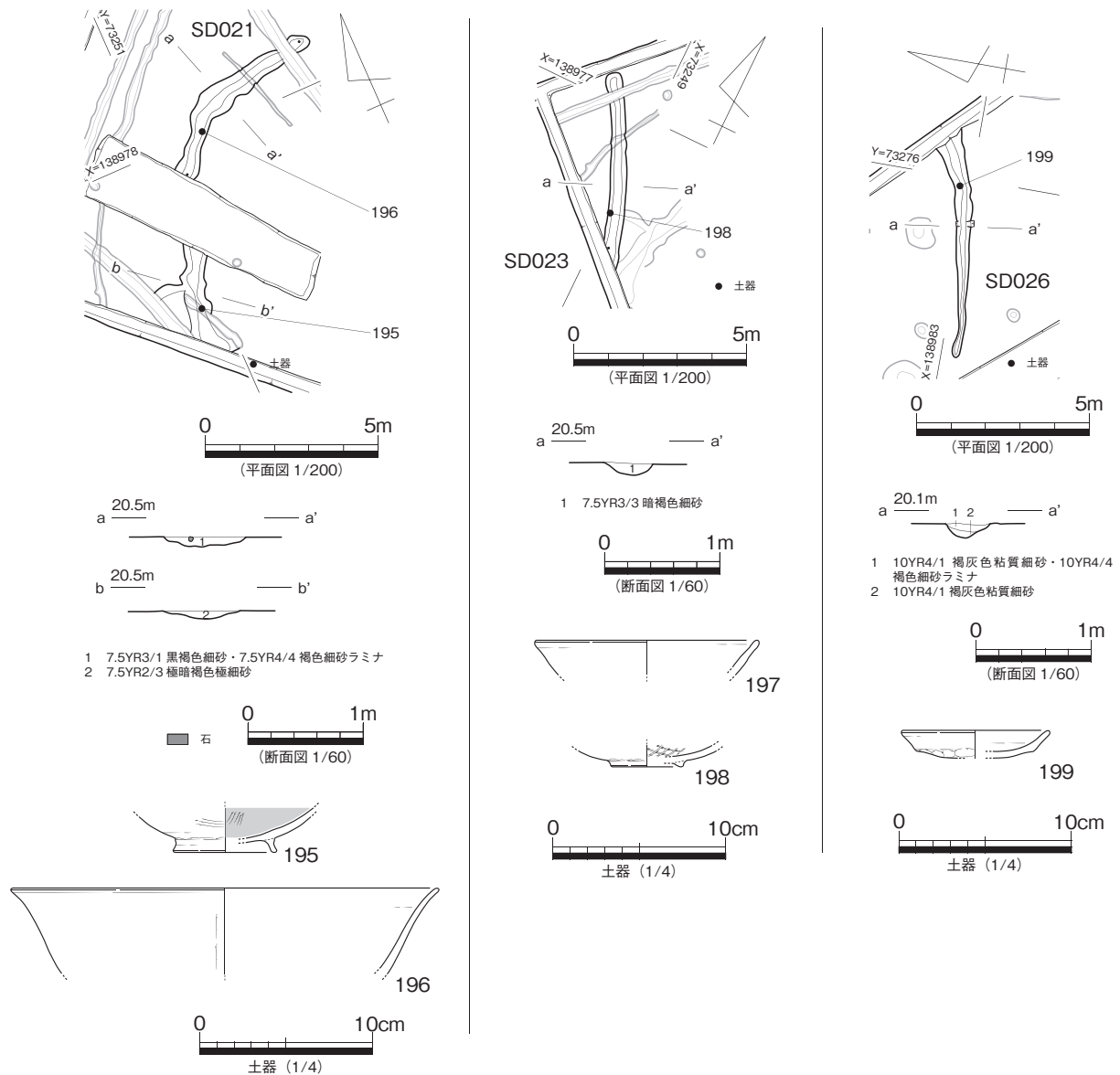
遺物は、器種不詳の須恵器や土師質土器杯等の小片5点が出土した。**184**は土師質土器杯。空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～4期。**185**はL字状に大きく折れ曲がった鉄釘である。頭部及び下端部を折損する。出土遺物や流路方向より、13世紀前葉の遺構の可能性を考える。

### SD019・SD140 (第49図)

SD019は、5区西端部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延長し、その延長上にSD140が所在する。両溝は、規模や埋土などが相違するが、流路方向が概ね一致することから、一連の遺構として報告する。若干蛇行するものの、流路方向は概ねN 9.83° Wに配される。SD019は、検出面幅0.40～0.97m、残存深0.04～0.28mを測り、断面形は皿状ないし椀底状を呈する。溝底面の標高は、SD019北端



第49図 SD012・SD019・SD140 平・断面・出土遺物実測図



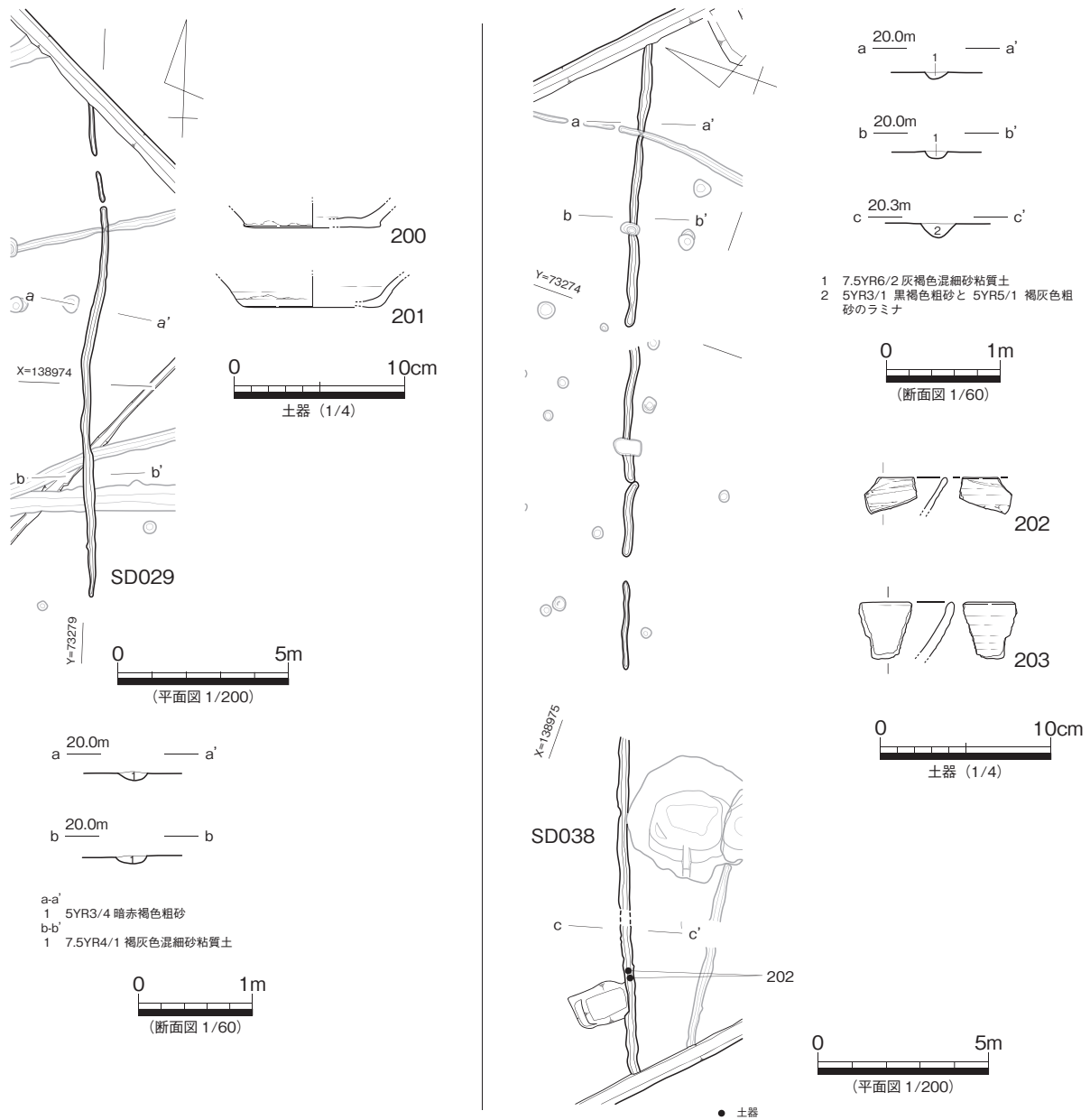
第 50 図 SD021・SD023・SD026 平・断面・出土遺物実測図

で 20.3 m 前後を、同南端で 19.9 m 前後、SD140 南端で 19.8 m 前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していたと考えられる。埋土は 1～3 層に細分され、褐色ないしは橙色系粗砂等が堆積していた。

遺物は、図示した以外に両溝で弥生土器壺、須恵器、黒色土器碗、土師質土器皿・杯・足釜・鍋、布目平瓦等の小片約 100 点が出土した。図示した資料はいずれも、SD019 の出土遺物である。186～188 は土師質土器皿、189～191 は同杯である。192 は十瓶山周辺窯産の須恵器碗の底部片。193 は須恵質焼成の平瓦の小片である。凸面には粗い縄目タタキを施す。194 は椀形滓の小片で、次章で詳述するように、理化学的な分析により鍛錬鍛冶滓であることが明らかとなった。出土遺物には、空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～4 期とやや幅がみられるが、遺構の重複関係などより 13 世紀後葉の埋没の可能性を想定する。

### SD021 (第 50 図)

5 区北西隅で検出した溝で、緩やかに湾曲して南西から北東に配される。SD019 や SD023 と重複し、



第 51 図 SD029・SD038 平・断面・出土遺物実測図

そのいずれよりも先行する。検出面幅 0.70～0.75 m、残存深は 0.07～0.09 m と浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、20.2 m 前後で一定し、流下方向を特定することは困難であった。埋土は褐色系細砂が堆積していた。

遺物は、図示した以外には、弥生土器壺、須恵器、黒色土器碗、土師質土器、布目平瓦等の小片 19 点が出土した。195 は黒色土器 A 類碗。佐藤編年 V 期中相に位置付けられ、混入資料の可能性が高い。196 は越州窯系青磁大碗の可能性はあるが、小片のため断定は困難である。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、周辺の遺構との関係より当該期の遺構の可能性を想定する。

SD023 (第 50 図)

5 区北西隅で検出した南北溝である。SD016 や SD017、SD021 と重複し、SD016 と SD017 より先行し、

SD021 より後出する。やや東に湾曲するものの、流路方向は概ねN 24.88° Wに配される。検出面幅 0.42 m前後、残存深 0.11 m前後を測り、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、北端部で 20.26 m前後を、南端部で 20.15 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していたと考えられる。埋土は、暗褐色細砂の単層であった。

遺物は、土師質土器碗、和泉型瓦器碗、布目平瓦等の小片 11 点が出土した。**197** は、土師質土器杯の口縁部として図示したが、小片のため別の器種となる可能性もある。**198** は、尾上編年Ⅲ -1 期の和泉型瓦器碗の底部片である。遺構の重複関係や出土遺物より、12 世紀末を中心とした時期の遺構と考える。

#### SD026 (第 50 図)

5 区東端、上述した SD012 の南 3.53 mにおいて検出した東西溝で、SD012 とほぼ並走して配される。検出面幅 0.37 m前後、残存深 0.12 m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端で 19.97 m前後を、東端で 19.74 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。東端埋土は 2 層に細分され、褐灰色細砂が主に堆積していた。

遺物は、図示した以外には器種不詳の弥生土器や土師質土器等の小片 4 点が出土したのみである。**199** は、尾上編年Ⅲ期後半の和泉型瓦器皿である。出土遺物等より 13 世紀前葉の遺構の可能性を想定する。

#### SD29 (第 51 図)

6 区北東部から 5 区南東部にかけて断続的に検出した南北溝で、北端は調査区外へ延長し、南端は調査区内で途切れる。SD038、SD103、SD105 と重複し、切り合い関係よりそのいずれよりも後出する。中央やや北でクランク状に屈曲するものの、流路方向は概ね N 3.96° Wに配され、検出面幅 0.17 ~ 0.30 m、残存深 0.06 ~ 0.08 mを測り、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、19.75 m前後で概ね一定し、流下方向を特定することは困難であった。埋土は、褐色系粗砂や粘質土の単層である。

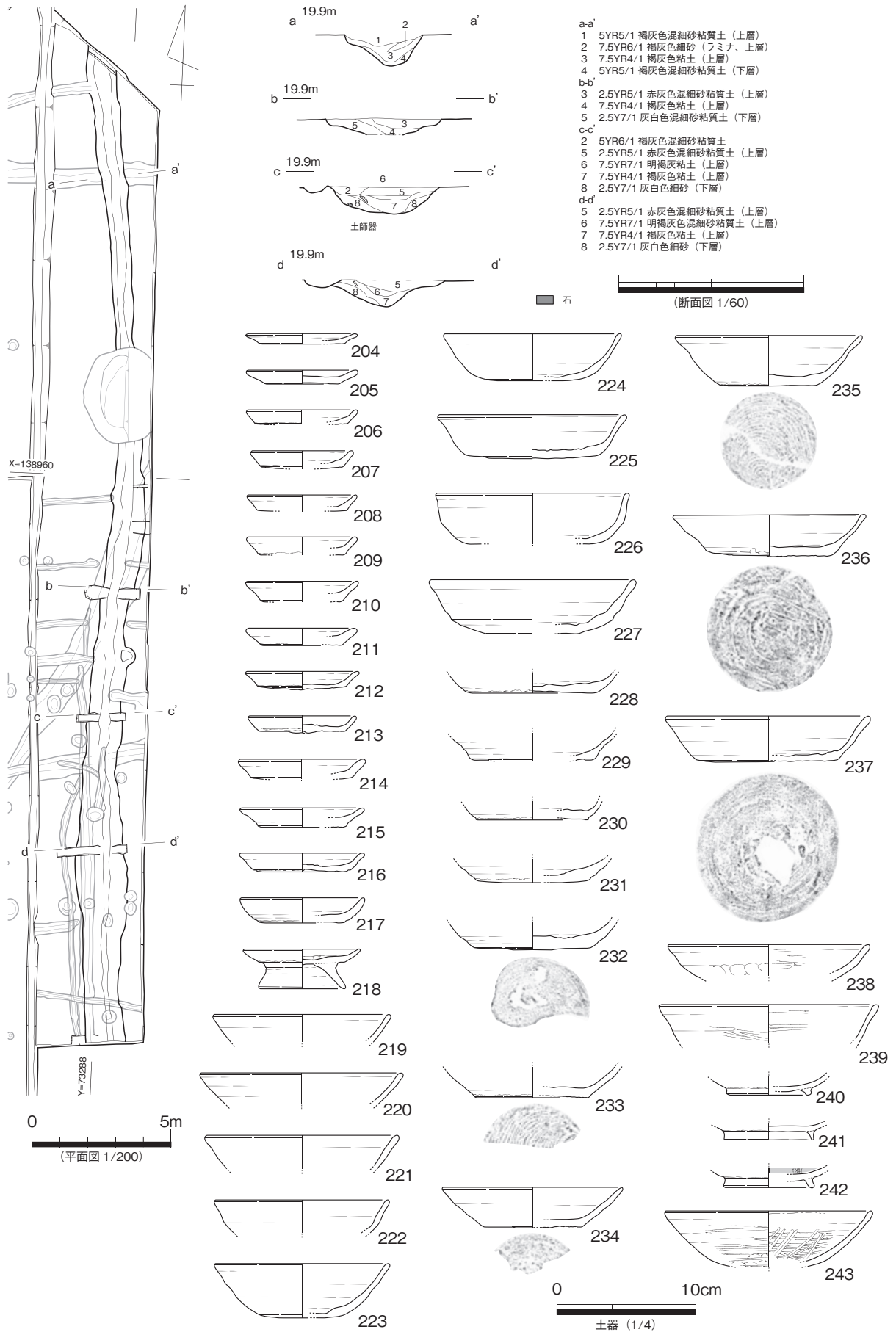
遺物は、器種不詳の弥生土器や土師質土器皿等の小片 8 点が出土したのみである。**200・201** は、土師質土器杯の底部片である。上述した周辺遺構との重複関係や出土遺物より、13 世紀中葉を中心とした時期の遺構の可能性を想定する。

#### SD038 (第 51 図)

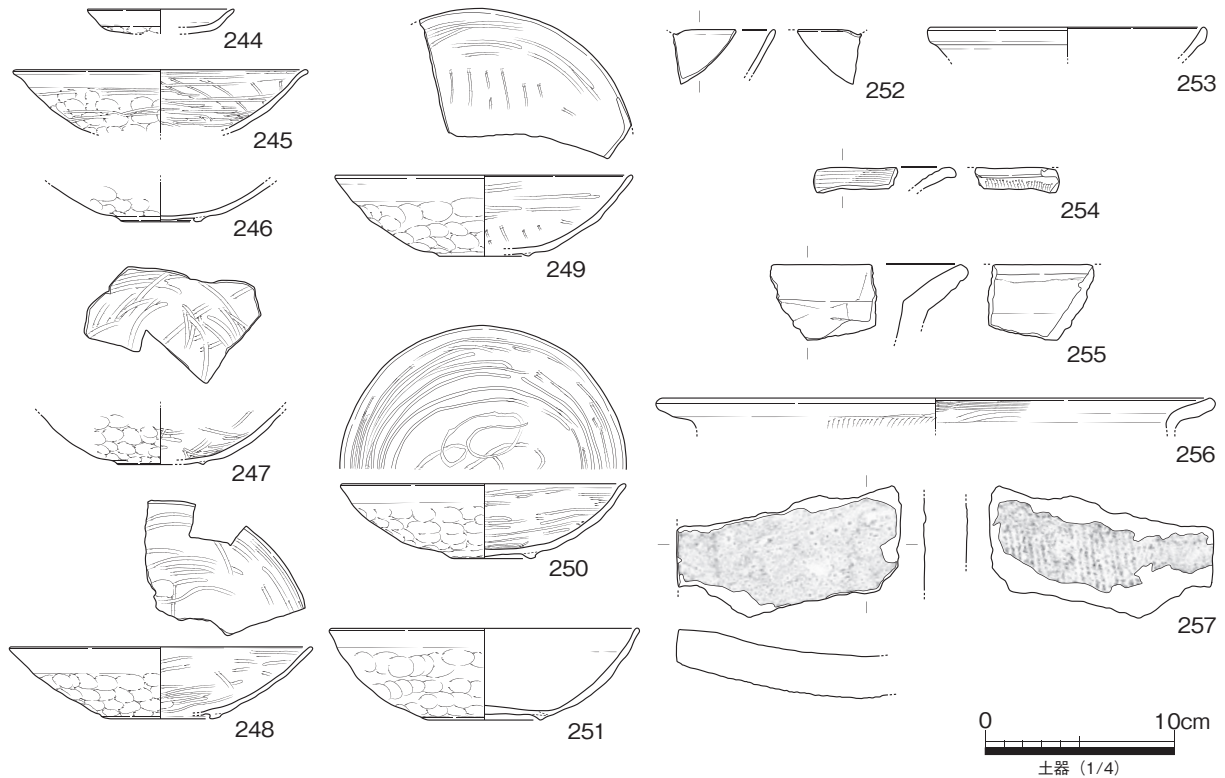
5 区中央部を東西に横断して、断続的に検出された溝で、東西両端は調査区外へ延長する。SK04 と重複し、切り合い関係より先行する。溝は僅かに北に弧状を呈して開削されているが、東西両端を結んだ主軸方向は N 71.24° Eに配される。検出面幅 0.20 ~ 0.30 m、残存深 0.06 ~ 0.12 m、断面形は U 字状を呈する。溝底面の標高は、西端部で 20.10 m前後を、東端部で 19.70 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下する可能性が想定される。埋土は、褐色系の砂ないし粘質土の単層であった。本溝は、後述する SD103 と概ね並走し、規模や埋土、流下方向などが近似することから、同時期に並存していた可能性が考えられる。その場合 SD103 同様に、本溝も調査区外で SD102 へ合流していた可能性は高い。なお、両溝の芯々間の距離は 7.05 m前後であった。

遺物は、土師質土器杯、和泉型瓦器碗等の小片 24 点が出土した。図示した以外は、器種不詳の土器





第52図 SD102 平・断面・出土遺物実測図 1



第 53 図 SD102 出土遺物実測図 2

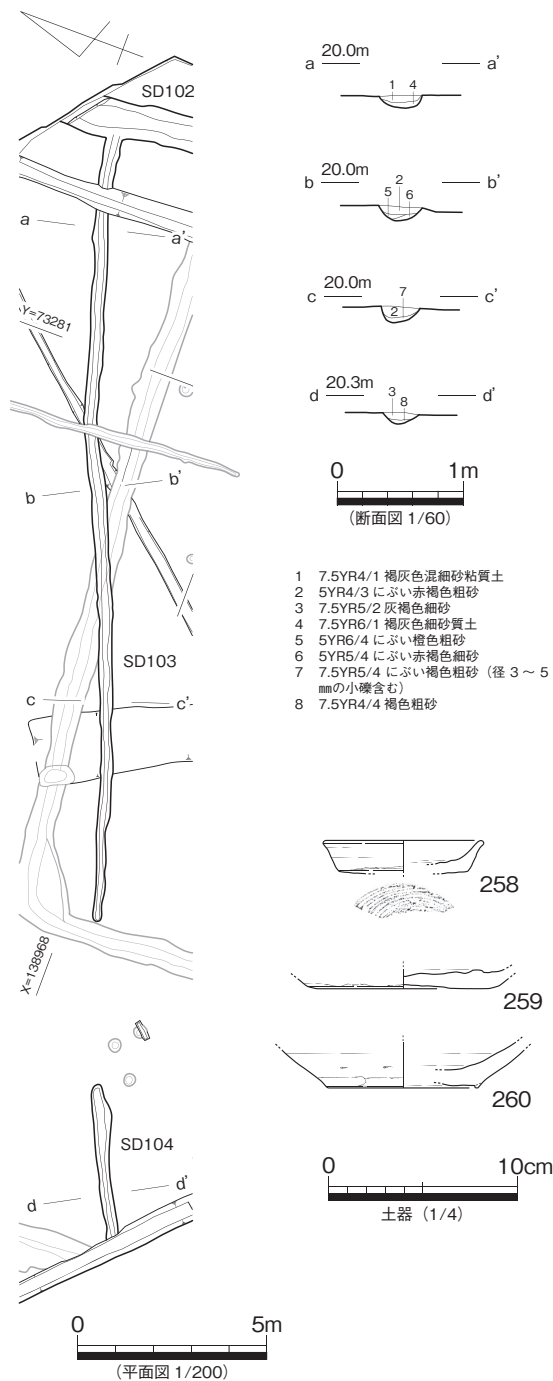
小片が大半を占める。**202** は、尾上編年Ⅲ期前半の和泉型瓦器碗の口縁部小片である。**203** は、土師質土器杯の口縁部小片。上述した周辺遺構との関係や出土遺物より、13世紀前葉～中葉の遺構の可能性を考える。

#### SD102 (第 52・53 図)

7区で検出した南北溝で、両端は調査区外へ延長する。北部で西より後述するSD103が合流する。また、SK08、SD105、SD128、SD129、SD115、SD118等の多くの遺構と重複し、切り合い関係よりSK08、SD115より先行し、その他の遺構より後出する。調査区内で僅かに蛇行するが、概ね流路方向はN 2.9° Wに配される。したがって後述するSD103とは直交しない。検出面幅0.67～1.83 m、残存深0.29～0.33 m、断面形は逆台形ないしU字状を呈する。溝底面の標高は、北端部で19.45 m前後、南端部で19.38 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が考えられる。埋土は3～5層に細分され、褐灰色系粘質土を主とする上位2～4層を上層、灰色系細砂ないし混細砂粘質土の下位1層を下層として、遺物の取り上げを行なった。埋土の堆積状況より、複数回の改修の可能性が考えられる。

遺物は、弥生土器壺・甕・鉢や須恵器壺、黒色土器A・B類碗、土師質土器皿・台付皿・杯・碗・鍋、和泉型瓦器皿・碗、中国製白磁碗、龍泉窯系青磁Ⅰ-2類碗、須恵質と土師質の布目平瓦等の破片約650点が出土した。遺物は、上述した上・下2層間で量や内容に大きな差は認めない。図示した遺物のうち、**205・206・208・209・211～214・218・219・224～226・228～230・232・239・242・244・251・252・254**が上層、**207・210・215～217・220～223・227・231・234～236・238・241・245～249・253・255～257**が下層、上記以外は層位不明の遺物である。

**226** は土師器杯で、9世紀代に位置付けられ、混入資料と考える。**204～217** は土師質土器皿である。

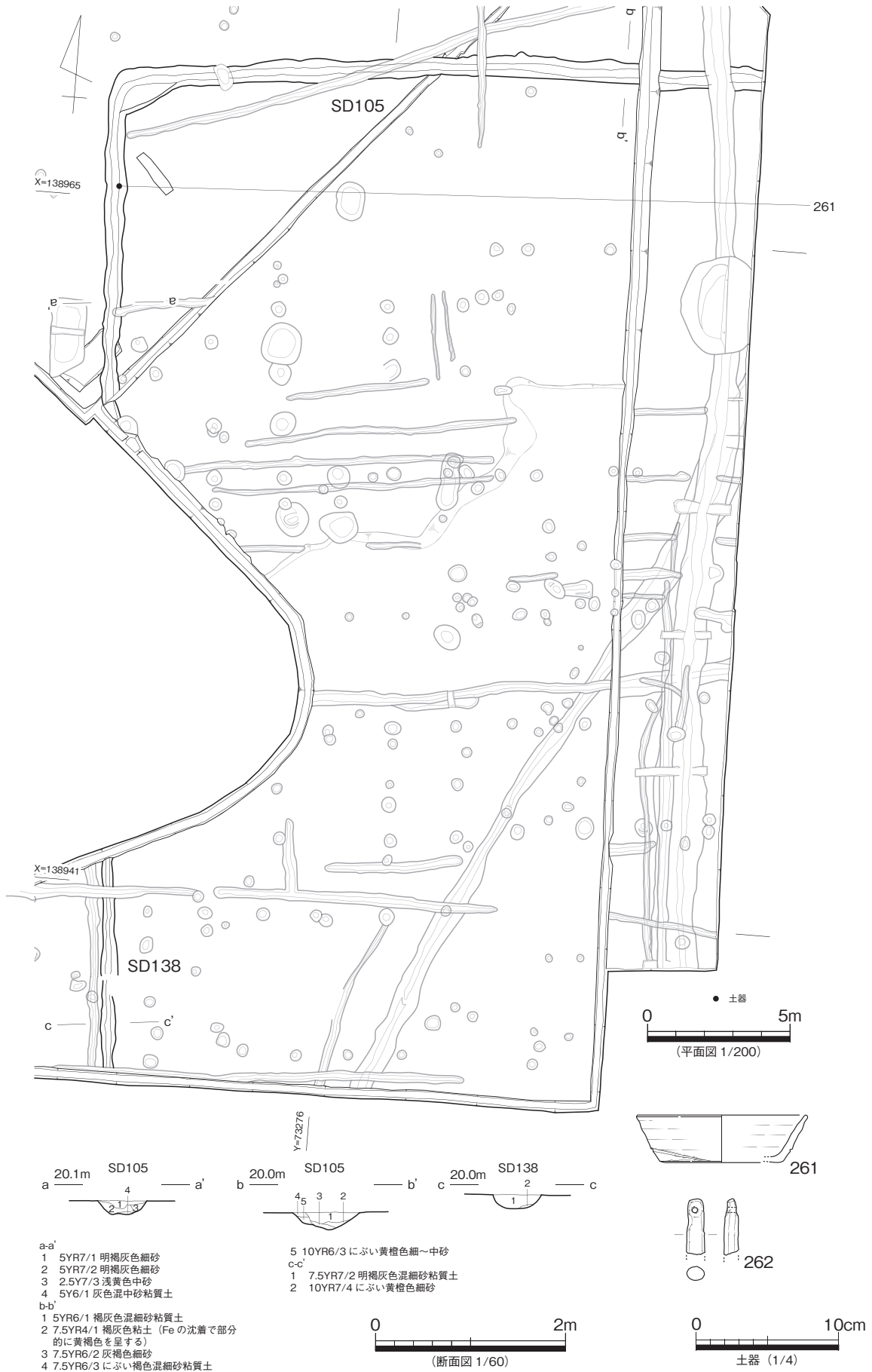


第54図 SD103・SD104 平・断面・出土遺物実測図

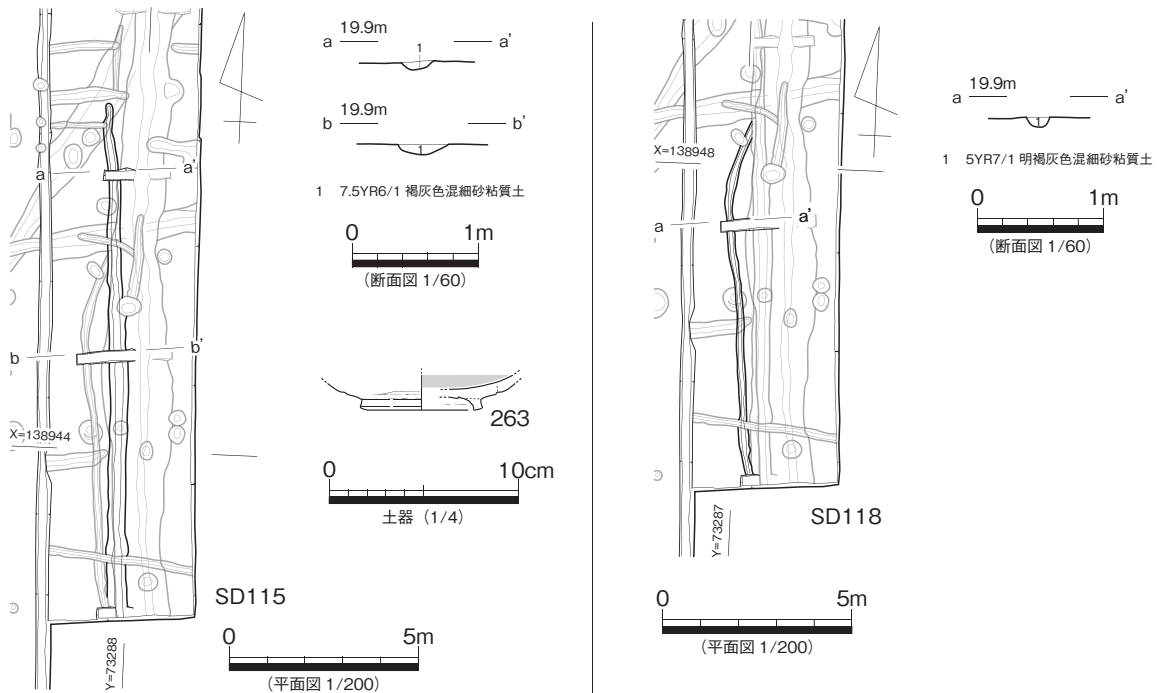
209 は内外面に煤が付着する。204～206・208・211・215の底部は、糸切りかその可能性がある。218は同台付皿。本遺跡での出土頻度は低い。219～225・227～237は同杯。223・225・228・236は被熱により内外面に煤が付着する。空港跡地遺跡編年Ⅱ-1～2期。232～235は底部回転糸切である。238～241は土師質土器碗。239の内外面には煤が付着する。240は空港跡地遺跡編年Ⅱ-1～2期。242は黒色土器A類碗の底部片。混入資料の可能性が高い。243は十瓶山周辺窯産の須恵器碗。空港跡地遺跡編年Ⅱ-1期。244は和泉型瓦器の皿、245～250は同碗である。251も同碗としたが、焼成があまく、また器形の歪みも大きいため別の器種となる可能性がある。接合資料がSD117より出土している。250はほぼ完形に復元される。245・249は尾上編年Ⅲ期前半、その他はⅣ期前半を中心とした時期とみられる。252・253は中国製白磁碗の口縁部小片である。253は玉縁の口縁部で大宰府分類碗Ⅳ類、252は口縁部が輪花となることから、同Ⅴ-1d類の可能性はあるが、小片のため断定できない。254～256は土師質土器鍋の口縁部小片。257は布目平瓦の小片である。本遺構出土資料には、被熱により内外面に煤が付着している資料が一定量含まれ、火災などにより焼損したものを廃棄した可能性も考えられる。上述した遺構の重複関係や出土遺物より、13世紀前葉～中葉での開削・埋没の可能性を考える。

SD103・SD104 (第54図)

5区南西隅から7区北端にかけて、調査区を東西に横断して検出した溝で、東端はSD102に合流し、



第55図 SD105・SD138 平・断面・出土遺物実測図



第56図 SD115・SD118平・断面・出土遺物実測図

SD104 からの出土遺物はなく、SD103 より弥生土器鉢や須恵器鉢、土師質土器皿・杯等の小片約 30 点が出土した。**258** は土師質土器皿で、底部は糸切りである。**259** は同杯。**260** は瓦質土器鉢。底部に痕跡的な高台を付す。上述したように SD038 や SD102 と同時並存することや出土遺物より、13 世紀前葉～中葉の遺構の可能性を考える。

#### SD105・SD138 (第55図)

5 区南西部より 6・7 区北部において、L 字状に検出された SD105 と、SD105 南北溝の南延長上に位置する SD138 を、規模や埋土、主軸方向などより一連の遺構として判断し報告する。調査区南東部を L 字状に区画する区画溝であり、区画の規模は、東西 22.3 m 以上、南北 34.3 m 以上を測る。SD031、SD102 と重複し、切り合い関係よりいずれよりも先行する。東西溝の流路方向 N 86.14° E、南北溝は N 3.87° W にそれぞれ配され、ほぼ直交する。検出面幅 0.57～0.70 m、残存深 0.15～0.18 m を測り、断面形は椀底状を呈する。溝底面の標高は、南北溝は 19.73～19.75 m 前後で概ね一定し、東西溝東端部で 19.52 m 前後を測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、4～5 層に細分され、褐色系の砂や粘質土が主に堆積していた。東西溝の堆積状況の観察から、改修の可能性が想定され、一定期間溝の機能が維持されていた可能性が高い。

遺物は、弥生土器壺・甕や須恵器、土師質土器皿・杯・碗、和泉型瓦器碗等の小片約 150 点が出土した。出土遺物の大半は、ベースとなる SR01 からの混入資料の弥生土器が占める。**261** は、南北溝北半部より出土した土師質土器杯。内外面に一部煤が付着する。空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～4 期。**262** は、東西溝東端部より出土した棒状土錘である。出土遺物は乏しいが、遺構の切り合い関係などより、13 世紀前葉を中心とした時期の遺構の可能性を想定する。

### SD115 (第56図)

7区南半部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。SD102やSD118と重複し、切り合い関係より両溝よりも後出する。流路方向N 3.77° Wに配された直線溝である。検出面幅0.28～0.40 m、残存深0.07 m前後を測り、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、北端部で19.67 m前後を、南端部で19.63 m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、黒色土器碗や土師質土器皿・杯等の小片46点が出土した。出土遺物の大半は、器種不詳の土器小片が占め、図化可能な資料は乏しい。**263**は、黒色土器B類碗の底部片で、混入資料であろう。出土遺物より時期を特定することは困難だが、上述した遺構の切り合い関係などより、13世紀中葉以降の遺構の可能性を想定する。

### SD118 (第56図)

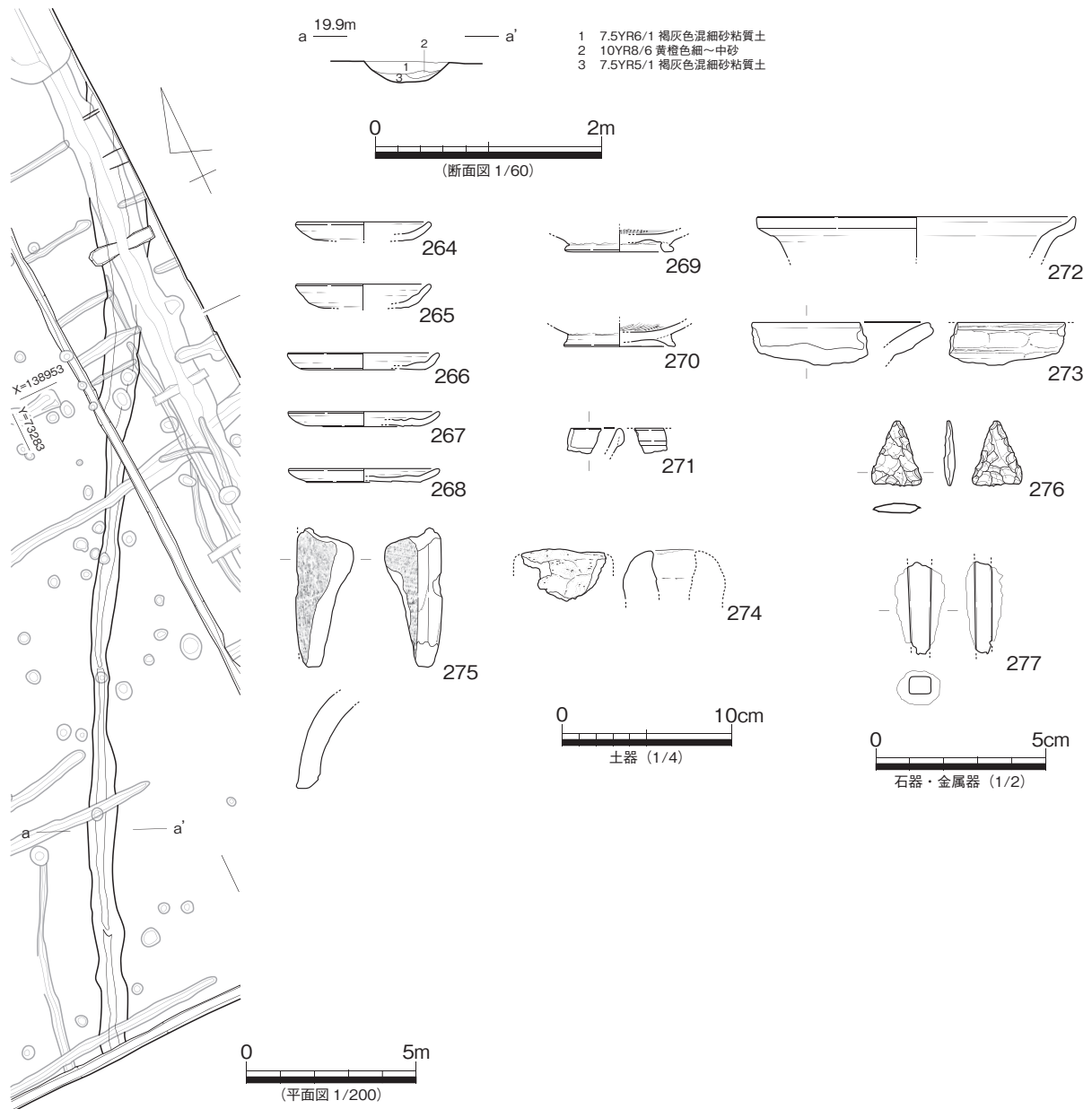
7区南半部で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延長する。北端は上述したSD115に切られ、その東側で延長部が確認されなかったことから、さらにSD102よりも先行する溝と考えられる。検出面幅0.20 m前後、残存深0.08 m前後で、断面形はU字状を呈する。溝底面の標高は、北端部で19.67 m前後を、南端部で19.71 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が考えられる。埋土は明褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、須恵器や土師質土器杯等の小片9点が出土したのみで、図化可能な資料は出土していない。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、上述した遺構の切り合い関係より、本溝も12世紀後葉～13世紀前葉の遺構の可能性を想定する。

### SD128 (第57図)

6・7区南東隅部に斜交して配された直線溝で、南北両端は調査区外へ延長する。SD102、SD115、SD129などの遺構と重複し、切り合い関係よりそのいずれの遺構よりも先行する。調査区内でやや蛇行し、南北両端を結んだ流路方向は概ねN 24.74° Eに配される。検出面幅0.75～1.03 m、残存深0.18～0.20 mを測り、断面形は椀底状を呈する。溝底面の標高は、南端で19.55 m前後を、北端で19.50 m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が想定される。埋土は、2～3層に細分され、褐灰色粘質土が主に認められた。なお、溝上流には大型灌漑水路SD161が配され、本溝はSD161より分岐し、SD161北側への配水のため開削された支線水路の可能性が想定される。

遺物は、弥生土器甕や須恵器、土師質土器皿・杯・碗・鍋、黒色土器B類碗、和泉型瓦器碗、布目平・丸瓦等の小片約250点が出土した。**264～268**は土師質土器皿である。**268**の内外面には煤が付着する。**269**は黒色土器A類碗の小片。見込みに複数方向の平行ミガキを施す。**270**は土師質土器碗である。見込みに6分割ミガキを施す。**271**は白磁碗Ⅳ類の口縁部小片。**272**は須恵器壺の口縁部小片。十瓶山編年Ⅳ-2期。**273**は土師質土器鍋の口縁部小片。空港跡地遺跡編年Ⅱ-2～5期に位置付けられ、混入資料の可能性が高い。**274**は、土師質焼成のフイゴの羽口の小片である。外径約6.0cm、孔径約2.0cmの円柱状に復元される。外面にはオリーブ灰色を呈するガラス質の溶解物が付着し、孔内は被熱により赤変する。**275**は布目丸瓦の小片。**276**は平基式の打製石鏃である。混入資料であり、本来はベース層のSR01に帰属する遺物である。**277**は、鉄釘とみられる角柱状の鉄器片である。



第57図 SD128 平・断面・出土遺物実測図

出土遺物より、本溝は11世紀末～12世紀前葉での開削・埋没の可能性が想定される。

### SD129 (第58図)

6・7区中央を東西に横断して検出された直線溝で、両端は調査区外へ延長する。SD102、SD115、SD128、SD130などと重複し、切り合い関係よりSD128、SD130より後出し、その他の遺構より先行する。SD130は、後述するように鋤溝の可能性を想定した。SD130以外の多数の鋤溝は、中世屋敷地の各遺構よりも後出することから、屋敷地廃絶後に調査区周辺が耕地化される可能性を想定した。SD130では、そうした想定とは切り合い関係が矛盾し、鋤溝とは異なる性格を有する遺構などの可能性も考えられる。他の遺構との重複関係から、SD129がその他の鋤溝群より先行することは確認できる。

SD129は、調査区内でやや屈曲するが、概ね流路方向N 81.59° Eに配される。本溝の南に約1.2m離れてSB06が所在し、SB06の主軸方向と本溝の流路方向は近似し、また整った位置関係にあることか

ら、本溝はSB06の雨落ち溝の機能をも併せて開削された可能性も考えられる。検出面幅0.28～0.76m、残存深0.09～0.20mを測り、断面形は皿状ないし椀底状を呈する。溝底面の標高は、西端で19.61m前後を、東端で19.57m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、1～2層に分層され、褐灰色系粘質土が堆積していた。

遺物は、弥生土器や黒色土器、土師質土器皿・杯・鍋、須恵質の布目平瓦等の小片36点が出土した。図示した遺物はすべて7区より出土したもので、**278**は土師質土器皿。底部は回転糸切である。SD102下層出土資料と接合した。**279～281**は土師質土器杯である。**280**は、小片のため別の器種となる可能性もある。**282**は須恵質焼成の布目平瓦の小片。凸面には粗い縄目タタキを施す。

上述した遺構の切り合い関係や出土遺物より、本溝は13世紀前半を中心とした時期に、開削・埋没した可能性を想定する。

### SD139 (第58図)

6区南西隅で検出した南北溝で、上述した区画溝SD138の西に隣接して検出された。鋤溝SD135、SD141より先行する。流路方向N5.48°Wと、SD138とほぼ並走するものの、区画溝として5区には延長せず、溝の機能については明らかにできない。検出面幅0.26m前後、残存深0.10m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、北端で19.83m前後を、南端で19.78m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していたと考えられる。埋土は明褐灰色粘質土の単層であった。

遺物は、弥生土器甕や須恵器、土師質土器皿・杯、布目平瓦等の小片13点が出土したのみである。**283**は土師質土器杯。底部は回転糸切りである。空港跡地遺跡編年Ⅱ-3～4期。**284**は須恵質焼成の平瓦の小片。側面に布目痕を認める。

出土遺物より、13世紀前半を中心とした時期の遺構の可能性を想定する。

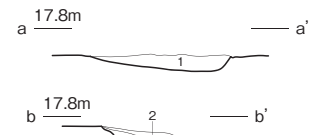
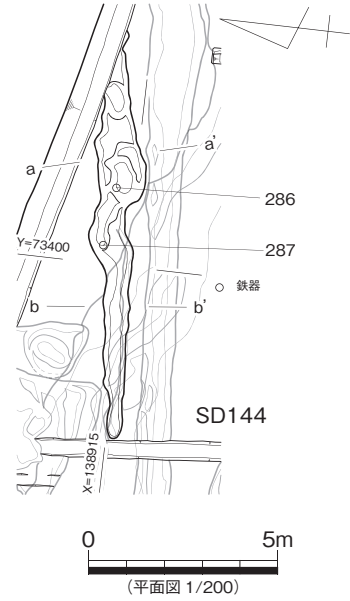
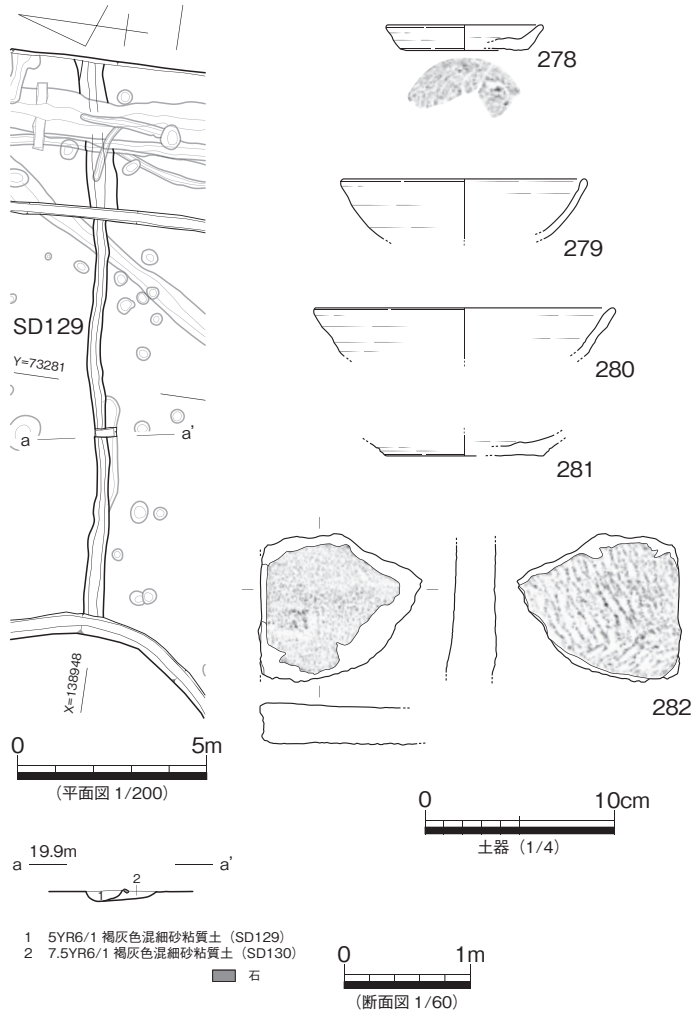
### SD144 (第58図)

2区北東隅部を東西に走行する直線溝で、東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。後述するSD161上面より掘り込まれる。南約1.1mに後述するSD145が並走し、時期的に近接もしくはほぼ同時期に機能していた可能性が想定される。流路方向N83.3°Eに配された、直線溝である。検出面幅0.53～1.20m、残存深0.12～0.18を測り、断面形は概ね皿状を呈するが、底面は起伏がやや顕著に認められた。溝底面の標高は、西端部で17.6m前後を、東端部で17.4m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、1～2層に細分され、褐色系の粘質シルトが堆積していた。

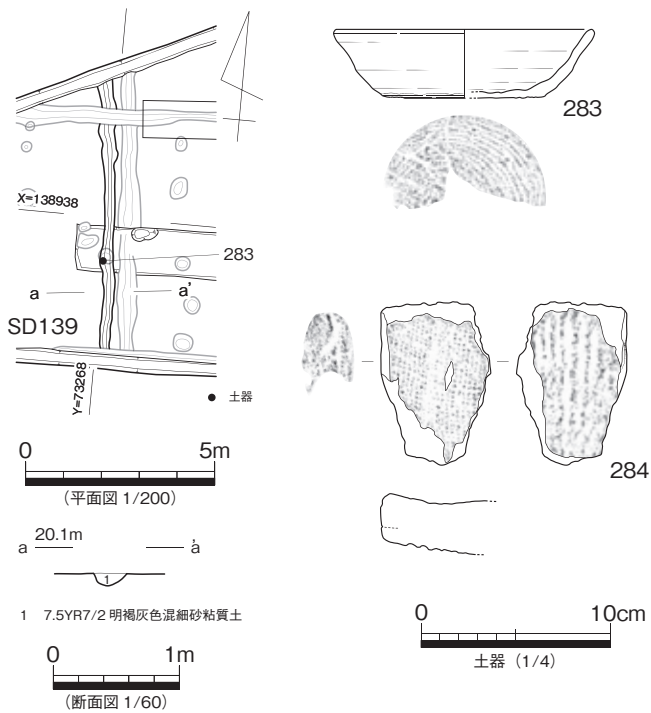
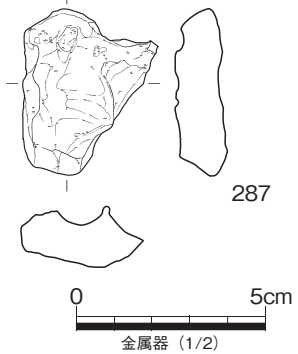
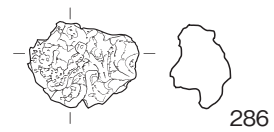
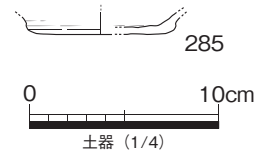
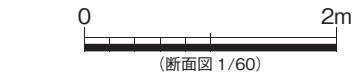
遺物は、図示した以外に土師器甕・竈、黒色土器B類碗、須恵器等の小片が60点程度出土した。**285**は平高台の土師質土器碗として図示したが、小片のため別の器種となる可能性もある。**286・287**は椀形滓の小片。別個体とみられ接合はしない。

出土遺物は、重複するSD161の時期幅に含まれ混入の可能性が考えられ、直接本溝の開削～埋没時期を示すものではない。上述したように流路方向より、後述するSD145と近接した時期の遺構と考えられる。

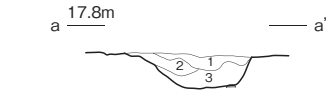
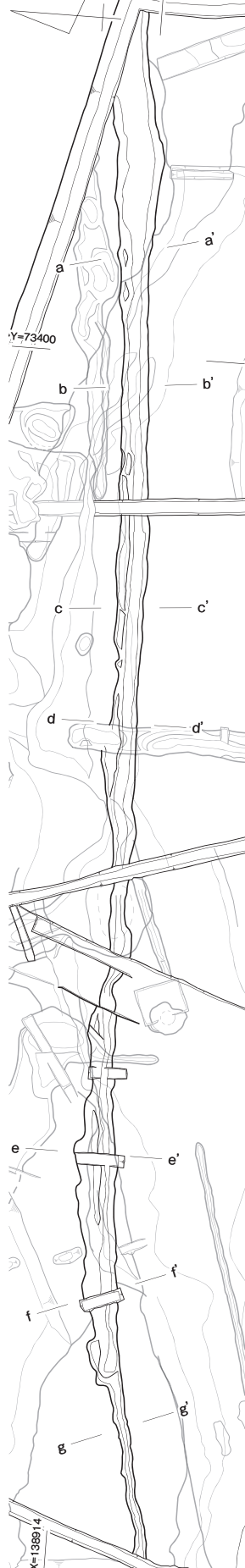




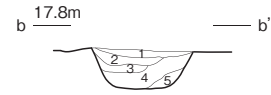
- 1 7.5YR3/2 黒褐と 7.5YR4/2 灰褐の中間色中砂混り粘質シルト (10YR5/4 にぶい黄褐色中砂混り細砂・10YR5/2 灰黄褐色細砂ブロック含む)
- 2 7.5YR3/3 暗褐色中砂混り粘質シルト
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト



第58図 SD129・SD139・SD144 平・断面・出土遺物実測図



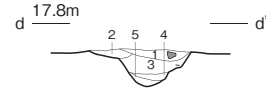
- a-a'
- 1 10YR2/2 黒褐と 10YR3/1 黒褐の中間色細礫混り粘質シルト (上層)
  - 2 10YR3/2 黒褐と 10YR4/2 灰黄褐の中間色粘土 (上層)
  - 3 10YR4/2 灰黄褐色中砂混り粘質シルト (2.5Y6/2 灰黄色中砂ブロック含む、下層)



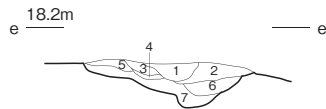
- b-b'
- 1 7.5YR3/3 暗褐色細礫混り粘質シルト (上層)
  - 2 7.5YR3/3 暗褐と 7.5YR3/4 暗褐の中間色細礫混り粘質シルト (上層)
  - 3 10YR4/2 灰黄褐色中砂混り粘質シルト・10YR3/2 黒褐色中砂混り粘質シルトラミナ (上層)
  - 4 10YR3/2 黒褐と 10YR4/2 灰黄褐の中間色粘土 (下層)
  - 5 10YR2/2 黒褐色細礫混り粘土 (下層)



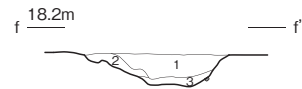
- c-c'
- 1 10YR3/4 暗褐色細礫混り粘質シルト (上層)
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色細礫混り粘質シルト (上層)
  - 3 10YR5/3 にぶい黄褐色細砂 (下層)
  - 4 10YR3/3 暗褐色中砂混り粘質シルト (下層)



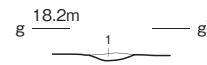
- d-d'
- 1 10YR4/3 にぶい黄褐色中砂混り粘質シルト (上層)
  - 2 10YR6/3 にぶい黄橙色中砂混り細砂・10YR4/2 灰黄褐色粘土ラミナ (上層)
  - 3 10YR2/1 黒と 10YR2/2 黒褐の中間色中砂混り粘土 (上層)
  - 4 10YR5/2 灰黄褐色中砂 (下層)
  - 5 10YR4/1 褐灰色中砂混り粘質シルト (下層)



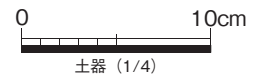
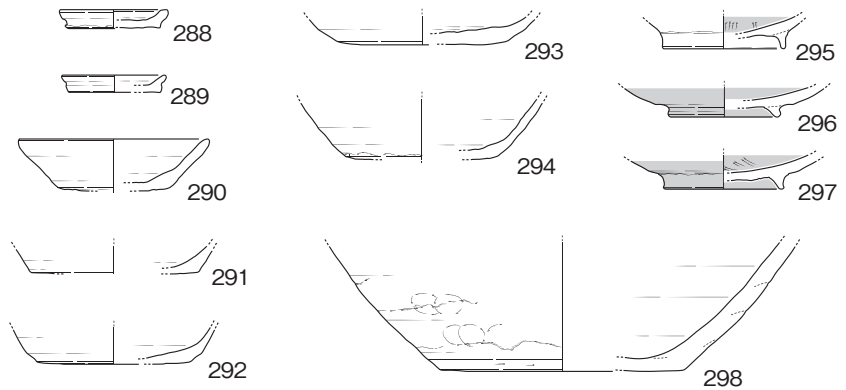
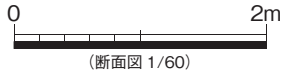
- e-e'
- 1 2.5Y4/2 暗灰黄色中砂混り粘質シルト・10YR6/3 にぶい黄褐色中砂～細砂ラミナ (上層)
  - 2 2.5Y3/2 黒褐色中砂混り粘質シルト (上層)
  - 3 2.5Y3/2 黒褐色中砂混り粘質シルト (2層より砂質強、上層)
  - 4 2.5Y6/3 にぶい黄色中砂 (上層)
  - 5 2.5Y3/1 黒褐と 2.5Y3/2 黒褐の中間色中砂混り細砂 (やや弱粘質、下層)
  - 6 5Y3/1 オリーブ黒色中砂混り粘質シルト (下層)
  - 7 5Y2/2 オリーブ黒色中砂混り粘質シルト (下層)



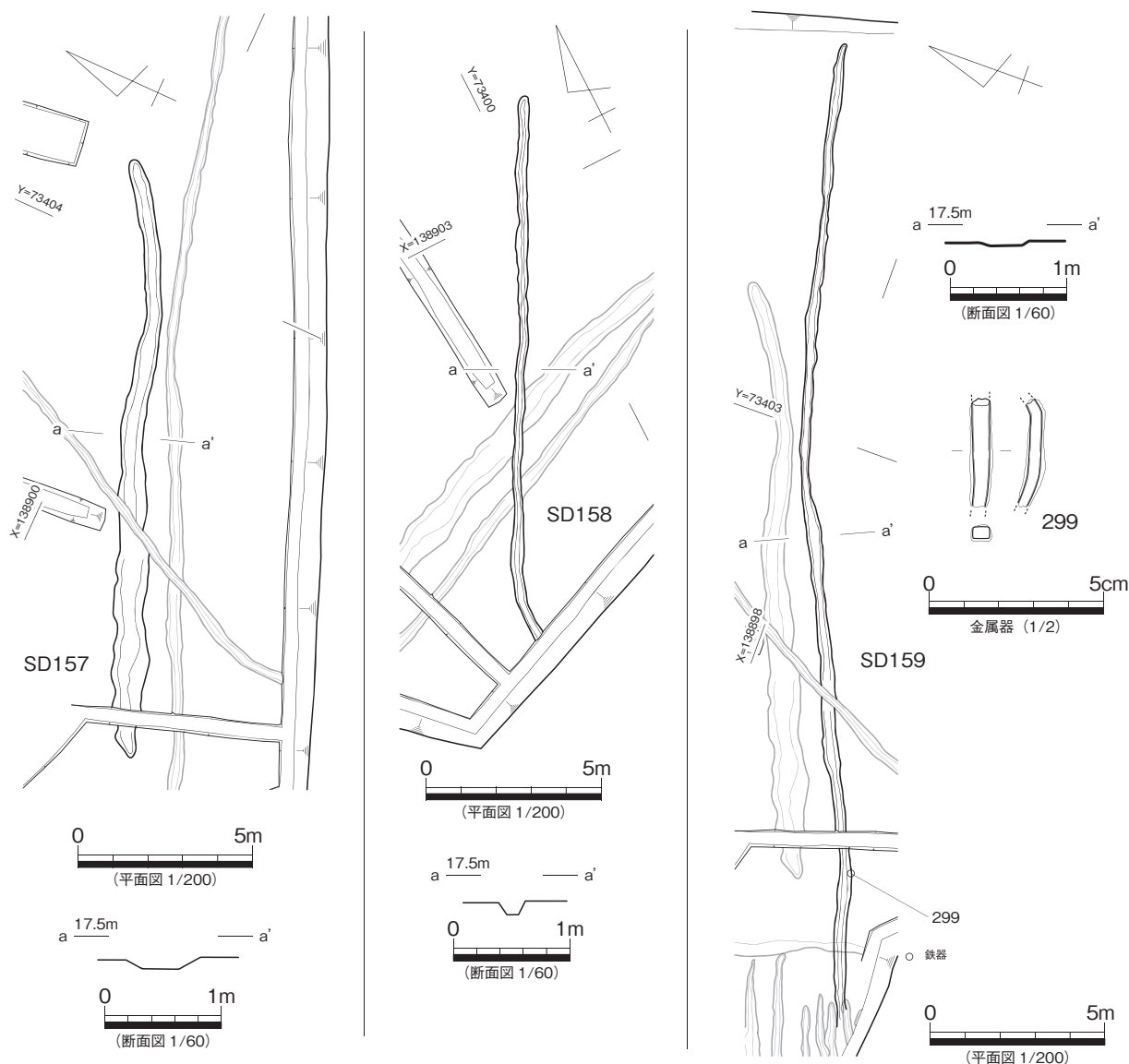
- f-f'
- 1 2.5Y3/1 黒褐色中砂混り粘質シルト (上層)
  - 2 10YR4/2 灰黄褐色中砂混り粘質シルト (上層)
  - 3 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色中砂混り粘土～シルト (下層)



- g-g'
- 1 10YR4/4 褐色細礫混り粘質シルト (下層)



第 59 図 SD145 平・断面・出土遺物実測図



第60図 SD157～SD159平・断面・出土遺物実測図

## SD145 (第59図)

本溝も、2・3区北部SD161上面を東西に走行する溝で、東端は調査区外へ延長し、西端は調査区内で途切れる。中央部付近で僅かに屈曲し、東半部は流路方向N 86.96° E、西半部は同N 81.53° Eに配される。上述したように北にSD144が並走する。検出面幅0.34～1.56 m、残存深0.06～0.36 mを測り、断面形は逆台形状ないしU字状を呈する。溝底面の標高は、西端部で17.9 m前後を、東端部で17.3 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、1～7層に細分され、堆積状況より上下2層に大別が可能である。上層は下層を掘り込んで堆積しており、改修の可能性が考えられる。

遺物は、コンテナ半箱程度の土師器甕・竈・羽釜、土師質土器皿・杯・台付杯、黒色土器A・B類碗、須恵器、布目平瓦、棒状土錘等の小片が出土した。いずれも層位別には取り上げられていない。288・289は土師質土器皿である。空港跡地遺跡編年Ⅱ-4～5期。290～294は同杯。295は黒色土器A類碗、296・297は同B類碗である。298は、東播系とみられる須恵器鉢の底部片で、接合資料が後述する包

含層2から出土した。内底面は使用によりやや強く磨滅する。

出土遺物は、土師質土器杯290・292や黒色土器碗などの後述するSD161からの混入と考えられる資料を含むものの、その他の遺物は13世紀後半～14世紀前葉に位置付けられ、本溝の機能時の年代を示しているものとする。

#### SD157 (第60図)

2区南西隅部第2面SX05上面で検出した東西溝で、東西両端は調査区内で途切れ、延長約17.1mを検出した。やや蛇行するものの、後述するSD161の南側をほぼ並走し、N 66.1° Eに配される。切り合い関係より、SD158より先行する。検出面幅0.4～0.9m前後、残存深0.05～0.08mと浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、17.20～17.25m前後で概ね一定し、何らかの区画施設の可能性も考えられる。埋土に関する調査記録は不明。

遺物は、備前焼甕とみられる焼締陶器の体部小片1点が出土したのみである。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、SX05より後出することから14世紀を上限とし、近世以前の遺構の可能性を想定する。

#### SD158 (第60図)

2区南西隅部第2面SX05上面で検出した南北溝で、南端は調査区外へ延長し、北端は調査区内で途切れる。切り合い関係より、SD157・SD159より後出する。南端より北約1mの位置で東へ屈曲し、北半部はN 27.79° Eに直線状に配される。検出面幅0.2m前後、残存深0.06～0.09mと浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、南端で17.35m前後、北端で17.15m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していたと考えられる。埋土に関する調査記録は不明。

遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難だが、SX05より後出することから本溝も14世紀を上限とし、近世以前の遺構の可能性を想定する。

#### SD159 (第60図)

2区南西隅部第2面SX05上面で検出した東西溝で、東端は調査区内で途切れ、西端は調査区外へ延長する。SD158と重複し、切り合い関係より先行する。中位付近で僅かに屈曲し、東半部はN 75.47° Eに、西半部はN 66.04° Eにそれぞれ配される。検出面幅0.3m前後、残存深0.04m前後と浅く、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、西端部で17.38m前後を、東端部で17.18m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土に関する調査記録は不明。

遺物は、器種不詳の土師質土器小片5点と、鉄釘1点が出土した。299は上下端を折損する角釘である。出土遺物より詳細な時期を特定することは困難だが、SX05よりも後出することから本溝も14世紀を上限とし、近世以前の遺構の可能性を想定する。

#### SD161 (第61～65図)

第1次調査区南半部を東西走し、南半部を後述するSR05に切られる、10世紀頃の番屋川の自然河川として調査・報告されている。上面よりSD143～SD146が掘り込まれ、SE02、SX01～SX04より後出する。なお2区で本遺構上面より方形の大型土坑状の遺構が調査・記録されている(香川県埋蔵文化